

場を歴、眉州に向ふ、これより江益す廣うして、流れ漸く緩く、遠岫嵐を横へ、近山翠を凝すの眺め、實に蜀中山水の淡を以て勝るもの、正午眉州城下に達す江口を去る五十清里、

三 眉州城は岷江の東岸に在り、古の眉山に屬す、即ち三蘇の故里なり、祠あり三蘇祠と曰ふ、蘇氏の宅址に建てらる、午天の炎熱を同じて之を訪ふ、祠城の北隅に在り、一面州署に接し、三面稻田を繞らし、景物甚だ肅索たり、頭門題して三蘇祠と曰ふ、門を入る、間然人無し、第二門を入り、正殿に至る、門砌路草莠莠として抜き出づ、謁者の躡かざるを知るべし、第二門、文献一家是父是子の二

額を掲ぐ、殿内に入れば、正面の壇上老泉、椅に凭るの塑像を安す、大きな人の如くにして、稍小、其前朱髦の木主を立つ、長さ三尺有奇、幅五六寸、題して宋贈太子太保蘇老泉先生神位と曰ふ、殿の兩壁、相對して二子の像を安す、東坡に題して宋端明殿學士贈太子文忠公蘇公神位と曰ひ、穎濱には宋門下侍郎諡文定公蘇公神位と題す、空殿餘物無し、三像三木主のみ、而して蛛網之れに挂り、積塵之を封す、荒涼憐むに堪えたり、殿後頽廢せる一院あり、其中蘇一家の木主を置けり、即ち三蘇に配祀するものなり、院側又一屋あり、古びたる卓子及び數脚の椅子を並べり、これに、就きて休息せる間に、祠の守者と覺しき道士、茶を持して出で來る、壁間に王漁洋の長古一扁を板に刻せるを掲ぐ、

屋に面して小池有り、黃萍水を封じ、叢竹渚を蔽ふ、池を決して小渠を作り、架するに短虹を以てす、虹を渡れば、草亭あり、遊息の爲めに作られたるものならんも、陋穢入るに堪えず、歩を移して、祠背に至れば、滿地の草萊、脛を沒せんばかりなり、其廢蕪此くの如くなれば、祠に謁すと、言はんより、寧ろ祠を弔するところ、言ふべけれ、さりとては、州民の先賢に對する、餘りの冷淡と謂ふべきなり、

眉州城、吳船餘の記するところ、に據れば、當時は繁華の地なりけんも、今や滿城索然、成都府より嘉定府に至る



見るとして陋ならざるは無し若し三蘇の故里にても無からんには何等特筆するに値せざるなり

城内は見るに足らず又た三蘇の遺蹟と云ふも三蘇祠以外に聞えたるもの無けれども城外江上の趣平遠淡雅人をして詩思を催すを禁せざらしむ舟に歸へり飯を喫し乍ら山の姿川の流を眺めつゝ上家塲張家坎江花堰太平塲等を過ぎ青神縣を西岸に見午後六時といふに岷岸有名の中崑に至れば眉城は早や六十清里の後に在り

中崑寺

中崑は江の東岸に在り山水の幽邃と寺觀の壯嚴と黃山谷の遊蹟とを以て蜀中有數の名勝に數へらる其路岸林の間にさゝやかなる一徑を通せるのみにて打ち見たるところ尋常の樹林に過ぎざれば預じめ舟夫に分付せずんば當面錯過の悔を貼すことあり時刻は稍や遅きに失したれども舟を維ぎて岸に上る水際より起る怪げなる石段を登り小溪を踰れゆれば石を疊して臺とせる處るが上に建てる古寺の下に出づ門に古中崑と書せる題額あり寺中には數軀の羅漢像を安置せりこれは怪しむに足らざるが殿の中央に孔子弟と思ほしき像を祀れるは何の故なるを知らず此處は中崑入口なり范記を見れば奥の院までは五里に過ぎず日暮

中崑寺の勝景

れざる間に急かんと忽忽舊路に返し溪に沿ひ右折して進む溪韻急蟬自ら塵外の幽境なり往く凡そ十餘町にして一天俄に搖き陰り今にも一雨來らんす勢雨具の用意なければ踵を回らして舟に返り遂に中崑の奇を究むるを得ざりき歸途徑旁に幾個の磨崖を散見せるが林暗さか爲めに其文字を讀むと能はず今吳船録六月壬午の記を録し以て後遊の人に便にす記に曰く發眉州六十里午至中崑號西川林泉最佳處相傳爲第五羅漢諾許那道場又爲慈姥龍所居登岸即入山徑半里有喚魚潭水出崑下莫知淺深是爲龍之窟宅人拍手崑上則群魚自崑下出然莫敢玩兩年前有監司從卒浴其中若有物曳入崑下翌日屍浮出江上又半里有深源泉凡五里至慈姥巖巖前即寺也(中崑寺)凡山中亭院之榜皆山谷書山谷貶戎州今叙州也有親故在青神遂至眉遊中崑山谷年譜に據るに山谷元符元年六月を以つて始めて叙州に至り三年七月舟を發して岷江を泝り其始を青神に省す十一月青神より復た叙州に還る其中崑に遊ぶは年の八九月の間に在り自此不復西蓋元不識成都疑有所畏避云入寺側出石磴半里餘有三石峰平正如高樓巍闕嶽巖奇偉不可名狀前三峯後一峯如品字前三峯之間容一徑可以並行至中峯之下有石室諾矩那菴也舊說有天台僧過病僧與一木鎖匙曰異日至眉之中崑以此匙扣石笋我當出見已而果然天台僧惘然識爲病僧挈



以赴海中齋會既回、如夢覺、自此中崑之名遠顯、三峯上人謂之石筍、余觀之乃三石樓、筍蓋不足道、又有寶餅峯、數百尺、上侈下縮、真一古壺、亦甚奇怪、後中崑避暑於此、和氏に就き、其勝否を問ふに、范記言ふが如きは、僅にその一局部に過ぎずとぞ、後の此地を過ぎらん人、預め其行程を計り、早朝にして眉州を發せば、應さに能く其奇を探るを得べし、

鴨婆灘を下る

中崑にて間取りたる爲め、舟に還れば、日殆ど没せり、漢陽壩まで下らんとて、再び舟を發す、進むこと二十清里にして、鴨婆灘を下る、黒浪船を打ち、舟屢ば暗礁に觸る、舟砲等舳艫に立ち、呼應して相警む、舟の將さに灘に入らんとするや、左岸にかゝれる夫船之を認め、其船止まれと嚴令す、實は制現の如く、其旁に漕ぎ付け、通行票を示すを要するを、舟夫等其勞を厭ひ、暗に乗じて乗り抜けんとしたるなり、船吏に呼び止められたる舟夫は、空嘯きながら、唯だ一言外國人の座乗せりと叫べば、砲船は二の句も繼がて沈黙せり、灘を出で十清里にして、漢陽壩に達す、古佛洞を去る百九十清里、泊す、漢陽壩は西岸に在り、小津なり、人家數十、酒、食、菜、炭、皆就て求むべし、壩を去る約五清里にして、峽に入る、此峽長さ凡そ二十清里、名けて平羌峽と曰ふ、李白峨眉山月歌の影入平羌江水流は、即ち此處なり、

平羌峽

十九日、板橋溪に至りて、眠覺む、平羌峽は黒甜郷裏に過ぎぬ、後路を顧るに、此時江轉じ、水廻り、舟遠く峽外に出でたり、悔甚し、板橋溪は右岸の高崖上に在り、舟夫を遣して鹽炭を買はしむ、進む十清里、游支灣、又進む、十清里、桓梁子を過ぎれば、江大に開く、望み見て、洋洋たる大流なり、遙かの下游に當り、城墻の水に臨めるを認む、之を嘉定府城と爲す、

嘉定府

桓梁子を去る十五清里、午前十一時始めて城下に達す、成都より嘉定に下る、通常四日程なれども、高水に際したるを以て、僅に二日餘にて着せり、城下には大船小船、一面に碇泊し、我等か舟は何處に寄せん様も無し、左へ右へと漕ぎ廻る中、少しく寛きたるところを發見したれば、他船の占めざる間にと、逸早く舳を挿み、割り込まるゝだけ割り込み、隣船を傳ひて上陸す、橋子、行李、炊具、寝具等の陸揚、一通りの面倒に非ず、一應陸揚を了したる後、再び舟に赴き、遺品やある、舟夫等か隠匿せしものは無きかと、隈無く検査したる上、約定の船費と若干の酒錢とを給して舟を棄て、橋を急がせて城内に進む、橋夫に命じて、第一等の旅館に案内せよといひたれば、やがて去年服部和田兩大人も投宿ありし處なりとて、富有官店と名くる一棧に昇き入る、余先づ橋を下りて、棧房を検するに、兩位大人投宿のどころかは知

成都府より嘉定府に至る



らざれども、言語に絶せる状況に、大野木田兩氏もこれはとばかり驚かれ、更に他の旅店を擇ぶに決し、再び炎天を冒し、此處彼處と尋ねし末、富有官店より程遠からぬ文星官店といふに投じぬ、其内容は前と大差なけれども、此上には求め難かるべければ、己むなくこゝに宿することとせり、

嘉定府城は、岷江と大渡河との滙合點に在り、古の嘉州是なり、人口三十餘萬も有るべく、貨物の集散地として、其大重慶に亞けり、下流に在りては、叙州瀘州忠州等ありと雖ども、商務の盛、皆嘉定の上に出づること能はず、城内の工藝品として尤も有名なるは織物なり、其中嘉綢と稱するもの、此地の特出に係り、省中各市に向ひ、盛に之を輸出せり、此地は川漢鐵路の預定通過點に屬せり、他日一大車站の設置せられんには、其隆盛今より預想すべからざるに至らん、此日、余は一隻の英國砲艦、埠頭の上方に淀泊せるを見たり、蓋し夏時の増水に乘じ、重慶より遡航し來れるなり、重慶より嘉定までの航路は、宜昌より重慶までと比し、危険も少く、水量も多けれども、兎も角、嘉定といへば、楊子江の殆ど源流といひて可なる程の上流なり、然るを能く其武を提げて來り臨める積極的政策、何ぞ其れ壯にして、且つ烈なるや、翻つて我日本の云爲如何にと願ふるに、重慶府にさへ、未だ一隻の軍艦を派遣する無く、上海にて目

英國砲艦

旅店の暑

下機装中とか、然らずとか、風の便りに聞く位のものに過ぎず、国力及ばざる爲めとは言へ、無念なる事共なり、

却説、一行は文星官店に投ずるや否や、總身に濡る汗を拭はん爲め、客房に入りしが、俄に戶外より飛込みしこととて、室内は冥冥として咫尺を辨せず、手探りに皮靴より敷本の蠟燭を出して、之を點せり、室は今まで閉ぢ立てられ居たりと見え、蒸氣と燠氣とにて、あたかも、甌中に坐したらんが如し、室外に出づれば、斜に照り付くる日光の、煎り揚げんばかりに烈し、出入維れ谷り、裏路次の日蔭を偷み、極めて少量の涼を納れたり、

行李の整頓了したれば、いざ炊事にかゝらんと、室の入口に炊事場を設け、俵を荷に走らし、米鹽薪炭、菜肉を買ふ、往來より見通しの處にて、余等分擔に従ひ、各炊務に服す、日本の大人も此に至りて半文錢に値せず、夏の日、屋内に在りて南京蟲に襲はれんも、愚なれば、見物に出懸けんと、午後二時といふに、旅店を立出で、先づ府城の對岸なる凌雲山を指す、道すがら市街の状況を見る、凌雲に行く道に當るところは、城内第二の大街とかにて、内外各種の商店、軒を接して立ち並び、旅店の汚穢なるに引き換へ、石街を夾める店舗、宏壯にして清潔な、

成都府より嘉定府に至る



凌雲山に  
登る

やがて碼頭に出づ、渡船にて彼岸に到る、此渡しは市民の職資に成り、一切渡賃を取らざる定めなり、こは他地にも往往之れ有りて、俗名けて義渡と曰ふ、彼岸は一帯の高丘にて、凌雲山は其右角に聳ゆる最高の一山なり、船の着處より直に石階を起せり、之を上れば人家數十戸の小村あり、村首門を設け海音寺と題す、村中破寺一所あり、即ち海音寺なり、寺前を過ぎれば、崖を削りて作れる石階あり、之を登る凡そ三折にして、凌雲の山腹に出づ、其道左に崖壁を控へ、右、大岷の激流に臨む、左崖面、磨崖の字像甚だ多し、但だ岩質鬆粗なる爲め、多くは剝蝕して讀む可らず、其中回頭是岸の四巨字を刻せるものあり、每字方凡そ三尺を超ゆ、筆者詳かならざれども、字畫勁健、凌雲上觀るべきもの、一に數へらる、行く二町餘にして、道又た陡す、坡下に立ちて仰げば、上方遙に樓門の屹立するを見る、道側皆林樹闕ぐるところ、江光、面を射んと欲す、

山上、大寺あり、凌雲寺といふ、仰ぎ見る山門は即ち其頭門なり、門に顔して有、飄然意と曰ふ、楹聯、九頂雲霞披霧出、三歲風雨渡江來の句あり、第二門に至る、題して千青堂、而直上、支百川而東之と曰ふ、正殿に至る、規模極めて壯なれども、惜くは大破の後、尙

は未だ修理を興へず、正面なる本殿を始め、左右兩旁の廻廊に至るまで、簷崩れ柱傾くに打任せてあり、廢頽のまゝにて、一廉凌雲の勝を加ふれば、若し完全に修繕せられたらんに、は獨り凌雲山のみならず、四川全省の名刹として仰からるゝを得べけん、たゞ今日に在りて、幾萬兩に上る修繕費を收めんこと、極めて困難なる



凌雲山

山べし、本殿の正面には釋迦の大像を安置し、その左右の壁前には、十餘體の羅漢塑像を配置せり、殿後の廊間に至れば、數百餘體の小木佛を並べり、前年和田氏登峨の時、途中の某寺にて、唐時の彫刻に成れる絶好の木佛を得られたる例あれば、余等も何か掘出しをせんもの、一僧を伴ひ、塵埃にまみれ乍ら、彼れ此れとあせり見たれども、不幸にして徒勞に了りぬ、

主僧出で來り、延て客廳に案内す、客廳は廢寺ながらも、いさゝか清雅の趣を備へたり、余はかねて凌雲の東坡と關係あるを知れば、何か其書碑にてもあらんと思ひ、僧

成都府より嘉定府に至る



に問ひたるに、東坡の書畫の拓本は數様あり、されどもは賣物に非ず、目下當山修繕  
 費募縁中なれば、應分の喜捨あらば、進上すべしと答ふ、余先づ其拓本を出さじ、め三  
 人各五六種を取り、一切にて銀三元を與へたり、石摺の代金としては、頗る高價と謂  
 ふべし、

凌雲寺は唐代の創建に屬するといふことのみは明かなれども、其何時なるかは、余  
 未だ之を考へず、樂山縣志に據れば、明初に重建せしが、明末に兵火に燬かれたり、其  
 後康熙六年、蜀畧李紳雲之を重修し、乾隆中知縣衷以堦といふもの、又之を修理し、以  
 て今日に至る、

寺を出で、岷江を右方に俯し、崖上の途を左行す、一亭崖角に在り、其下絶大の彌勒像  
 を江壁に刻す、蜀中號して嘉定の大佛と名く、身を彎して上より窺ふ、僅に其面の一  
 部を認むべし、尺餘の毛茸、目上に生じ、自然の眉毛を成せり、吳船錄記して曰く、唐開  
 元中僧海通、始鑿山、爲彌勒佛像、以鎮之、高三百六十丈、頂圍十丈、目廣二丈、爲樓十三層、  
 自頭面以及其足、極天下佛像之大、兩耳猶以木爲之、佛足法、江數步、舟を行るに非ら  
 ずんば、其全像を見るべからず、然れども佛像の前は、佛頭灘と號し、岷江大渡河二水  
 の會衝に當るを以て、波浪險惡、近き易からず、

嘉慶の大佛



東坡讀書樓





東坡讀書樓

進む凡そ二町にして曲磴左に通ず、此邊一帶地勢、凌雲寺の在るところに比すれば、更に高くして、且つ樹といふ樹も無ければ、眼界廣潤能く矚望を恣にすべし、磴に従ひて登る、其窮るところを凌雲山頂と爲す、頂上廟宇に似たるもの一所あり、之を東坡樓と爲す、世に謂はゆる東坡讀書樓是なり、東坡在る時、此地の風光を喜び、讀書樓を築きし所、今の東坡樓は後人其舊規に従つて營みしものなり、

東坡の晋字

東坡樓、其域繞らすに高牆を以てす、其中樓亭數屋を構ふ、屋中或は石卓石凳を置くものあり、庭間荷池あり、彫石あり、慈竹叢あり、木犀樹林あり、其善く地勢と建築物とに配合して、安排の宜しきを得たる、成都杜公祠、庭武侯祠と同調異曲と謂ふ可し、而して東坡樓は城内の南端に位置せり、樓の階下は守者の住所に充てらる、正面に佛像を祀れるは東坡と縁あるものなるや否や、壁間多く坡仙の晋を刻せる碑板を笥入せり、然れども大底覆刻にて、其神を存するもの罕なり、癸卯九月十六日、挈家來遊の一律、亦此内に在り、此詩本と是れ東坡か天和寺に於て賦し、石に鐫して同寺内に置きしを覆刻せる者なれども、石版にして工善なる爲めにや、字鋒歴然、風韻活躍、甚に珍とするに足る、坡は宋人なり、才靈最る可らずと雖ども、其詩晋に於ける亦た宋園の外に出づる能はず、今此書善く晋法の道媚を發し、而かも刻畫模勒の痕無し、東



坡たる所以なり、

前記の天和寺は、陝西省扶風城南の飛鳳山に在り、其山漳水の南に位す、詩は則ち坡此に遊んで作るどころなり、此寺後ち廢せられたりしが、明の嘉靖中、馬伏波祠を其址に移せりといふ、其天和寺の詩を將つて、凌雲の東坡樓に刻するは、兩寺の景勝相似たるあるが爲めならん、

他の一書は木刻なり、同じく東坡樓中に在り、その字句坡文の一節なるが如し、余未た其全篇を見ず、其書前の一書と比較するときは、殆ど別手に出づるの觀あり、彼は逸氣を以て愈り、此は驕色を以て立つ、彼は沈靜にして硬、此は跳峻にして健、若し夫れ廬山の面目は、無乃彼に存せずして此に在り、而して其意度骨氣に至りては、兩書遂に相軒輊すること能はず、

東坡樓に來れば、此兩書皆以て樓中にて購ふを得べし、必ずしも、凌雲寺に就き、名を喜捐に托して買取るを要せざるなり、

東坡樓の  
三蘇の像

樓上に登る、中央一龕を置き、中三蘇の像を祭る、二子の像、其幼時に係り、皆總角を結ぶ、眉州三蘇祠祀るところと同じからず、樓、三面開放、東は凌雲一帶の連脈を望み、西直に岷江の浩流に臨み、又遙に三峽を七十里外の雲際に揖す、樓の南西、小溪を隔て

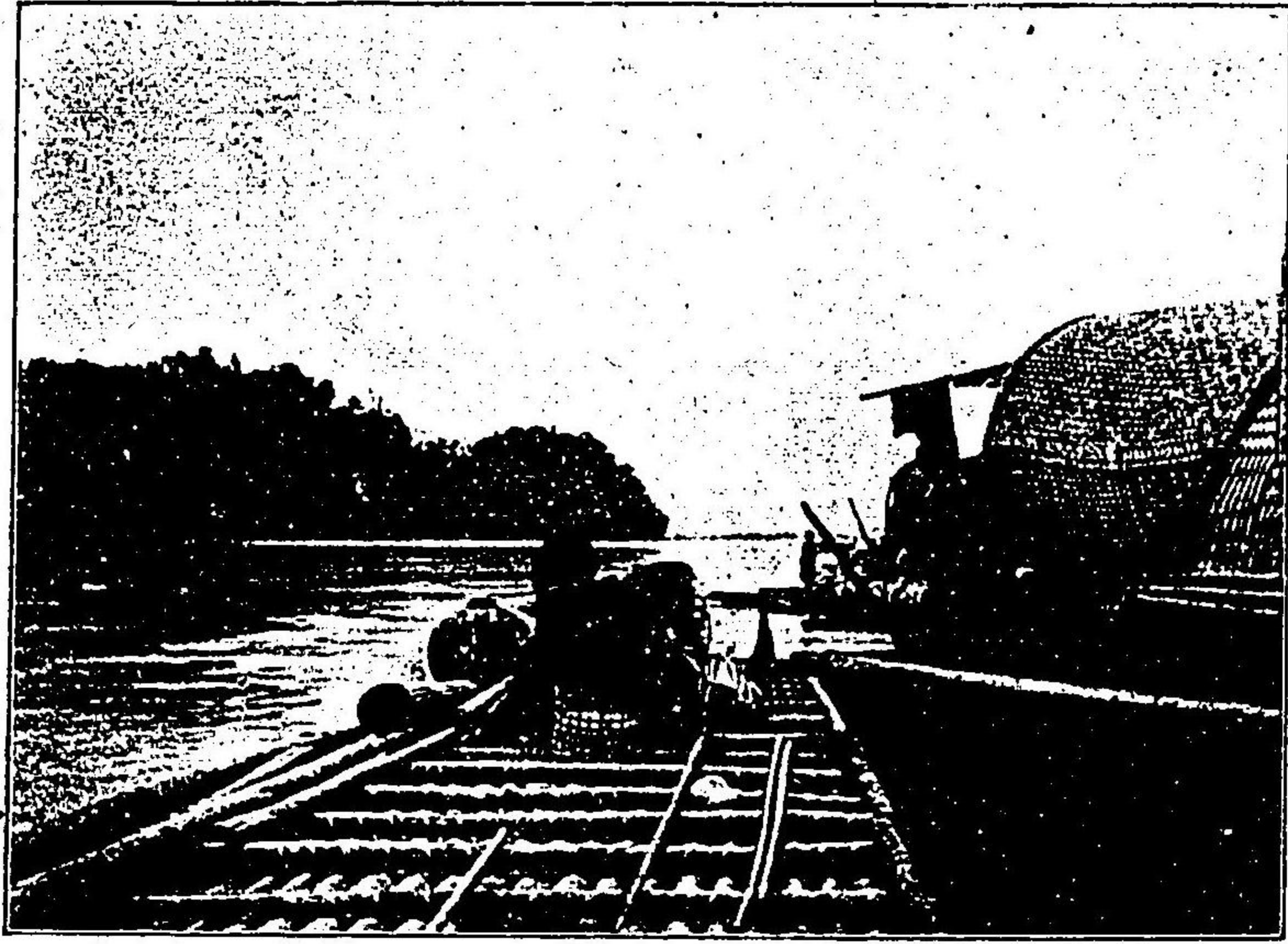
大正九年九月十六日  
東坡樓の  
蘇轍題  
遠望若可及  
欄碧瓦海  
一柱之止慮百迴  
頭木在見  
摩高谷市  
臨風莫長嘯  
貴鑑浩難水

東坡樓の壁の碑  
高さ一尺六寸幅二尺三寸

吾來陽羨船入剡  
溪秀惡點然如  
平生之欲還將歸  
老殆是前緣王  
逸少云吾平當  
樂死強虛吾任好  
種植能不自接菓  
好栽橘 東坡居士

東坡樓の板の碑  
高さ三尺四寸五分幅九寸五分





江岷より烏有山を望む

一山あり、烏有山と曰ふ、山舊と烏牛  
 と呼ぶ、烏有の名は、山谷此地を過ぎり  
 て改め命するところなり、俗傳ふ、此山  
 亦た秦時、李冰、水利を通するに當り、鑿  
 成するところに係ると、因て又離堆山  
 の稱あり、灌縣内江の離堆に擬するな  
 り、此山、江中に斗出し、兀として水面よ  
 り起る、削壁百尺、其上被ふるに蒼林を  
 以てす、世以つて金陵の燕子磯に比す  
 山上、寺あり、正覺寺と曰ふ、遠きよりし  
 て之を望めば、唯だ其塔頂の林表に擬  
 づるを認むるのみ、自ら是れ、凌雲の外  
 に在りて、一頭地を出せるものなり、春  
 時、三江皆漲り、烟雨秋深きの日に至り  
 ては、萬頃碧玻璃中、青螺一點を著くる



郭璞の書  
居  
墨魚

東坡樓  
一の眺望

と云ふ、山上又爾雅臺あり、晉の郭璞爾雅を注する處なりと傳ふ、山下奇魚を産す、墨魚と名く、俗以て東坡か硯墨を食ふて化する所と爲す、毎年春後、子を泛ぶ、漁人燈火を以て之を照すも、止りて去らすと云ふ、余未だ食はず、東坡樓絶好の眺めは、北方より稍や西方に互りて見渡したるところにて、廣原百里の間、遠くは大渡河、雅河、岷江の、委蛇として各異方より來るもの、蛾眉、青城、彭縣諸山の、黛を抹して透迤たるもの、近くは嘉定城、萬景樓、若くは蟹舍漁莊、皆一回頭の中に在り、萬景樓、嘉定城背の高邱に立つ、正に東坡樓と相呼應すべし、邱上鬱林、樓の一角斜に其右に抽き、鉤簷翼然、勢飛ばんと欲するもの、我彦根城に比し其奇更に過きたり、東坡樓觀るところ、略ほ此くの如し、若し夫れ氣象遼落、江山映帶の趣、目能く望むべし、口能く語るべし、筆遂に能く寫すどころに非ざるなり、蜀中江山の雄大、予則ち之を以て其冠冕と爲す、東坡か頗願身爲漢嘉守、載酒常作凌雲遊と賦せる、宜なるかな、

凌雲九頂

凌雲山、蜿蜒連亘、九峯を成す、因て又九頭山、九頂山、小九嶷等の名あり、所謂九頭、棲鸞、兌悅、祝融、丹霞、擁翠、集鳳、就日、望雲、及び靈寶是れなり、棲鸞峯、其の巨擘たり、即ち東坡樓の在る所なり、唐の會昌以前、各峯皆寺有り、と傳ふれども、今は棲鸞峯に、凌雲寺、及び其後方に一二の廢刹を存するのみ、樂山縣志に据れば、山上又東坡洗墨池、東坡書

萬景樓

院、競秀亭、か易を注せしといふ、治易洞、楊子雲宅址、東坡磨崖碑等見えたり、其迹並に考ふ可らず、  
凌雲を下り、江を渡りて府城に歸り、續いて萬景樓に赴く、樓、宋の宣和中、嘉州の牧呂由賊の創むるところ、范石湖の詩、若爲喚得培翁起、題作西南第一樓是なり、樓在る所の邱、高標山と名く、直ちに城隅より屹立す、危磴山麓より起る、曲折數百級、始めて其巔に達す、山上樓大にして地窄、極めて徘徊に便ならずと雖も、其位置城角最高處に在るを以て、城市は勿論、大江を隔て、凌雲九頂、烏有山に對し、又遠く東川諸山を望む可く、萬景の名遂に經稱に非ず、然れども、之を東坡樓に比せば、登臨の佳、及はざること遠し、嘉定城内には萬景樓の外、黃山谷陸放翁等の遊蹟、其他名勝少からざる山なるも、炎暑を衝きて、遍く之を探るに堪えざるを以て、嘉定見物は、姑く之を以て終結とせり、

旅館に歸れば、又た炊爨に忙し、やがて晩食を吃し、書信幾通を認め了して、寢に就く、寢に先ち、南京虫豫防として、用意の蚤取粉をした、か寢臺に撒布し、これにて今夜は免がるべしと、やをら身を横へたるが、やゝありて顔、首手足を別たす、一時に襲ひ來り、奇痒言はん方無く、到底双の手にては掻きおほせず、加之蚊帳の隙隙より潜り

成都府より嘉定府に至る



夜歸の一

來る蚊軍に整し立てられ前狼後虎進退谷らんと欲す又加ふるに密室の燠燂を以てし五體さながら蒸さるゝばかりなり夜半に及び雷雨俄に起る驚き醒むれば滿室爽涼快言ふ可らず將さに改め眠らんとすれば腹上にほとりと水の落ち來るにぞ勿ね起き見れば屋漏夥く櫛蓋に堪へたりこはならじと寢臺を下れば室内は瓦間より打込むしぶきにて此處一區の雨天地なり辛くも蚊帳の水を傾け此度は傘を翳して寢に就く支那旅館もこゝに至れば無乃ろ滑稽といふべし

玻璃江眉州城前の江を指す

宋陸游

玻璃江水千丈深不如江上離人心君行未過青衣縣妾心先到峨眉陰金樽共嚼不知曉月落烟渚天橫參車輪無角那得往馬蹄不方何處尋空憑尺素寄幽恨縱有綠綺誰知音愁來只欲掩屏睡無奈夢斷聞疎碓

按獄眉山舟行

宋趙抃

携琴曉出錦官城千里秋原一望平放舸急流身覺快披雲孤嶼眼爭明農田雨後哇哇綠漁笛風前曲曲清訊獄遠邦先滌慮郵哉休戚在民情

中巖

唐張方

城南帶月架輕篷趁泊中岩聽曉鐘峭壁藤蘿天一罅蒼岩烟雨石三峯潭深我自知魚樂

禪定誰能識古踪野馬風花寒食近青山原不爲春客

中巖

宋范成大

赤巖倚鈴屨翠邏森成削岑蔚嵐氣重稀間暑光薄聊尋大士處往叩洞門鑰雙撐紫玉關中轟翠雲帳應供華藏海歸坐寶樓閣無法可示人但見雨花落不知龍湫勝何似魚潭落夜深山四來人靜天一握驚看松桂白月影倒林壑門前六月江世界塵漠漠寶瓶有甘露一滴洗煩濁捫天拔斗杓請爲諸君酌

中巖寺

明楊慎

高閣諸天近長江各路分帆開山吐月鐘動水連雲漁唱通宵起樵音隔浦聞佛香潭不斷散作滿崖薰

翠微連寶地青鶴壓雲堤俯瞰行人小平瞻遠樹齊振衣淹暮展廻棹聽寒鼓雨歇楓林靜荒鷄尙未啼

慈姥巖

宋范成大

山靈知我厭塵土喚起盤雷壓午暑松風無力雨絲長散作毵毵雪塵舞巖前懸溜珠簾傾安得吹來添玉觥詩成酒盡腸亦斷休喚佳人唱涓城

中巖

明王一麟

成都府より嘉定府に至る

二七九



莫言此處非幽僻，隔斷塵囂有碧流。臺外無山何礙月，樓頭不雨亦生秋。烟開萬象波中浴，雲聳三峽天際浮。勝地祇須騷客至，問來笑挈一樽遊。

中巖

明 余子俊

步入中巖日已斜，老僧錫杖入烟霞。呼童淨掃維摩石，留客頻煎石筍茶。寶鼎香烟添柏子，膽瓶春色上梅花。倚欄看罷三峽笏，始信招提景最佳。

峨眉山月歌

唐 李白

峨眉山月半輪秋，影入平羌江水流。夜發清溪向三峽，思君不見下渝州。

九頂山

宋 蘇軾

少年不願萬戶侯，亦不願識韓荆州。願身爲漢嘉守，載酒時作凌雲遊。虛名無用今白首，夢中却到龍泓口。浮雲軒冕何足言，惟有江山難入手。峨眉山月半輪秋，影入平羌江水流。謫仙此語誰解道，請看見月時登樓。笑談萬事真何有，一時付與東巖酒。歸來還受一大錢，好意莫違黃髮叟。

九頂山醉歸

宋 陸游

峨眉月入平羌水，歎息吾行俄至此。謫仙一去五百年，至今醉魂呼不起。玻璃春滿琉璃鍾，官情苦薄酒興濃。飲如長鯨渴赴海，詩成放筆千觴空。千年看盡人間事，更覺麴生偏有味。

君不見蒲萄一斗換得西涼州，不如將軍告身供一醉。百盞載酒遊凌雲，醉中揮袖別故人。依依向我不忍別，誰是峨眉半輪月。月窺船窓挂凄冷，欲到渝州酒初醒。江空曩曩鈎絲風，人靜翩翩葛巾影。哦詩不睡月滿船，清寒入骨我欲仙。人間更漏不到處，時有沙禽背船去。

觀九頂山

明 王傳

九頂峯巒插太清，西戎屏障倚長城。四時積雪舉頭見，千里秋毫入眼明。天簇蓮華朝白帝，地分鼉足奠蒼生。我來坐嘯情無限，要得憑高望帝京。

凌雲寺

唐 岑參

寺出飛鳥外，青峯戴朱樓。搏壁躋半空，喜得登上頭。始知宇宙濶，下看三江流。天晴見峨眉，如何波上浮。迥曠烟景豁，陰森棕柏稠。願觀區中緣，永從塵外遊。回風吹虎穴，片雲當龍湫。僧房雲濛濛，夏月寒飈颼。迴合俯近廊，寥落見遠舟。勝概無端倪，天宮無淹留。一官詎當道，欲去令人愁。

凌雲寺

明 蔡楨

宿雨朝來霽，江邊見九疑。青嵐含秀色，碧樹見朝曦。門對三峽古，山迎萬景奇。可憐佳麗地，只欠少陵詩。



巴 蜀  
凌雲寺

明 安 磐

竹林斑斑日上遲，鳥啼花暝暮春時。青衣不是蒼梧野，却有峨眉望九疑。  
青衣江上水溶溶，隔岸遙聞戒夜鐘。暫借竹牀聽梵放，月華初到第三峯。

凌雲寺

明 彭汝賓

誰從雲際結孤亭，山壑蒼烟倚翠屏。二水欲浮天竺影，一簾初落月華清。詩盟敢向尊前定，  
塵眼常於座上醒。歸月送人涼露滴，石洲古渡未全冥。

郭璞巖

宋 蘇 軾

放舟沫江濱，往意念荆楚。擊鼓樹兩旗，勢如遠征戍。紛紛上船人，櫓急不容語。余生雖江陽，  
未省至嘉樹。峴嶼九頂峯，可愛不可住。飛舟過山足，佛脚見江滸。舟人盡欲容，競欲揖其拇。  
俄頃已不見，鳥牛在中渚。移舟近山陰，壁峭上無路。云有古郭生，此地苦箋注。區區辨蠅魚，  
爾雅細分縷。洗硯去殘墨，通水如墨霧。至今江上魚，頂有遺墨處。覽物悲古人，嗟此空自苦。  
余今方南行，朝夕事鳴榔。至楚不復留，上馬千里去。誰能居深山，永與禽獸伍。此事誰是非，  
行行重回顧。

爾雅臺

宋 王十朋

隱迹江山郭景純，學兼儒伎術通神。蟲魚草木歸箋注，何害其爲磊落人。

洗墨池亭

明 袁子讓

江上高山山上亭，乾坤到此有餘清。天邊正隸飛來合，檻外峨眉畫不成。香泛墨池春後雨，  
風傳仙梵月中聲。登臨始覺浮生苦，一醉從教減官情。

方響洞

宋 黃庭堅

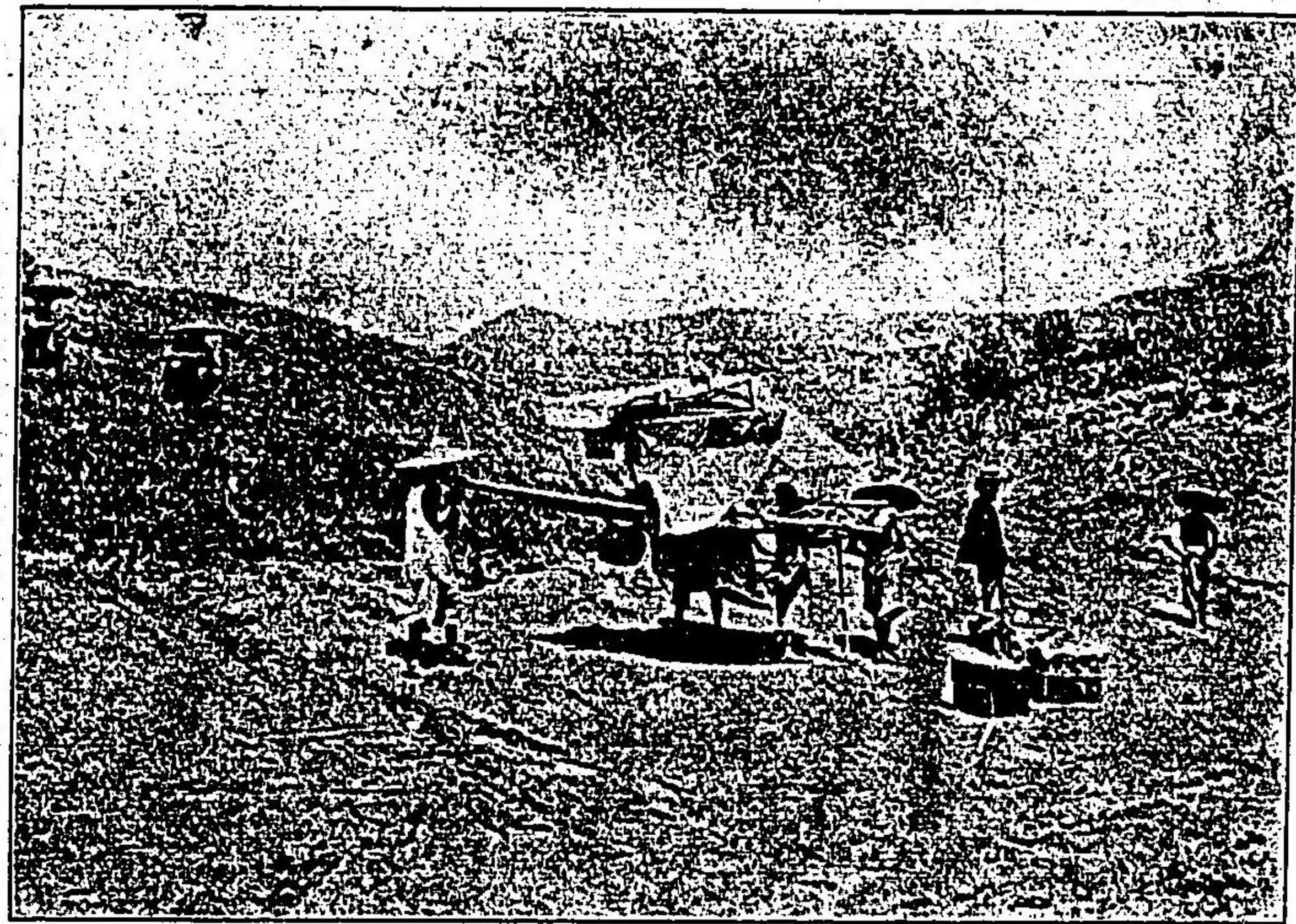
古人題作丁東水，自古東丁直到今。我爲更名方響洞，信知山水有清音。

萬景樓

宋 范成大

左掖九頂雲，右送大峨眉。月殘山剩水，不知數一一。當樓供勝絕，玻璃灑錦遙。相通指揮大渡，  
來朝宗。川靈胥命各東去，我亦順流呼短篷。詩無傑語慚風物，賴有丹青傳小筆。仍添詩客，  
倚闌看，令與山川相映發。龍彎歸路遠，鳥尤棟雲簾雨。邀人留，若爲喚得涪翁起，題作西南  
第一樓。





中 旅 の 季 夏



上 同

朱君長

漢朱君長之石碣



嘉定府を  
發す

白蠟樹

蠟樹

蠟蟲

嘉定府より峨眉縣に至る

二十日 午前七時客棧を發して峨眉に向ふ、高標山下を經、西門を出づ、雨後の草路、涼露玉を綴る、時恰も玉麥蜀黍の收穫期に屬し、村家の圃場處として之を乾さゝるは無く、桑として碎金を敷けると見まがふばかり、又西門外より此邊一帶に亘り、桑樹に似たる木、枝を交へて繁茂せり、余此行を畢へ、成都に歸りし後ち、始めて其木の有名なる白蠟樹たることを告げられぬ、今左に余が聞き得たる所により、白蠟採集次第に就き、左の四項に分ち之を記せん、四項とは蠟樹、蠟蟲、蠟樹及び白蠟を謂ふ、蠟樹は蜀人の冬青樹又は爆乾蚤と呼ぶものにて、其白蠟を分泌する蠟蟲を發生せしむる木なるを以て、一般に蠟樹と稱せり、此樹は多く省内寧遠府及び建昌地方の山間に生じ、又地味の相適する所には、省内各地に、多少の栽培を見る、其北蜀地方に産するを聞かざるより見れば、此樹は暖地に適するものと思はるゝなり、蠟蟲 蠟樹は、三四月の交に至れば、其枝上に褐色にして豆状を成せる没石子を着く、没石子の殻中には白褐色を帯べる軟塊を充せり、是れ即ち蠟蟲の集合せるものにて、熟視する時は、それが益爾として微小なる運動をなせるを發見すべし、蠟蟲の一個は、其大さ僅に肉眼を以て形狀を見得らるゝに過ぎずして、六足と一對の感角を



備へ、運動甚だ快捷なり、没石子中には、蠟蟲の外、又た一個の蛹蟲の小白菌を作りて、其中に寄生するあり、此蟲は一定の時間を經過せば、化して六足と一對の鋸子と、一本の長鼻とを有する、黒色の甲蟲となる、其形に因り、土人之を牛兒と呼ぶ、牛兒は没石子の内皮を食ひ、其營養となす、牛兒の蠟蟲と室を同くして生ずるは、蠟蟲に取り一大利益を與ふものにて、牛兒自身が外界に往來するが爲めに、殻皮に穿てる小孔は、やがて蠟蟲の通路とは爲るなり、若し牛兒が小孔を開くに非ずば、微細なる蠟蟲の力は、到底殻皮を破るに堪えざるなり、蠟蟲にして殻外に脱出する道無くば、人工を以て通路を作り與へざるよりは、他日没石子と偕に之を蠟樹に遷すも、蠟蟲は樹上に出で、其蠟液を分泌するに由無し、

蠟蟲運搬

蠟蟲は、毎年四五月の頃を以て、没石子に含まれたるまゝ、彼の牛兒と與に蠟樹より掻き取り、紙包、藁包、或は長形の竹籠に入れ、務めて迅速に、蠟樹所在の地に運ばる、其運搬途中に於ては、包内に生ずる熱氣にて蠟蟲の脱出するを防ぐが爲め、時時裝包を解き、涼氣を通するなり、裝包は毎包風袋込みにて約我五十匁弱の重量を有し、此價、蠟蟲産額の豊凶に由りて異なるも、凡銀半兩乃至一兩一兩日貨大約一圓四十錢の間、に在り、蠟蟲一包より産する蠟は約三四斤にして、蠟價は、每百斤銀四十兩位なり、

り、ホージー氏の調査する所に據れば、一千八百八十四年、蠟蟲の嘉定に運ばれたるもの、一千三十荷六十包を以て一荷とすに過ぎず、内、建昌より一千荷、魁爲より三十荷を送れりと、

蠟樹

蠟樹は、余が嘉定城外にて見たるは、悉く栽培せられたるものに屬し、高さ一丈四五尺、幹の大なるどころ、徑五六寸もありしと記憶す、葉は、形も色も殆ど桑に類し、枝幹の色も亦た桑の如く淡褐色を帯びたり、而して其枝は、蠟の膠着せし時、剪伐するを以て、長さ多くは六尺を超ゆる能はず、伐後に生ずる枝は、凡そ三年を經過し、能く風雨に抗するに至るを待ち、方めて蠟蟲を放置すと云ふ、此樹は南蜀地方には、到る處に栽培すれども、尤も盛なるは嘉定府城附近、及び峨眉縣附近とす、而して各地の内、嘉定府特に盛なり、蠟樹には、又別に水蠟樹と名くる一種有り、其葉、楡に似たり、同一の蠟蟲を放つも、此樹に附着せし蠟は、稍や甘味を帯ぶると云ふ、運搬せられたる蠟蟲は、没石子のまゝ、桐葉を以て、其二三十個を包み、數孔を葉上に穿ち、稻葉にて包口を括り、蠟樹の枝に懸くれば、蠟蟲は自然葉の外に出で、遂に枝上に爬着するものとす、

蠟樹には自ら形豆の如き一種の螟蟲を生ず、之を蠟狗と名く、此蟲は甚だ蠟蟲の發



蠟燭

膏を防ぐものなるを以て、蠟燭放置後、凡そ一ヶ月間は、毎日日中の時を擇び、棍棒を以て樹枝を打ち、蠟狗を振り落す。なり、斯くて一ヶ月の後、蠟分漸く枝上に附着するに至れば、蠟狗は自然に蠟燭に近かす。従つて害を及ぼすこと無きを以て、枝打は此時に於て終了するものとす。

蠟の分泌

蠟蟲が没石城を出で、枝上に遷りたる後、最も恐るゝ所は、風雨の爲めに吹き去られ、溺滅せらるゝに在り、故に採蠟期までの風雨の多少は、以つて收穫の豊凶を卜すべし。採蠟期は蠟蟲放置の日より、早き地方にて二ヶ月、遅き地方にて三ヶ月乃至一百日の後に在り、此時に至れば、枝上は蠟蟲の運動する範圍に於て、蟲體より分泌する白色の蠟質を以て蔽はれ、其厚さ往往二分餘に達することあり。

白蠟

白蠟を採蒐するには、蠟の附着せる枝を伐り、手を以てこれを掻き取り、水を盛れる鐵壺中に投じ、其溶解して浮上するを待ち、之を取り圓型に入れ、緊壓して硬塊となし、初めて市場に出すものとす。又原蠟の枝上に殘留したるものは、枝のまゝ、水を盛りたる鐵壺中に没す、其後の方法は、上に述べたるに同じ、但し此種は、色純白ならず、其質亦た劣位として取扱はるゝなり。蠟蟲は蠟の成熟時に於て如何なる状態に在るか、余未だ之を聞かず。其抗熱力は、四川産は華氏の百六十度を以て限度となすとす。

蠟の用途

云ふ、

白蠟は、主として蠟燭の原料に充てらる、四川にては、牛脂一斤に對し、白蠟三兩半を混すと、此比例にて製したる蠟燭を取り、之を純白蠟の溶液に浸せば、善く蠟燭の外皮を固くし、點火に際し、牛脂の流跋を防ぐと云ふ、斯くして作られたる蠟燭は上等品に屬し、通常民間に用ゐること極めて罕なり。

支那の白蠟は、四川の外、湖南、湖北、貴州、浙江、福建等の地に産す、其蠟蟲發生より製蠟迄の順序、四川と大差無しと云ふ、諸産地の内、其品質の佳産額の大能く四川に及ぶものあらず、されば支那の白蠟を語る者は、先づ指を四川に屈す、而して四川に在りては、嘉定府を以て第一となす、想ふに皆是れ地味の然らしむるなり、余が成都滯在中嘉定府に、製蠟公司創設せられたれば、斯業は今後益す有望として、期待せらるゝなるべし、余は恨くは、此籍に於て、新舊とも、産額并に價銀の統計的數字を示すこと能はざるが、後の此地に遊ばん人は、務めて支那人の怪訝を招かざる態度を以て、公司或は官憲に就き、問ふところ有らば、彼等は或は數字并に生産の順序に關し、詳説するに吝ならざらん。

支那の白蠟は、夙に歐州に聞えたり、一千八百八十四年の交、在重慶英國領事ホージ



古洞穴  
第四十八圖

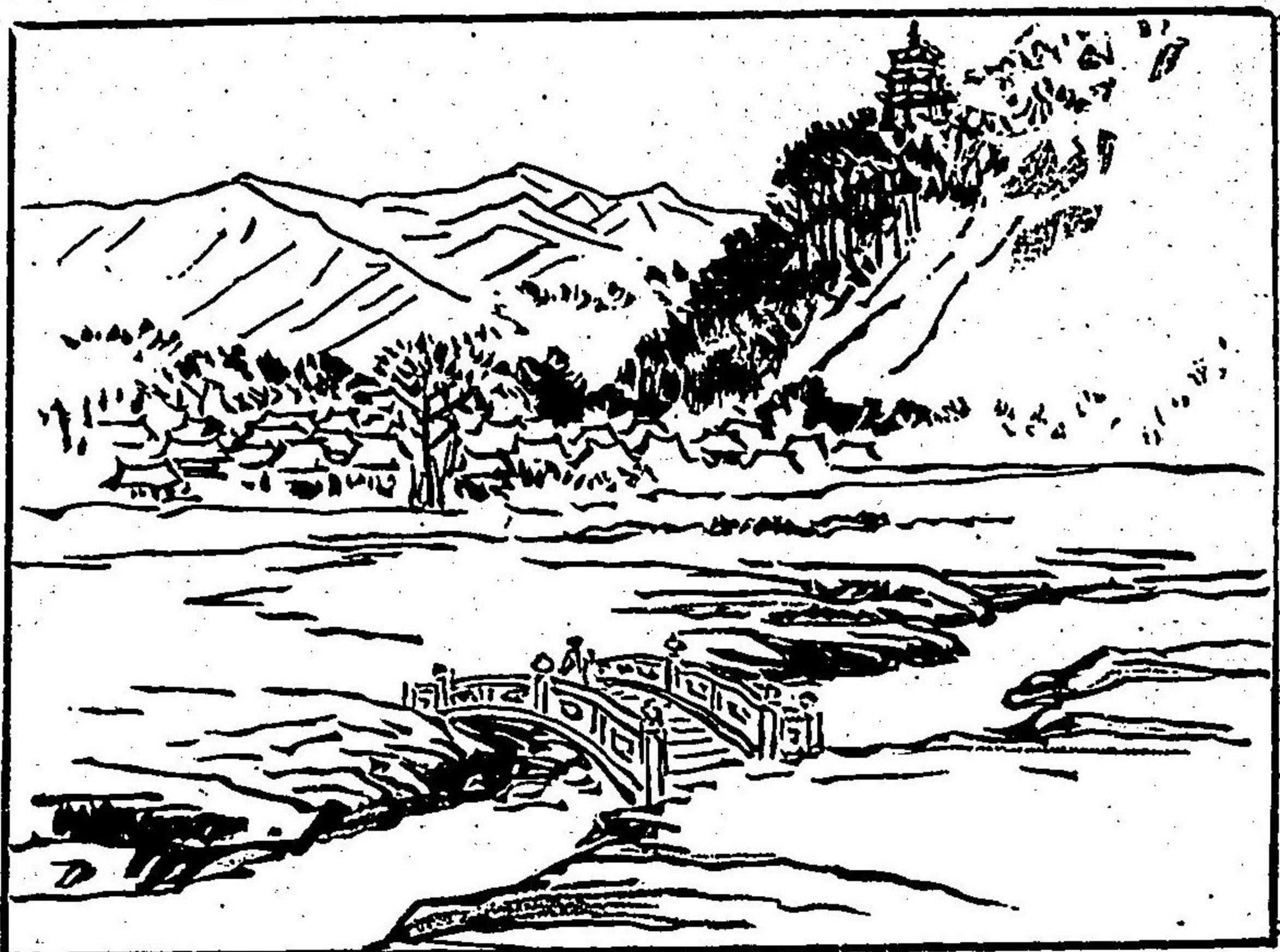
雅河  
古の燕渡



雅河

一氏、本國政府の命を以て、實地踏査の上  
精密なる調査を遂げたり、是より先き一  
私人として二三歐人の記述するところ  
あれども、外國政府の公然たる調査は英  
國を以て嚆矢とすべきに似たり、  
村を出で小河を左に、丘陵を右にして進  
めば、丘の中腹二個の洞穴あるを認む、距  
離遠きが爲め其大を測る可らず、只顯然  
たる暗竇を見るのみ、従前土人穴中に於  
て、多く人骨古器の類を拾へりとぞ、古墳  
なるにや、穴居の遺址なるにや、余之を鑑  
定すること能はず、十時雅河の左岸に出  
づ、雅河源を雅州に發し、嘉定に至りて、大  
渡河に會し、東南に流れ、岷江と合す、吳船  
錄六月辛卯記に所謂燕渡水是なり、河幅

義皇而上  
の乾坤  
第四十九圖



義皇而上の乾坤

我隅田川に比して、稍廣きが如し、此岸、沙  
磧洲渚交り相間る、凡そ全幅の三一二に達  
す、洲上綠草を生ず、猶ほ一端蘆菴を展ふ  
るが如し、處處水牛を放てり、牧童或は騎  
し、或は曳き、或は去つて岸花を摘む、義皇  
而上の天地に似たり、津に至るに、磯に慰  
ふて渡を待つもの既に四五人あり、已に  
して舟來る、一時に渡り盡さざれば、余先  
づ木田氏と乘る、中流より以西、水勢奔迅、  
波浪沸くが如く、客皆瞠目して片語を出  
さず、舟流るゝこと一町餘の後岸に達せ  
り、大野氏尋いて渡る、之を望むに、舟一葉  
に當らず、一行岸に會するを待ち、路を河  
側に取り、上ること數町の後、左折して  
村中に入る、村中酒館茶店、帘を揚げ、涼棚

嘉定府より峨眉縣に至る



蘇稽

峨眉縣城  
に至る

を設けたる、本邦田舎と異なる所無し、村を出づれば、稻田路を夾み、坦路其間に通じ、墟墟落落、遠近點綴す、午前小邑に達す、之を蘇稽とす、嘉定を距る三十清里といふ、蘇稽は水邊の小站なり、嘉定を發し、此に至りて始めて街市に逢ふ、其位置略ぼ嘉定府峨眉縣の中央に在りて、其孔道に中り、且つ登峩の客、必ず歩を停めて休息するを以て、其僻地たるに拘はらず、人烟繁庶、商戶殷盛、其名古より著はれたり、憩ふ少時にして站を發す、小岡直に其西に當れり、蜿蜒として左右に亘り、樹竹其上に疎疎たり、陡坡を上ること一二町、路右古閣一處あり、署して觀音閣と曰ふ、檐傾き瓦破れ、頽廢支えざらんと欲す、然れども、之を蘇稽の東數町の處より打見たる景色、絶好の活畫なり、坡を下り、又た田間を進み、高山舖を経て半鎮子場に至る、半鎮子場、石街一條、其潔希に觀るところなり、是に至りて峨山の頂、雲烟の表に現はるゝを望む、五時、峨眉縣界に入る、路房石標あり、峨眉縣東界と題す、六時、峨眉縣城に達す、客棧大和官店に投ず、成都東文學堂生徒四名、登峩の目的を以て、専ら陸路を取り、昨日此地に着し、同じく大和官店内に宿し居れるに會せり。

峨眉縣は嘉定府に屬す、縣城、東、嘉定府城を去る七十清里、西南、峨眉山を去る三十清里、田地肥沃、諸産頗る富む、且つ一方に峨眉山てふ大靈場を控へ、毎年數萬人の參詣

登山の準備

鈔票

者の衝路を扼せるを以て、城市の壯、甚だ西蜀の僻縣たるに似ず、今年より郵便局も創設せられ、將來益す益す發達すべしと思はれたり。

飯後登山の準備に着手す、山中携ふるところ、炊具は釜、七輪、俎、庖丁、木炭、及び附屬の零物、食料品は米、鹽、醬油、福神漬、罐詰、コンデンスミルク、野菜、乾鹹菜、乾肉、生鶏、鶏卵、鯉節、茶、砂糖、唐辛及酒等、凡そ十日分、食器は茶碗箸、皿等三人分、衣類は蒲團蚊帳、着替襪衣等、外に雨具、藥品數種とす、之に要する人夫總計八人、一夫一日の賃錢四百文と定めたり、而して勿論往復とも徒歩の筈なれば、轎子并に山中不急の物品は、下山の日まで、棧内に托することゝなせり、こゝに便利なるは、登山者の爲に、城内各錢莊兩替店にて一種の鈔票(兌換券)を發行せることなり、其様式、長五寸餘、幅二寸餘の白紙に、金額、發行日附、及び發行錢莊名號を墨書し、二個の印を蓋して、其證となせる極めて簡單なるものなり、金額は千文、五百文、三百文、百文、五十文等の各種に分たる、若し山中に在りて、普通の旅行の如く、一文錢、或は馬蹄銀杯を携帶せば、その重量に苦まざるを得ざるを以て、必要に迫まられ、鈔票の發行を見たるに至れるなり、これも凡そ十日分、全金額記臆せず)を用意し、外に制錢(一文錢)各自五六圓を換へたり、準備整ひしを以て、紀念書簡を認め、在本邦故舊に送り、明日の快晴を祈りて、寢に就く、夜熱昨



夜の如し

峨眉山

登山の兩路

二十一日 午前七時、結束して棧を發す、余等三名、同行學生四名、僕三名、力夫八名、總計十八名、棧を出で、西行十餘町にして左折す、路、南門よりするものと、西門よりするものとの二方に分る、西門よりせば、龍門峽を経て、雙飛橋に至るべく、南門よりせば、伏虎寺を経て、山中に入るべし、一行則ち南門より向ふ、

清流

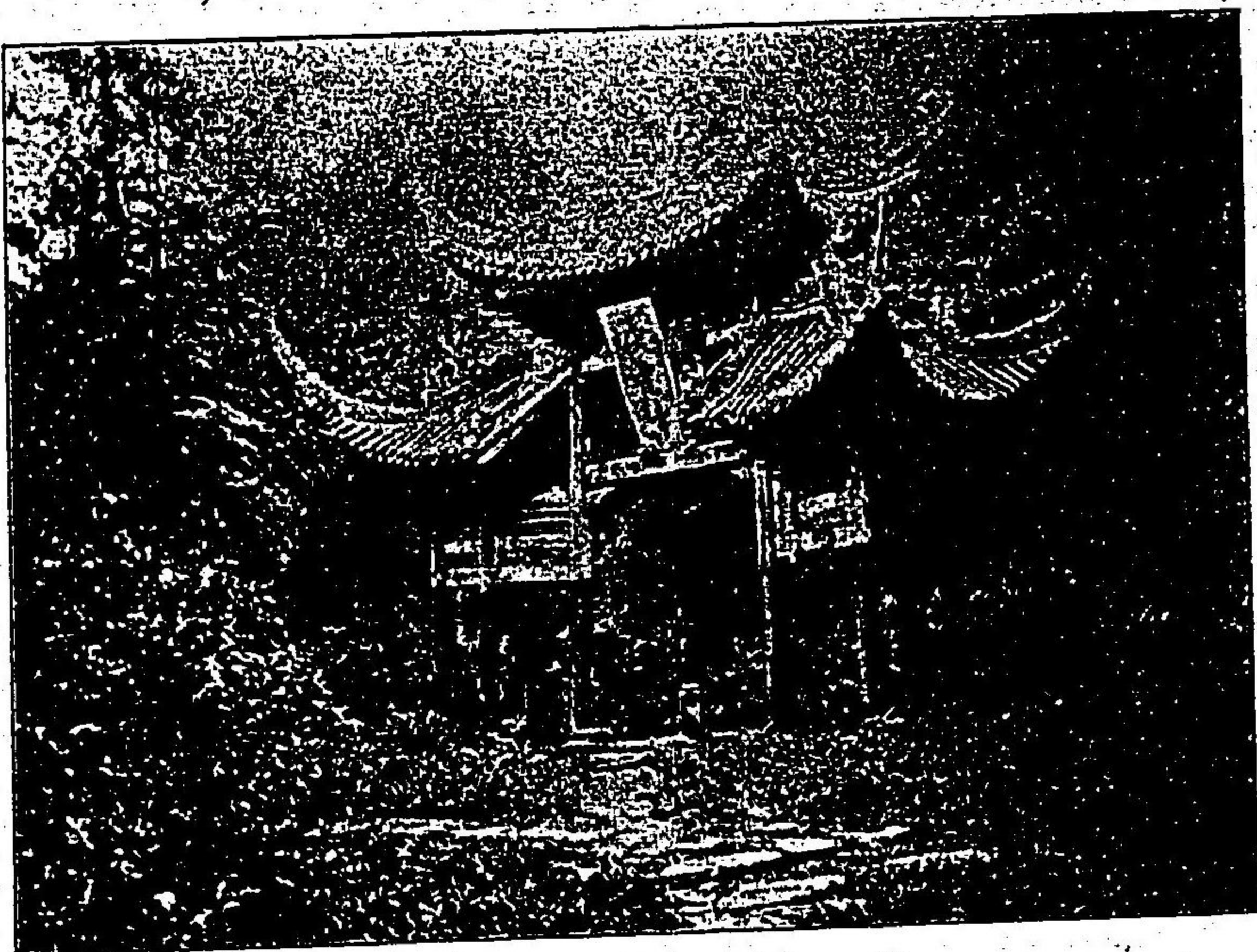
進むと七八清里の後より、沿途疎林、大小古寺、其間に點在す、四圍の景物、自ら人寰の外に在るを覺う、小溪右より至れり、氾あり之に架す、其水清淺なるを見て、源の峨眉山に發するを知る、沚に下りて漱す、冷齒を疑せんと欲す、渡清以來、前未だ見ざるの清流なり、十一時山麓に達す、徑を躡んで山に入る、嵐氣人を撲ち、衣襟灑然たり、何來の溪聲、淙淙として至り、幽路冥奧、那邊に窮るを知らず、稍左するところ、先づ巨門の特立するを見る、題して伏虎寺と曰ふ、門を去る數百歩にして、寺殿あり、即ち伏虎寺なり、寺は、僧心安の開建に係る(時代未詳)、明末兵火に燬かれしを、清初に及んで、僧貫之、其徒可聞を率ゐて、茅を結び、名けて虎溪精舎と號す、順治十八年、四川大官、巨資を捐て、興建す、經營十餘年、始めて成るを告ぐ、巍殿傑閣、前後左右、凡十有三層、堂堂巍巍

伏虎寺

峨山一等の巨刹、四漢像六丁二十四

五十四

奇字科



峨眉山

巍崇隆廣大、峨山第一の壯寺と爲す、寺中羅漢塑像あり、共に六百二十軀、排して一段に在り、大さ幾んど人の如し、面目活如、迫り語らんと欲す、峨山諸寺、佛像を藏するの多き、能く之に及ぶもの無し、正殿を大雄殿といふ、巨楹高幾、亦闕山無雙の結構に屬す、殿前登殿礎の如し、一大鐵香爐を安す、高さ約一丈、圍八九尺、蒼鋪老雅、恐らくは近古の製に非ず、殿廊又た奇字の碑兩方を建つ、其書狂草、走蛇倒猿、筆何くに始りて何くに終るを知り難し、其中讀むべきもの十數字のみ、筆者の名を署せども、亦た讀むこと能はず、其書若し匹を求めば、明の解大紳、之に庶幾らんか、僧茶を煮



解脱坡

雷音寺

て客を待つ、憩ふ少時、別路を取りて、雷音寺に向ふ、伏虎寺を去り、行く五六町、急阪を上る、木梯二百餘級、水聲潺潺、聽いて而して倦むことを忘る、人此阪に臨んで塵凡を解脱し、此阪を出て、險阻を解脱す、因て阪に名けて解脱坡といふ、坡を去り、坦路に就く、進む未だ幾くならずして、雷音寺に至る、伏虎寺を距る、西北一千四百三十四歩、寺、古へ解脱庵といひ、又觀音堂といふ、光緒十年改めて雷音寺と爲す、殿宇傾壞、一見る可きもの無し、華嚴寺に向ふ、

天女池

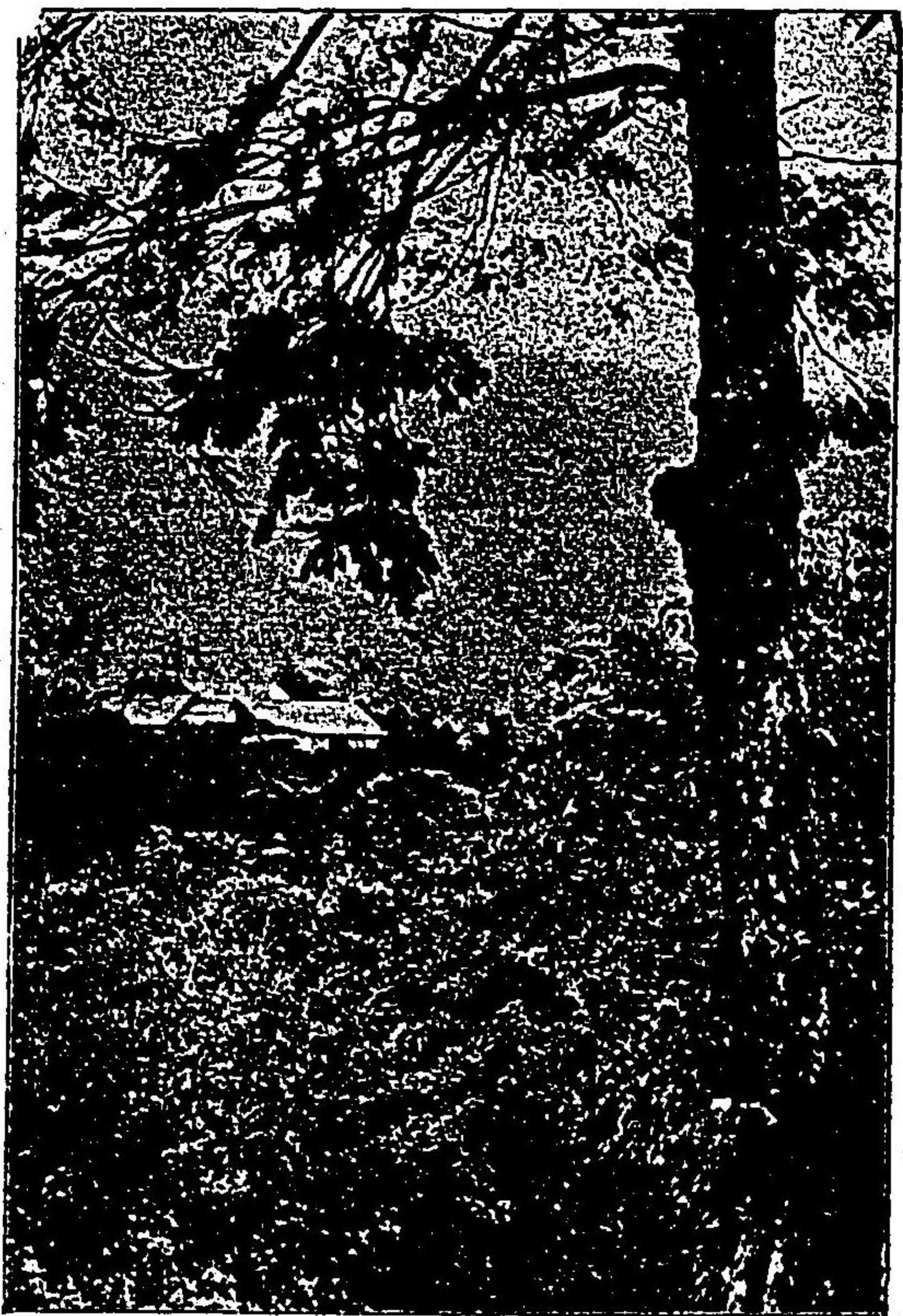
純陽殿

雷音寺より西北一千五百九十八歩にして華嚴寺に至る、寺一名會禪寺、唐の福昌達道禪師の道場なり、僖宗の時、僧慧通、寺名を歸雲閣と易ふ、宋の紹興三年、僧士性重修す、節枕旋螺、極めて奇古と稱す、明の洪武の時、僧廣圓、勅を奉じて重修し、地を掘り、宋碣を得たり、其文正面華嚴塔と鐫し、左側に至縣十五里、右側に至頂七十里と刻せりといふ、此碣今存するや否やを詳にせず、寺左の青竹橋を過ぎれば、玉女池あり、相傳へて天女の浴器と爲す、深廣四尺、歳旱するも涸れずといふ、誕なれども、記して一嘆に供す、青竹橋を渡り、純陽殿に向ふ、路右、大樹一株あり、木桶傘と名く、華嚴寺より西北九百四十六歩にして、純陽殿に至る、殿宇高礎の上に在り、重樓瑰璋、巍然仰ぐべし、寺、明初御史郝衛陽の造るところ、崇禎六年、巡按劉宗祥、峨眉の令米國

五十三歩

第五十一

竹籬柴門  
袁店子



大峨寺の道

柱を率ゐ、金を捐て、増修し、益す益す完美を増す、殿後の山、赤城山と名く、往時香烟羅漢、白雲等の諸寺ありしといふ、今、路の尋ぬべき無し、寺左を行く五六町にして、五十三歩といふ處あり、其路極めて逼窄、輿馬を容るべからず、明初蜀の獻大王、峨に遊びて此に至り、麓を下ること五十三歩、後人其歩を重んじ、因りて以て其地に名けしなり、

荒烟草草の中に在り、寺を去り、坡を下れば、茅屋數椽あり、竹籬柴門、亦た是れ化外の境、呼んで袁店子といふ、袁店子より左方を望む、樓殿、樹梢の表に出づ、大峨寺即ち是

峨眉山



れなり、會燈寺を過ぐる頃より、雨少しく降り來りしが、袁店子より下り、正心橋に向ふ時は沛然たる大雨となり、足滑し身屢ば仆れんと欲す、正心橋より萬定橋を經、午後三時大峨寺の麓に出づ、路右巨石壁立、大峨石の三字を刻す、呂純陽の畫するところ、靈陵太妙之天の六字、明の督學郭子章畫くところなり、路左大巖あり、其下凹して坎を成す、中清泉を溢ふ、神水池と名け、其水を玉液泉といふ、旁なる巨石に、陳圖南が草書福壽の二字、及び蘇東坡が雲外流春の四字を刻す、上に神水閣あり、一に聖水閣といふ、明の巡撫、安慶の吳用先が建つるところ、閣を左にし、磴を登りて大峨寺山門に入る。

大峨寺

大峨寺は山中著名の巨梵なり、古へ福壽庵と名く、明僧性天が開建に係る、其後荒廢に歸せしが、清初僧智行重建し、大峨庵と名けき、康熙中峨邊の參將李楨、之を増廣し、庵を改めて寺となせり、光緒十一年、僧員明重ねて之を修め、以て今日に至る、現住持八十以上、蓋し員明なり、寺中巖きに九曲渠、流杯池、盧文閣、勝峯庵、立禪庵、彌陀庵等ありしが、今皆廢して存せず、寺後古松一株あり、老幹龍鱗、數百年前の物なり、其上、中和石あり、再び上れば歸子石あり、此石一名魚兒石、石二孔あり、水常に溢れて涸れず、其上山頂、黃帽山と爲す、山後の高峯即ち寶掌峯なり、

中峰寺

今日は大峨寺に一泊せん豫定なりしに來り見れば、意外にも、樓上の佳房は、早や既に西洋人に占領せられ、白衣の婦人、烟を吹ける男子、參參伍伍、廊上を散步し、我等が雨中に中庭に立ち、何處にか空房はなきか、と見上ぐるを眺め居れり、住持余等の來れるを見、老軀を提げ、其處此處と連れ廻り、強いて留宿を勸むれども、那の室も道の室も、狐鼠の巢窟とも見まがふばかりなれば、雨は降りしけれ、勇氣一番、寺を去り再び神水閣に出で、萬年寺に向かふ、路右呵呼庵の故址あり、址上巨石あり、歌風臺三字を刻す、俗傳へて楚狂陸通が隱居の處と爲す、其前歌風橋あり、一名響水橋、橋邊時ありてか、四山皆響き、洪濤巨浪の雨風を挾んで來るが如きを聞くといふ、往時稱して山湖となす、俗之を以て雨晴を驗し、又た歳の豐歉を卜す、

呼應庵址

大峨寺より西する一千五百二十三步、中峯寺に至る、一名集雲寺、晉に在りて乾明觀と號せり、隋の茂者尊者之を重修す、又た隋の智者禪師鉢杖を寄するところなり、宋の黃培翁會て此寺に習靜せりと云ふ、寺後を白雲峯となす、呼應峯其左に在り、峯上舊と呼應庵あり、智者禪師の道場なり、其下茂真尊者の庵址あり、俗傳ふ、孫思邈真人峨眉に隱るゝ時、禪師尊者と相會して茲に奕し、又常に相呼應したりと、中峯寺より西、四百三十二歩にして觀音寺に至る、寺中一石を藏す、形鷄母に似たり、名けて鷄母

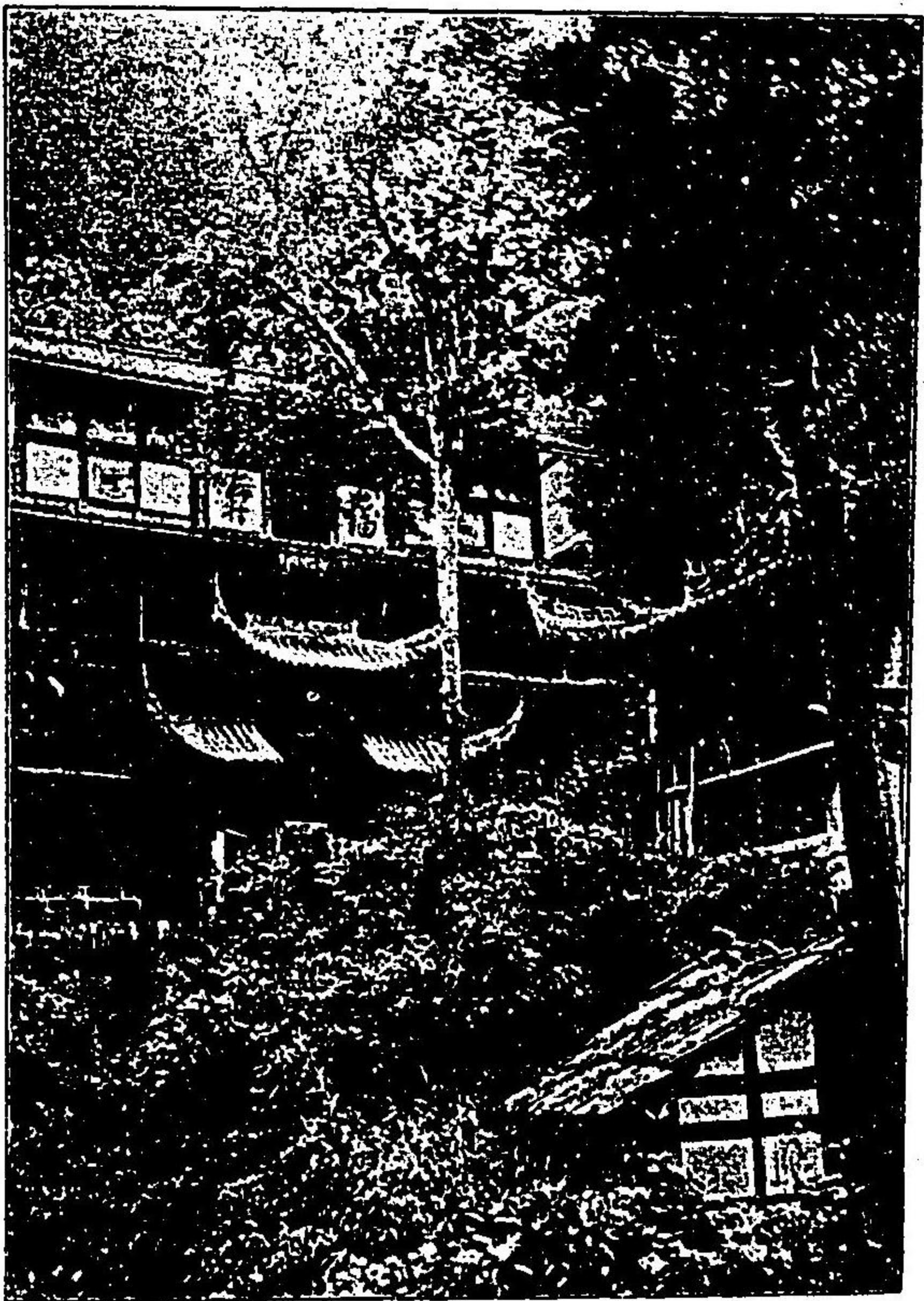
觀音寺

峨眉山



龍昇岡

石といふ、觀音寺より西五百八十六步、龍昇岡に至る、又西北一千二百九十一步、廣福寺に至る、寺二名慈雲寺といふ、又牛心別院と稱す、寺後の高峯を前牛心嶺となす、未



だ寺に至らざる數十歩の前路右方に向つて通す、これより石船子に赴き、龍門洞を経て、峨眉縣に至るべし、即ち縣城の西門より來るもの、此道に由り、廣福寺に於て、南關門よりするものと相會するなり、廣福寺より左して下る、水聲湍激、殷殷雷の如し、遂に溪上に出

清音閣

づ、高閣其左に聳つ、之を清音閣と爲す、廣福寺を去る西北三百五十四步、清音閣、牛心嶺に倚り、左、石笋溝に臨み、右、黑龍溪に瀕す、石笋溝源を雷洞坪に發し、黑

第五十二  
廣福寺

峨眉第一  
の林泉

金龍寺

靈官樓

龍溪は九老洞より出づ、二水皆危岩怪石の間を奔り、閣前に於て一水となり、瀑を成して數十丈の壑中に落つ、二水上、各一橋を架せり、雙飛橋といふ、峨眉第一の林泉なり、溪上の棧亭に憩ひ、雨間を窺ひて發す、清音閣より路左右兩枝に分る、一は閣の右腋より溪に沿きて上方に通せり、頂上への近路なれども、極めて險阻なり、一は閣前を過ぎて、白龍洞に通せり、余等則ち此路を取りて進む、磴道を拾ふて登り、接御亭の故址を過ぐれば、一叢の密林、路右に在り、即ち古徳林是なり、林樹皆楠、相傳ふ明の時、洪濟和尚の植うる所と稱して、檀林の祇樹と爲す、古徳林を過ぎ、金龍寺に至る、即ち白龍洞の在る所なり、清音閣を去る一千六十一歩、金龍寺の門前、白馬二頭を繋げり、端なく首を回せば、樓上に當り、西洋人の男女二三名、悠然として洋琴を弾じ居れり、我等は今しも登山の最中なるに、彼等は幾日前より早くも居を茲に卜せりと見えたり、敏甚し、敏甚し、金龍寺より路暫く平坦、左右竹林、斑斕紛披、時に或は哀猿數聲を聞く、羊腸幾折、又峻阪の下に出づ、木梯數百級、人の上より來るもの、宛然霄漢より降るが如し、阪上一樓門、路に跨りて立つ、之を靈官樓と名く、舊構、本と爲、輪子の造る所と傳ふ、今の樓は明末の重修に係るものなり、靈官樓を出づれば、路又分れて二となり、右すれば、接引殿、山王廟を経て、慈聖巷、佛牙殿、海會堂に至り、遂に淨水廟を過ぎり



萬年寺

て、虎跳橋を渡り、無懷洞、黑水寺等に達すべし。左すれば萬年寺に至る、靈官樓下に立ちて願望す、刹竿高低、多少の樓臺、烟雨の中に在り、左路を取りて萬年寺に進む、廣礎二百餘級を攀ぢ山門に入る、客房の寬潔、圓山其比を見ず、浴を取り、衣服を換ふ、身心暢快、發足以來の爽涼を覺ゆ、卓を圍むで飯に就く、八珍の美味も之に過ぐべからず、此夜豪雨、山鳴ること湖の如し、萬年寺は峨山の中腹より稍下方に在り、山中著名の大刹なり、其規模の壯大は伏虎寺に及ばず、展望の雄は金頂に如かざれども、其所在の位置と、歴史上の事蹟は、前二寺の上に位せり、抑も萬年寺は、創建の時代は詳かならざるが、晉代に於て、已に大伽藍として知られたり、當時普賢寺と號せしを、唐に至り、僧慧通改めて白水寺と名けり、宋に下りて、又白水普賢寺と改め、明に及んで、其萬曆中、又た今の名萬年寺に改む、舊と寺殿合せて七宇ありしが、其内、天王、金剛、七佛、大佛の四殿、兵火に失し、今存する者、毘盧殿、磚殿、新殿のみ、磚殿は煉瓦作りにて、毘盧殿の後に在り、殿内安するどころの丈六普賢騎象の銅像こそ、此寺の本尊にして、又峨眉無雙の見ものなれ、其像は、宋初、成都に於て鑄造せられ、象の高さ一丈許、足三尺の蓮花を踏む、従前、殿中に露置せられしが、登山者の爲めに痛く摩損せられたるを以て、光緒十二年の頃、成綿龍茂道

磚殿  
普賢騎象  
の銅像

古額

（成都府、綿州、龍安府、茂州の道臺、黃沛翹之を患ひ、金を捐して、石欄を繞せり、此像の美術上の價值は、余輩之を知らざれど、宋時の遺物の、今に於て恙無きを得る、峨山の爲めに、太だ賀すべきに堪えたり、毘盧殿、新殿皆觀るに足るものあらざるが、唯だ新殿の樓簷に、一枚の古額懸れり、僧誇りて李白の書なりといふ、若し果して李白の書を刻せるものならば、買收せんと思ひ、態々樓に登り、之を見たるに、釣艇去悠悠、烟波春復秋、唯將一點火、何處宿、蘆州の一絶を刻し、末に唐句とあり、書者の名字磨滅して讀まれず、其李書に非ざること、は明かとなりしが、筆味古媚、決して現代人の手には出てざるなり、

李白撫琴  
の遺跡  
李白の詩

李白曾つて峨山に登り、此寺に留宿す、僧廣澄、白か爲めに琴を彈す、當時、李白、蜀僧と題する詩あり、曰く、蜀僧抱綠綺、西下峨眉峯、爲我一揮手、如聽萬壑松、客心况流水、餘響入霜鐘、不覺碧山暮、秋雲暗幾重、今余等の宿房題して、彈琴樓と曰ふ、その故事に由りて名けたるものなり、

舊記に見  
へたる萬  
年寺の寶  
物

范石湖の記する所を見れば、宋時に於ける萬年寺は寶物を以て充たされたり、先づ太宗、眞宗、仁宗三帝の賜ふところの御製、御書、百餘卷を始め、七寶冠、金珠瓔珞、袈裟、金銀餅鉢、盞、爐、匙、筋、果、壘、銅鐘、鼓、鐃、磬、蠟、茶、塔、芝、草、崇寧中宮賜ふところの錢幣、織成紅幘



等の物あり、此内仁宗賜ふところの紅羅紫綉の袈裟上には、佛法長興法輪常轉國泰民安風雨順時干戈永息人民安樂子孫昌盛一切衆生同登彼岸嘉祐七年十月十七日福寧殿御劄記の御書發願文を書せり、又經藏あり、朝廷、尙方の工に命して造らしむるもの、其小樓の釘鉸、皆餘石を用ゐ、極めて奇麗を備ふ、傳へて京師端門の制に仿ふといふ、經書は成都にて造り、碧礎紙に銀書し、各卷首に悉く銷金もて一卷の事を圖せり、又經籙あり、輪相鈴杵及び天下太平皇帝萬歲等の字様を繁花綉葉の中に織出せり、三千鐵佛殿あり、云ふ、普賢此山に居る、徒衆三千、共に住す、故に此佛を作ると、凡そ是等の珍什、石湖皆親しく觀る所、今一併霧消、復た隻影を留めず、

二十二日 午前十時發す、發するに臨み、例の峨眉紙幣若干圓を包みて、宿賃に主僧に與ふ、僧手に取るや、直ちに封を開きて、其多寡を検せり、其無遠慮に與ふ愛想も盡き果てたり、寺を去り、又登路に就く、觀音閣を経て、山の陽に至る、山壑して畑と爲せり、左上して林に入る、一寺に至る、之を觀心菴とす、萬年寺を距る一千二百四十餘歩、觀心菴の次を息心所と爲す、相距る一千三百六十五歩、唯だ見る、大林陰森、險路羊腸、絶えて人烟無し、前年本邦人某、登山に當り、前路に群虎現はれ出で、人を食ひ居れりと聞き、引き返したりといふ處は、實に此間に在り、漸く進めば忽ち兩大石の路を夾

觀心庵

邦人虎に逢ふ

觀心坡

第五十三

息心所



峨眉山

峨眉山

んで對峙せるに逢ふ、之を鬼門關と名く、路左絶深の空谷あり、樹を捉へ、腰を引き、首を延して俯瞰するに、皆濛たる雲海深さ測る可らず、鬼門關を出づれば、又絶急の磴道に逢ふ、之を觀心坡と呼ぶ、

觀心坡一名點心坡、登る者、膝、胸に點す此名有る所以なり、足弱き者、多く背子を備ふて登る、背子とは本邦強力の如く、背に木梯を負ひ、人を負ひて險を度るものにて、山中唯一の交通機關と目せらる、官吏或は富人等の贅澤者流は、往往輪に坐し、十數人の山丁をして前に曳き、後より擁せしめて登る者あり、點心坡を登れば、上に一刹あり、息心所



是なり、人是に至りて始めて一息す、故に息心を以て名とす、其位置略は全山の半腹に位す、

雲谷幽深

初殿

息心所より平路に循ひて右行し、石碑岡に向つて進む、岡を下り、峽道を過ぐれば道右、巨石磊然として立つ、觀音巖と名く、登山者、例、香を焚き其前に拜す、巖を過ぐ、天然石梁あり、觀音橋と呼ぶ、左右懸空、雲壑幽深、恃むところ、藤蘿古木のみ、放光坡を登りて長老坪寺に至る、息心所を去る一千七百二十四步、寺後竹林あり、翠竹峯といふ、其左、蒲公結廬の址なり、蒲公、其何人なるを知らず、寺左より進み、萬壽坡を上る、坡下舊と宋の紹興中懷古禪師の營める修正殿あり、今亡ぶ、駱駝嶺を踰え、又斜に上り、初殿に至る、長老坪を去る一千二百三十五步、傳へ曰ふ、昔し漢時蒲公藥を採りてこゝに來り、鹿跡の蓮花を現するを見、此寺を創むと、今の寺は、乾隆年間の重修に係れり、寺在る處、其山鸞駕の如し、因て又鸞殿と號す、寺内明の續恩禪師鑄るところの銅佛彌勒諸天の像大小三十餘尊、並に崇禎中の鐵鐘を藏すと、見す、初殿を去り、古石碑に至る、又大急磴に逢ふ、之を上天梯と爲す、磴皆怪石を層す、級高さは或は五寸、或は一尺、欹側曲折、險にして峻なる、遠く點心坡に過ぐ、上天の名、眞に人を欺かず、坡上荒刹孤聳、勢墜ちんと欲するもの、之を華嚴頂と爲す、寺右絕壁、桂樹横

華嚴頂

上天梯

に排す、桂花洞の在る所、平泉莊裏、此天香無しといふ、寺を出で、坦路を行く、路右古樹一株、雪枝霽漢、老氣橫秋、呼んで老僧樹といふ、右望、山峽中九龍院の故址あり、雲深うして處を知らず、

蓮花石

奇石

華嚴頂の次を蓮花石と爲す、相去る一千八百三十一歩、未だ蓮花石に至らざる前、一徑左に通ず、之を下れば、遇仙寺を経て、清音閣に出づべし、蓮花石は寺名なり、寺中奇石一個を藏す、周圍三尺餘、高さ五六寸、質堅緻にして色黝黑、極めて光澤あり、其面突尖簇立、酷だ蓮花を叢するに似たり、名けて蓮花石といふ、遂に以て寺號と爲す、一行院中に休ひけるに、一病僧余が前に來りて跪拜す、余何事ぞと問ふ、僧手を以て腹を支へ久しく痲病に惱めるが、洋大人此處に臨むと聞き、一診を蒙らんと欲し、身を起して此に來れりといふ、余止りたる時計を按じ、脈を檢し、口を窺かふ等、凡て式の如くし、こは蓬萊の靈藥ぞとて、清心丹二粒を衒ましむ、僧頓に喜色あり、幾度か阿彌陀佛を念じ、又三拜して去れり、

洗象池

古池

蓮花石を辭し、鐵天坡を登り、洗象池に至る、宿す、蓮花石を去る一千六百四十七歩、洗象池、原名初喜亭、規模太だ小、寺左の路下なる坦處に、廣さ六疊敷ばかり、深さ一丈餘の六角形の池あり、是れ洗象池なり、池壁石を砌し、底少許の古水を貯ふ、普賢象に乗



りて此處を過ぎる時、必ず其象を池に浴せしむと、寺名此に出づ。池外は則ち絶壁、壁間巖谷靈光の四大字を刻すと、巖下は千仞の深壑なり。壑二所、一を大雲壑、一を小雲壑と曰ふ。終古雲烟底蘊を知る可らず。

寺傍泉なし、遙に南對なる弓背山より篋を架して水を引く、寺宇極めて狹隘、物の觀るべき無し、余等の宿房、懸崖の上に構ふ、數木を以て下より支ふ、勢岌岌、其墜ちざる者幸なり、窓外山缺けて樹開く、七十里外、一撮の嘉定城を望む。

大乗寺

古殿碑

二十三日 朝來微雨、雲氣襟に滿つ、一千八百三十五歩にして大乗寺に至る、心雨の爲めに忙し、睨して之を過ぐ、寺舎舊と木皮を以て葺く、因て古木皮殿と稱す、寺中鐵碑を豎つ、其字篆籀にして陽文、赤綠蒼繡、峨碑の尤物と稱す、余前曾て成都に於て、其拓本を見たり、古味窮り無し、重慶宮阪九郎氏亦た其拓本を藏せらる、殿側の板壁上、處處、西藏文字の落書あるを見る、藏人の留爪なり。

白雲寺

大乗寺より一千三百七十七歩、白雲寺に至る、寺邊の山中、桐花鳳を産す、此鳥、羽衣綵麗、桐花開くを待ちて來り、花落つれば則ち之く所を知らずといふ、唐の李德裕か畫、桐花鳳扇賦之を指す、白雲寺を去る、一千百七十四歩、雷洞坪に至る、寺、漢時の創建に屬す、寺中古廟一座あり、雷神殿と爲す、鐡碑及び萬曆中の鐵佛十餘尊あり、寺右暗然

七十二洞

第五十四

接引殿



たる大壑、人恐れて龍雷相會する處と爲す、俗云ふ壑に七十二洞あり、最早に逢へば、其第三洞に騰る、騰る時、初め香幣を投ず、應なくば、死屍及び婦人衣服の類を投じて之を振觸す、往往滿壑鳴轟、雷雨交も作ると、洞中又伏羲洞あり、伏羲道を悟る處、女媧洞あり、女媧氏石を煉る處、鬼谷洞あり、鬼谷、瑤碌子を著す處と、路、寺左より通ず、盤廻して上る、之を八十四盤と爲す、接引殿に至る、華嚴頂を去る、一千三百五十四歩、殿、右巖間、石あり、鐘に似たり、聖鐘と名く、對岸、一石屹立、高さ十餘丈、形、人の如し、仙人石と名く、殿を過ぐれば、山斜平にして樹漸く疎石、楠花方に盛なり、林を出づる頃、大雨俄

岷山



太子坪

に至り、密雲去來、面を掠めて飛ぶ、風烈くして、傘を開くべからず、進むで太子坪に至る、偏地短葺、高さ膝を過ぎず、樹唯だ塔松のみ、其高き者、浮圖の如く、低き者、傘の如し、皆白雲の間に隠顯す、姑射の仙境にも比すべし、盤乎たる樓殿、其中に立つ、之を太子坪寺と爲す、接引殿を去る、二千三百七十八歩、寺、規畫頗る大殿前兩廂、數百人を容るべし、題額甚だ多し、左廂、儼然天竺の四巨字、尤も雄拔を覺ゆ、殿に就いて露を待

沈香塔

雨未だ歇まず、又進む、永慶寺、祖師殿を経て、沈香塔に至る、太子坪を去る、一千七百三十歩、沈香塔、塔を以て寺に名く、明の通天和尙、勅を奉じて建つる所、神宗護國草庵の額を賜ひ、慈聖太后、珍珠繖、御書佛號、金繡長旛等を賜ふ、今並に其存するを知らず、寺中九層の小塔あり、中、通天和尙の法身即ち木乃佛、鑿る、其塔即ち沈香と名く、高さ丈許、覆ふに層樓を以てす、雕鏤金彩、精巧無双と稱せらる、此數寶を藏すること、皆下山の後、聞くところ、故に未だ見るを得るに及はず、

天門寺

沈香塔を辭し、右上して天門寺に至る、寺右兩石突几、劃然中分して路を夾む、廣さ僅に二人並ひ行かしむべし、名けて天門石と曰ふ、其門に入る、閭闔に登るが如し、天門寺より三百六十四歩、七天橋寺名に至る、俗傳へて九天仙女降會の處と爲す、又



天門寺の外景  
太子坪の金剛塔



和尚塔  
絶頂

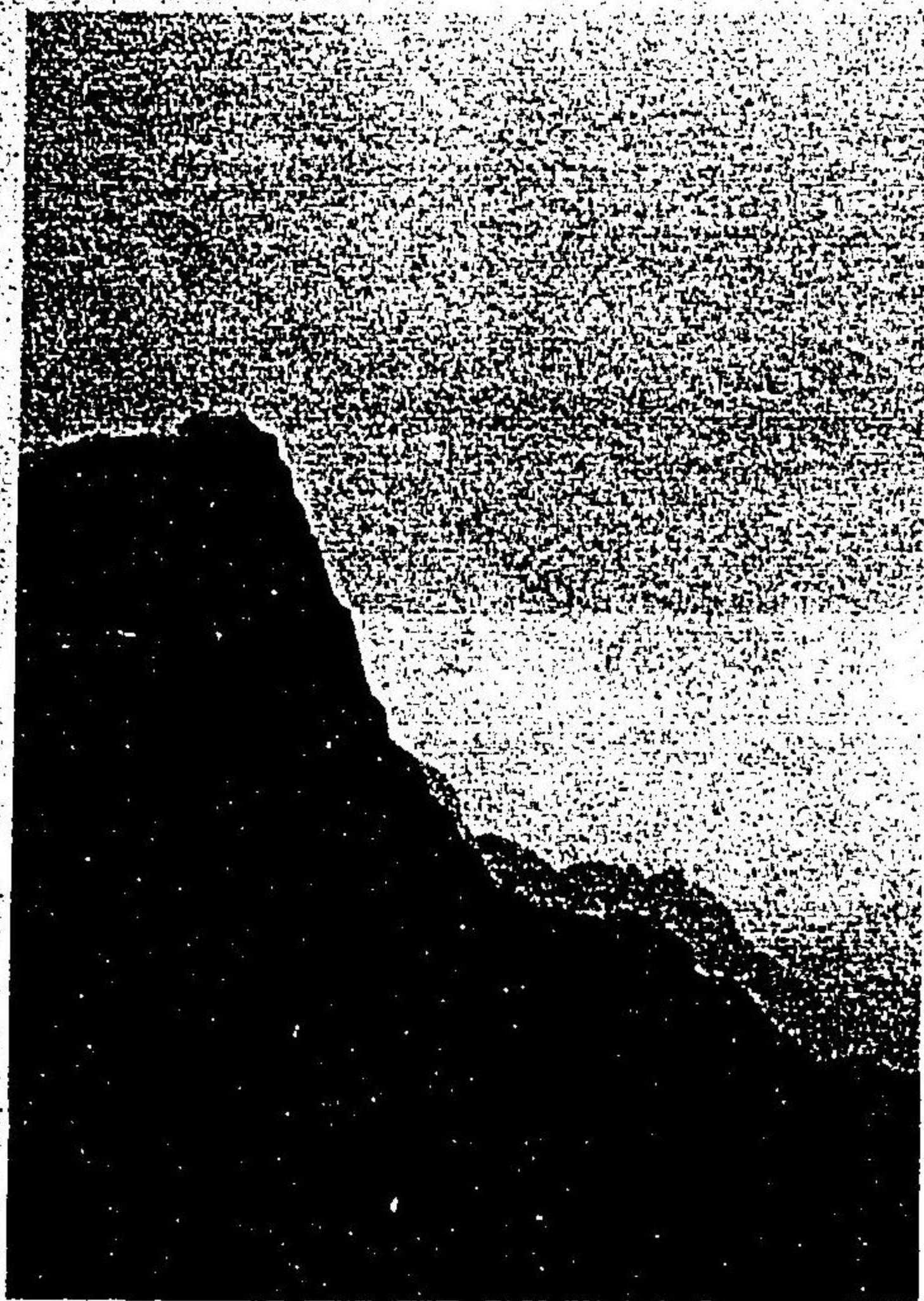
三百二十七步和尚塔に至る、亦た某和尚跣坐の法身を藏せりといふ、和尚塔より九百八十五歩、金殿に至る、之を大峩山の絶嶺となす、  
金殿に達したる時迄、雨未だ霽れざるのみか、更に益益惡雨となれり、傘も翳さず、油衣も着ずして登りしことゝて、全身濡れ滴り、其寒さ骨を刺さんばかりなり、急き殿内に入り、最深の客房三室を借る、先づ二個の大火鉢に、夥だしく炭火を起し、着の身着の儘にて腹を炙り背を炙る、漸く暖氣を覺ゆれば、蒸氣全身より立ち騰り、奇温恰も蒸風呂に浴するが如し、斯くて一時間餘を後れて、人夫等纔に到着す、柳行李は悉く無ししが、菴包は途中にて風の爲めに、被ひの油紙を箠揚せられ、中に包める蒲團は何れも浸水せり、紐を火上に架し、着衣と併せて之を燥す、一時の混雜、名狀す可らず、此夕の食卓こそ、五鼎の珍も及ばざれ箱中第一の秘瓶たる日本醬油も、口を開かれたり、乾牛あり、乾羊あり、生鶏あり、牛酪あり、福神漬あり、野菜あり、野菜は峨眉縣より携へ來しが、連日陰雨の爲め、反て枯萎を免れしは、もつけの幸なりし、皆白雲と併せて喫す、夜寒、冬の如し、此日同宿の客、余輩一行の外、尚ほ四五十人、此内西洋人一名、本邦人にして余輩に先ちて登る者、前年己に八九名あり、夜又大雨、

頂上記



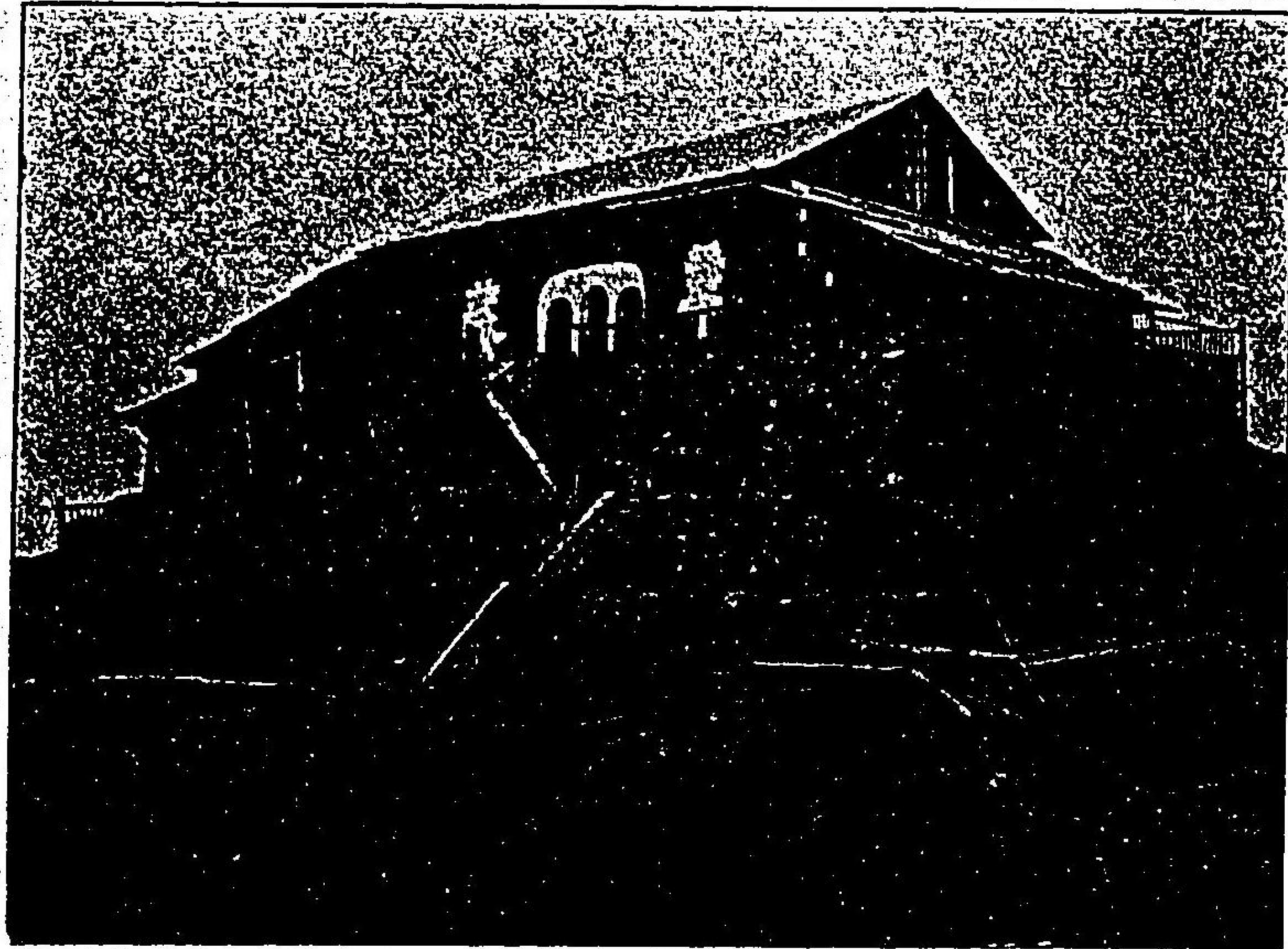
峨眉山頂の地  
院頂の寺

頂上、地、西南に傾斜し、東北兩邊、絶壁削るが如し、滿地、山骨露出、其人踐まざる處、蘚苔叢篠及び矮樹を生ず、此餘見る所僅に塔松のみ、寺の尤も大なるものを金殿と爲す、題して大雄殿といふ、其廣さ一時能く七百人を容るゝに足る、金殿の前、錫瓦殿あり、往時、昔くに錫瓦を用う、今悉く木板を以て之を覆ふ、金殿の右、光相寺、臥雲菴と爲す、光相寺は古鐵瓦殿なり、光相寺の後、祖殿あり、其左、石を壘して臺と爲す、上に、一殿あり、峨眉金頂是なり、即ち全峨の最高點と爲す、錫瓦殿の左、路を隔て、千佛菴、萬佛菴、明月菴、結草菴、華藏菴、淨土菴あり、皆板屋一間、前齋と金頂の前、藏經閣あり、其下、觀音閣あり、光相寺の前、華嚴閣あり、臥雲菴の下、天仙橋の左、仙女菴あり、錫瓦殿の下方銅瓦殿あり、今皆其故址を存するのみ、山上泉二所、其臥雲庵に在るを井絡泉といひ、金殿の左に在るを龍泉井といふ、皆飲む可し、然れども、水乏しくして且つ遠し、以て需用するに足らず、故に専ら雨水に仰ぐ、金殿の如き巨桶數個を庭上に置き之を承く、山上雨多し、水常に桶に滿つ、地高くして寒強し、水、蟲を生ずるの患なし、池二所、明月池、錫瓦殿の下に在り、白龍池、華藏庵の下に在り、並に石坎、勺水を貯ふるに過ぎず、聞く白龍池、蜥蜴甚た多し、長さ數寸、色白くして微黄、四足にして兩額、豎角花文有り、性馴にして、鹽俗呼びて龍子と爲す、早に遇ふ時、雨を騰れば、輒ち應すと、峨眉山頂、固よ

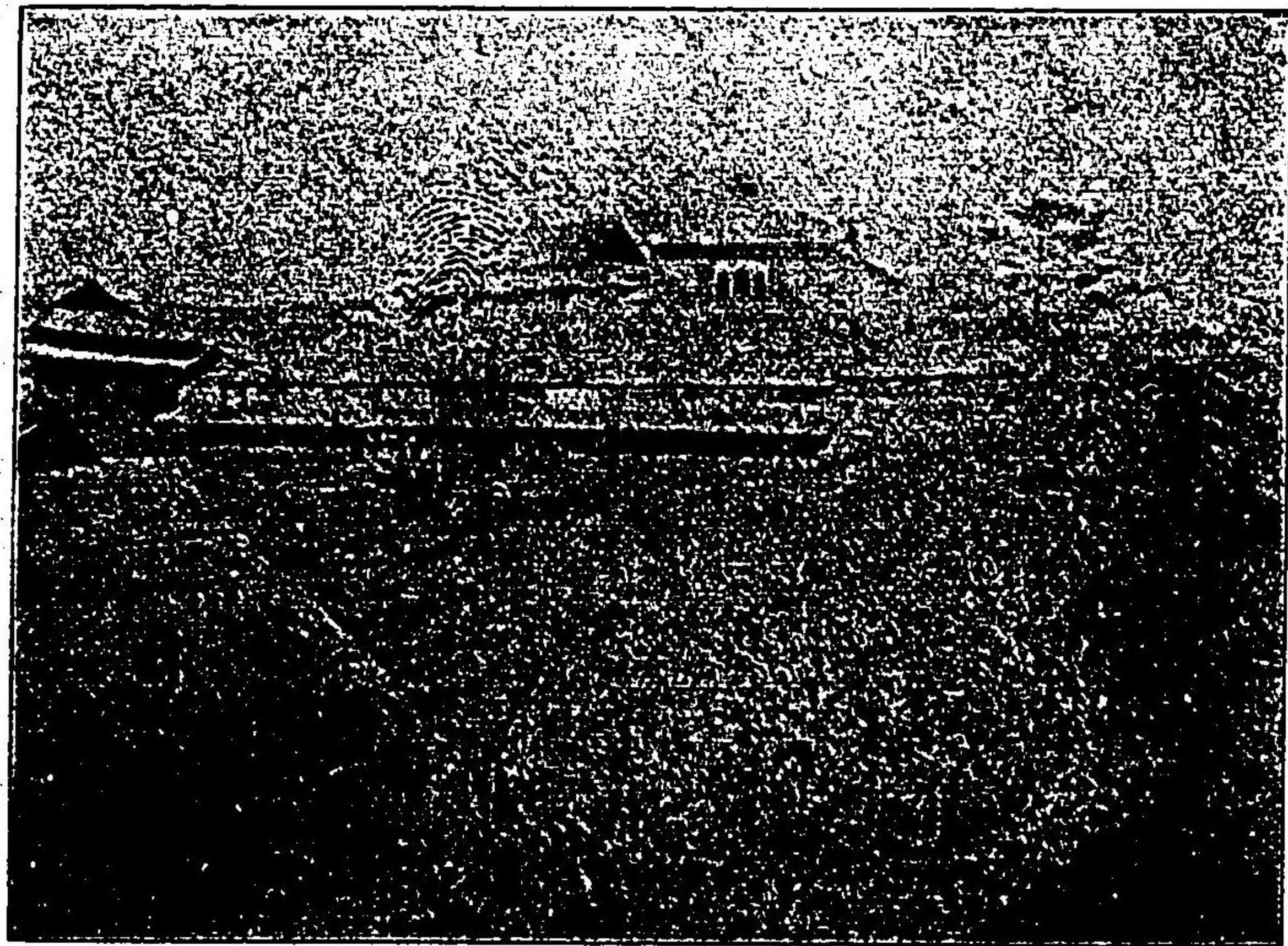


峨眉山頂金頂千佛巖





面 正 頂 金

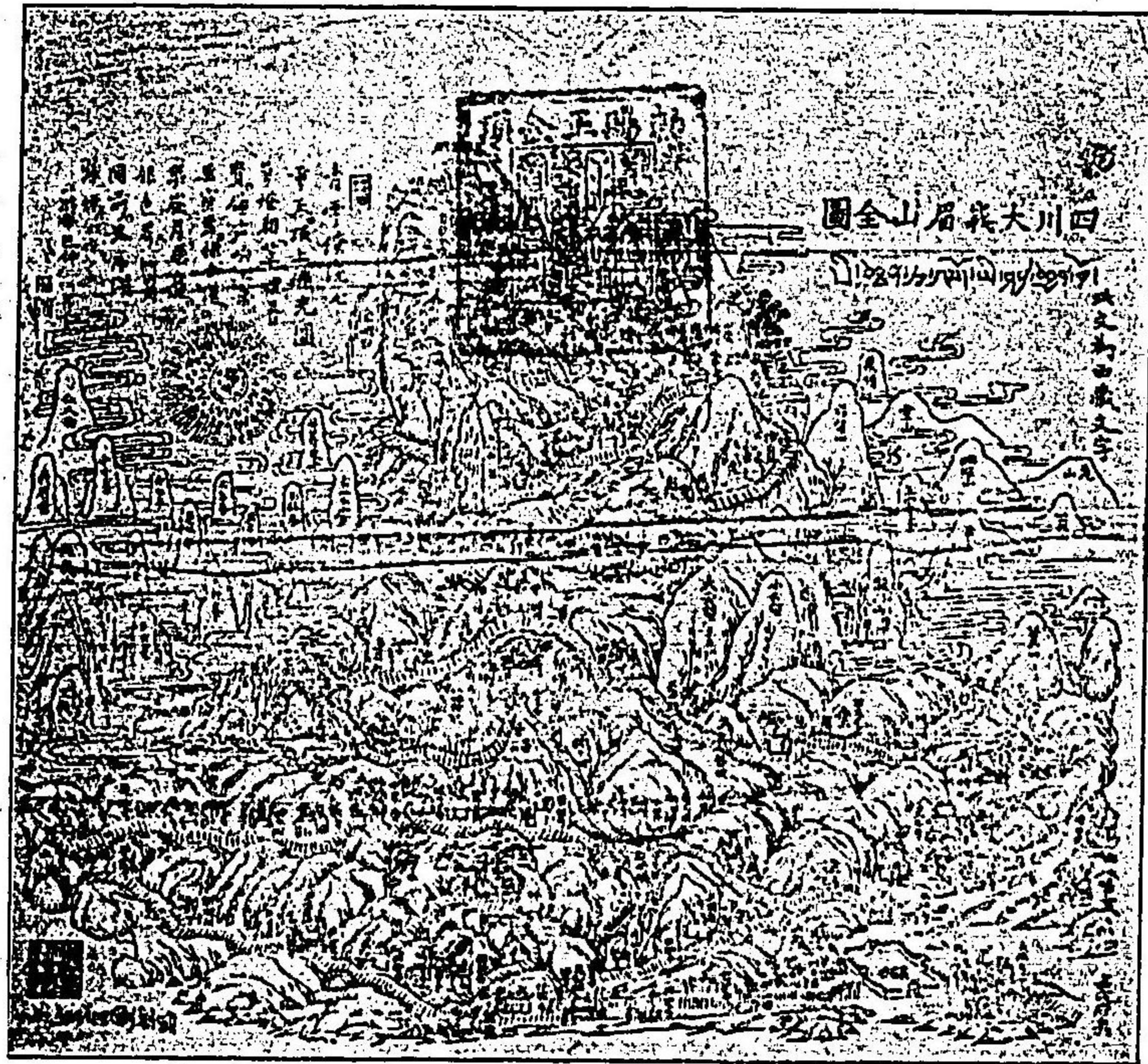


頂金び及殿金の中雲  
松塔は樹の傍左頂金





金頂勅印  
方四寸五分



四川大峽山全圖



り應さに此靈蟲なかるべからず、明の巡按馬如蛟詩有り、碣に勒して池側に立つ、其詩に曰く、龍向深山學化龍、涓涓泉水自從容、聞經想已能吞墨、好去乘時惠九農と、余が房の一隅に玻璃畫の額一面を掲ぐ、大阪地方に行はるゝ、玻璃板に山水畫と藝妓の寫真とを焼付けたるものなり、金殿第一房に掲げあるを見れば、たゞならぬ裝飾として遇せらるゝに似たり、前年蜀人の東洋より還る者、特に齎して寺に納るゝところといふ、

金殿

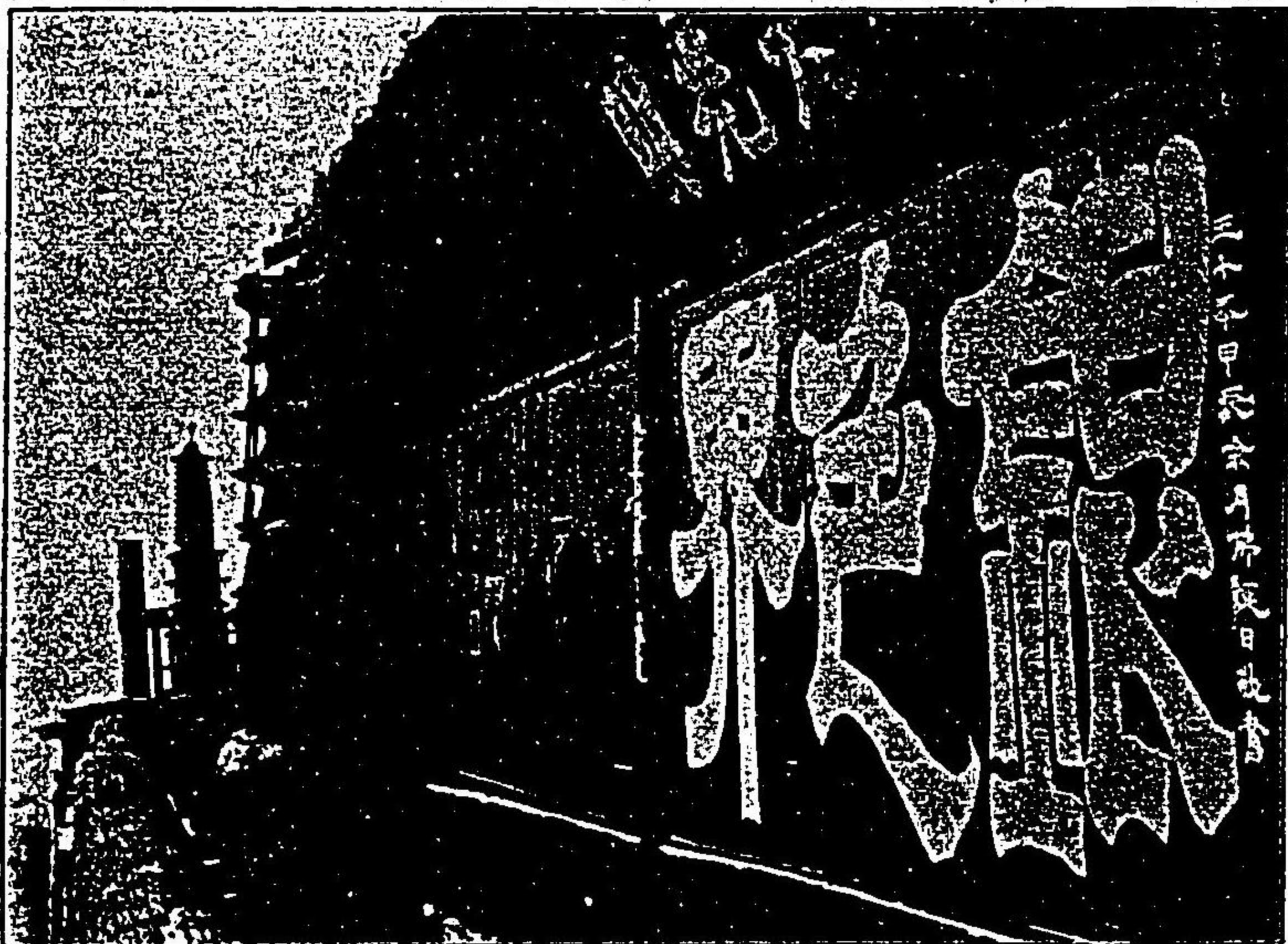
金殿は明の萬曆年間の創建にして、初め黄金を鏤めたるものなりしが、後ち之を銅に易へたりと傳ふ、然れども、今其蹤を存せず、清初總兵祁三昇、資を捐して鐵瓦を以て屋を葺く、其後殿、風の爲めに倒れ、復た鐵瓦を用ゐず、今其遺瓦、殿後の空地に堆積せり、其完形なるもの、長さ一尺三四寸、巾八寸餘、人の取り去るに任す、

金頂

金殿の後に當り、石を積みて層臺とせる處に一殿あり、之を金頂と爲す、即ち峨眉山最高點にして、金殿と同時の創建なり、往古は瓦柱門楹窓壁皆銅を以つて作り、黄金を鏤せりと傳ふるも、今亦た悉く木造なり、且つ當時は全蜀山川程途を其門陰に刻せりといへど、今其蹤なし、光緒十二年僧心啓、金頂殿内の修理を營む時、明萬曆年中造る所の銅碑一方を地中より發掘せり、現に金殿金頂間の空地に豎つ、書中挿む所

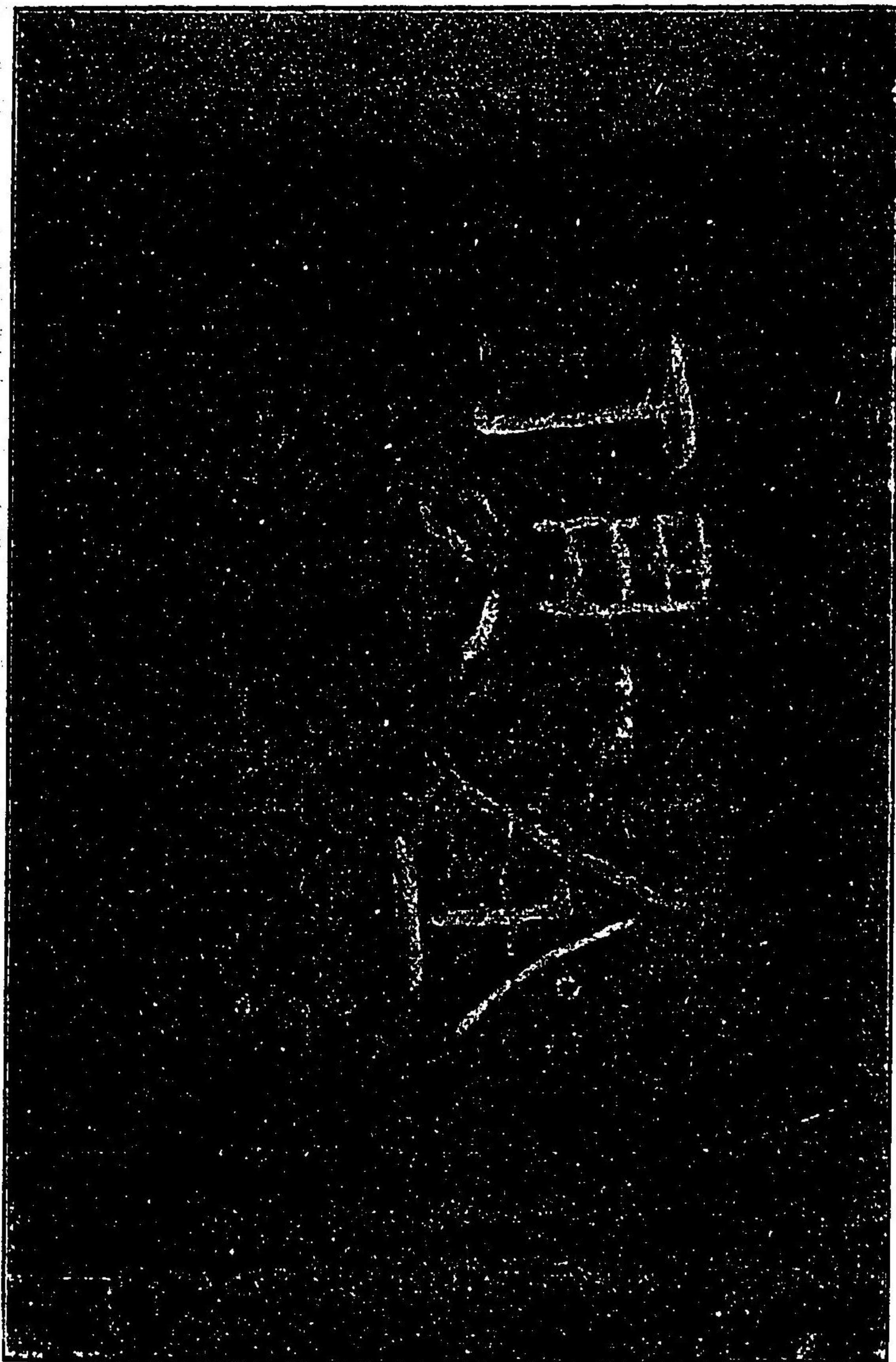
銅殿





金頂の背

のもの是なり、碑一面大峨山永明華藏寺  
 新建銅殿記を刻す、其書王統雲か集むる  
 王羲之書に係る、一面峨眉山普賢金殿碑  
 を刻す、其書傅光宅か集むる褚遂良書に  
 係る、即ち前者は今の金殿を指し、後者は  
 金頂を謂ふ、其文觀るに足らず、字も亦た  
 甚だ兩家の眞を失せりと雖も、金頂金殿  
 の沿革を知るに於て、未だ資料に補無し  
 とせず、峨頂の碑、此一銅碑のみ、  
 金頂殿舎の後、若干の空地を餘す、其縁鐵  
 欄を設く、欄下懸崖、名けて無地巖と曰ふ、  
 殿側、銅塔及び鐵塔あり、其年代銅碑と同  
 時なるべしと雖、蒼鏽奇古、明清間のもの  
 とは思はれず、金頂の後、名も恐しき無  
 地巖に臨めども、左程の險にもあらず、尙





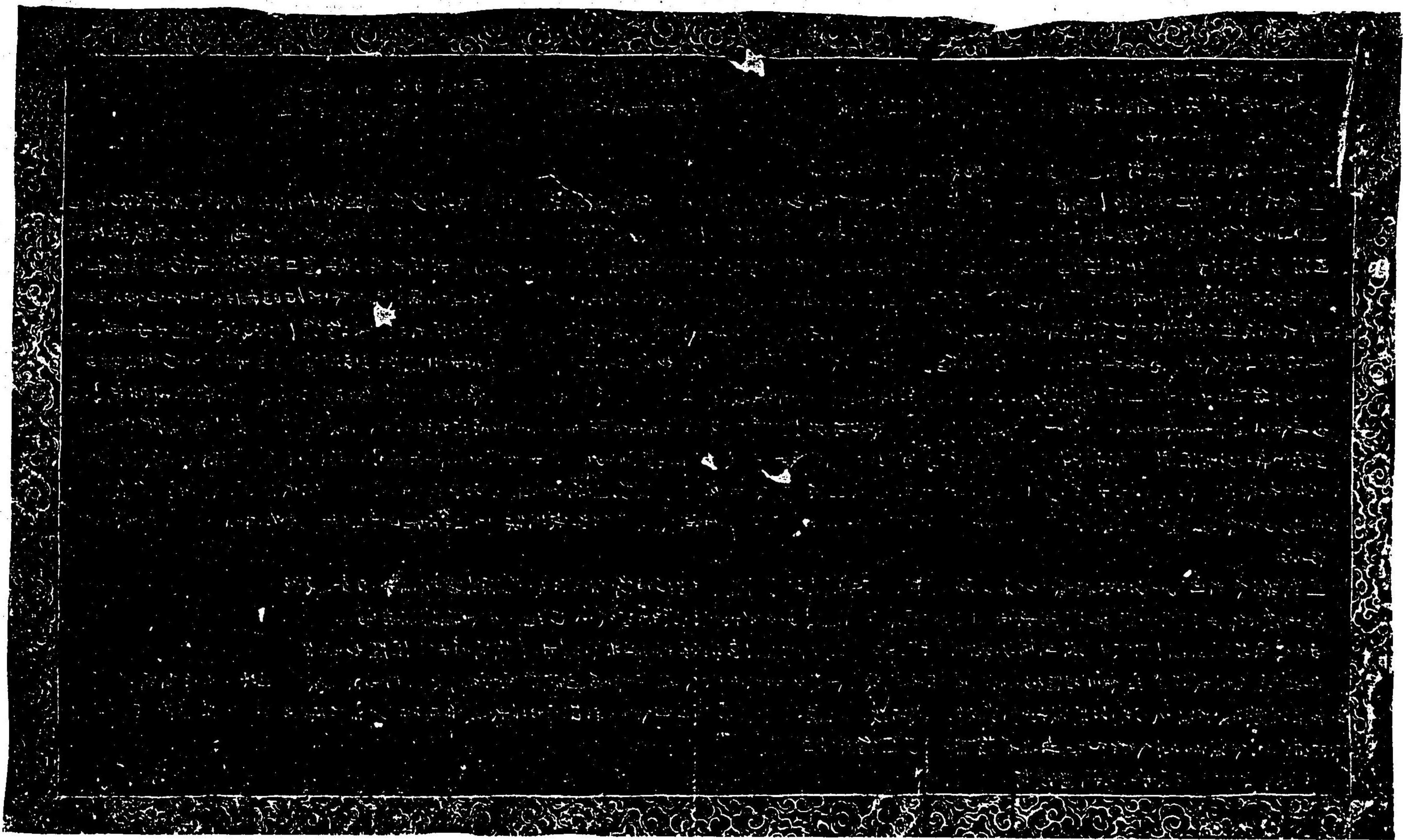
鐵瓦歌

山田謙吉

蠶叢故國削三峩。雄與昆侖控江河。七重天高靈光動。兜羅綿雲繞嵩阿。  
可憐兵塵加京洛。法壇于今歸寂漠。山靈怒矣金殿摧。鐵瓦飛向扶桑落。  
君不見昆吾精鐵千萬鍾。烈炎發來切玉鋒。誰言漢武爲瀆武。佩服足以  
拂妖凶。歐冶冷眼失調護。空取異材過鎔鑄。星文電光人不知。寶氣慘愴  
蝕障霧。已憾神物歸庸工。豪俊顯晦亦相同。摩挲爲汝費詩思。霜華影寒  
氣空雄。嗟呼三峩雄尊鎮西極。威靈何啻蒞蜀國。仙翁釋子曾留縱。古塔  
空龜映山色。漢家何事修虛文。坐將名山付風雲。惡借烘爐發龍泉。爲彼  
赤帝振六軍。



大殿銅建新寺藏非明永山巖大





大峩山永明華藏寺新建銅殿記

高四尺五寸五分  
廣二尺六寸五分

太上在宥六合。誕育蒸人。嘉與斯世。共臻極樂。遣沙門福登。齋聖母所願龍藏王鷄足山。登公既竣事。還禮峩峩峩殿。猛風倏作。棟宇若撼。因自念。塵世功德。土木鐵若勝。若劣。若非勝。若非劣。外飾炫耀。內體弗堅。有摧剝相。未衣殊利。惟金三品。銅爲重寶。瞻彼玉毫。敝以金地。中坐大士。天人瞻仰。眷屬圍繞。樓閣臺觀。水樹花鳥。七寶嚴飾。罔不具足。不越咫尺。便見西方。以此功德。廻施一切衆生。從見在身。盡未來際。皆得親近。供食一切諸佛菩薩。共證無上菩提。既歷十年。所願力有加。藩王殿下。文章河間之瑰奇。猷慮東平之樂善。聞登公是願。以四方多事。痼瘼有恤。久之乃捐數千金。拮据經始。爲國祝釐。會大司馬王公節鎮來蜀。念蜀嘗兵燹後。謂宜灑以法潤。洗滌陰氛。乃與稅監丘公。各捐餼以助其經費。己中使銜慈旨。賜尙方金錢。置葺焚修。常住若干。命方僧繫者主之。庀工於萬曆壬寅春。成於癸卯秋。還報我如來。弘開度門。法華會中。廣施方便。檀相薈雲。遍周沙界。竹林布地。上等色天。所以使人見像起信。故信爲功德之母。萬善所繇生也。法界有情。種種顛倒。執妄爲真。隨因成果。墮入□趣。嘗知空爲本性。性中本空。真常不滅。六塵緣影。互相磨盪。如金在鎔。爐冶煎灼。非金之



性舍彼鎔金求金之性了不可得十方刹土皆吾法身一切種智或淨或染有情無情皆吾法性大覺聖人起哀憐心廣說三乘惟寂智用渾之爲一然非因像生信因信生悟欲求解脫若濟河無筏無有是處故密我內重莊嚴外度爰闢廟塔以爲瞻禮馨潔香花以爲供養財法並施以破貪執皆以使人革妄歸貞了達本體而已正徧知覺善惡念之登公號妙岸力修梵行智用高爽法中之龍象山西蒲州萬固寺僧也乃系以贊曰世尊大慈父利益於衆生功德所建立種種諸方便後代踵遐軌嚴飾日益勝如來說法相皆是虛妄作云何大闢若福徧一切處微塵刹土中塵塵皆是佛衆生正昏迷深夜行大澤靚面不見佛冥冥罔所視忽遇紅日輪赫然出東方三千與大千萬象俱悉照六如陽春至百昌盡發生本自含萌芽因法而溉潤亦如母憶子形神兩相通瞻彼慈憫相酌我甘露乳唯知佛願弘聖凡盡融攝熒熒白毫相出現光明山帝綱日繽紛寶珠仍絢爛欄盾周匝扇戶各洞啓天龍諸金剛擁護於後先既非圖繪力亦非土木功於彈指間樓閣聳霄漢星斗爲珠絡日月成戶牖即遇阿僧劫此殿嘗不壞願我大地人稽首成三依一覽心目了見殿因見性若加精進力了無能見者佛法難度量讚歎亦成妄諸妙樓觀間各有無量光各修普賢行慎勿作輕弄我今稽首禮紀此銅殿碑佛爲證盟同歸智淨海。

萬曆癸卯九月之吉

賜進士第翰林院檢討漢嘉龍鶴居士王毓宗頓首撰

晉右軍將軍王羲之書

雲中未廷集  
吳郡吳士燭集

峽眉山銅殿法派  
開普行澄淨海智鏡常照男  
開思修心德覺週性出融

峽眉山普賢金殿碑

賜進士第中憲大夫四川等處提刑按察使副使奉勅提督學校前河南道監察御史聊城傅光宅撰

余讀雜花經佛授記震旦國中有大道場者三一代州之五臺一明州之補怛一即嘉州峽眉也五臺則文殊師利補怛則觀世音峽眉則普賢願王是三大士各與其眷屬千億菩薩常往道場度生弘法乃普賢者佛之長子峽眉者山之領袖山起脈自崑崙度葱嶺而來也結爲峽眉而後分爲五岳故此山西望靈鷲若相拱揖授受師弟父子三相儼然文殊以智入非願無以要其終觀音以悲運非願無以底其成若三子承乾而普賢當震位蜀且於此方爲坤維峽眉如地軸矣故菩薩住無所住依山以示相行者修無所修依山以歸心十方朝禮者無論緇白無間華夷入山而相好靚瑞光者無不回塵勞而思至道其冥心入理捨



愛棲真者。或見白爲行空。垂手摩頂。直遊願海。度彼岸。住妙莊嚴城。又何可量。何可思議哉。願其山高峻。上出層霄。鄰日月。磨剛風。殿閣之瓦。以銅鐵爲之。尙欲飛去。椽桷棟梁。每爲動搖。宅辛丑春暮登禮焉。見積雪峰頭。寒水湖底。夜宿絕頂。若聞海濤。震撼宮殿。飛行虛空中。夢驚嘆曰。是安得以黃金爲殿乎。太和真武之神經。所稱毘沙門天王者。以金爲殿。久矣。而況菩薩乎。居無何。妙峰登公自晉入蜀。携濟國王所施數千金。來謀於制府。濟南王公。委官易銅於鄆都石柱等處。內樞丘公復捐資助之。始於壬寅之春。成於癸卯之秋。而殿高二丈五尺。廣一丈四尺五寸。深一丈三尺五寸。上爲重簷。雕甍環以繡楹。瑣窓中坐大士。傍遶萬佛。門枋空處。彫畫雲棧。劍閣之險。及入山。道路逶迤。曲折之狀。滲以真金。巍峩晃漾。照耀天地。建立之日。雲霞燦爛。山吐寶光。澗壑峰巒。恍成一色。若兜羅綿。菩薩隱現。身滿虛空。嗚呼。異哉。依衆生心。成菩薩道。依普賢行。證如來身。非無爲。非有爲。非無相。非有相。大士非一。萬佛非衆。毘盧遮那如來。坐大蓮華千葉之上。葉葉各有三千大千世界。各有一佛說法。則佛佛各有普賢。爲長子。亦復毘盧如來。由此願力。成就普賢大願。卽出生諸佛。資主無礙。先後互融。十方三世直下。全空亦不妨。歷有十方三界。雜花理法界。事法界。理事無礙法界。事事無礙法界。此一殿之相。足以盡攝之矣。大矣哉。師之用心也。豈徒一錢一米作福緣。一拜一

念爲信種哉。師山西臨汾人。受業蒲之萬固。後住蘆茅梵剎。興浮圖。起住上谷。建大橋數十丈。茲殿成。而又南之補怛。北之五臺。皆同此莊嚴。無倦怠心。無滿足心。功成拂衣去。無係吝心。是或普賢之分身。乘願輪而口者耶。宅敬信師已久。而於此悟大道之無外。願海之無窮也。歡喜感嘆而爲之頌曰。峨眉秀拔。號大光明。有萬菩薩。住止經行。普賢大士。爲佛長子。十願度生。無終無始。金殿凌空。上接天宮。日月倒影。鈴鐸鳴風。萬佛圍遶。莊嚴相好。帝網珠光。重口明了。西連靈鷲。東望補怛。五臺北控。鐘磬相和。是一卽三。是三卽一。分合縱橫。非顯三密。示比丘僧。現宰官身。長者居士。國王大臣。同願願輪。同遊性海。旋嵐長吹。此殿不改。壽同寶勝。淨比蓮花。六千香象。遍歷恒沙。威音非遙。龍華已近。虛空可銷。我願無盡。

萬曆癸卯九月之吉

吳郡吳士端集

唐尙書右僕射上柱國河南開國公褚遂良書

雲中朱廷雅刻



登山者

は下り歩して、巖下の峯頭に至るを得べし、巖の右方に至りては則ち然らず、峭然たる絶壁數百尺を超え、其前群峯拱列、筭を簇するが如し、此絶壁の下は、即ち峨眉の眼目とも稱すべき佛光の現出するところなり、佛光に亞ぎて、峨眉の靈象と仰がるもの、佛燈と爲す、暗夜、無地巖より前方の峯上に現はるゝ燈光なり、金頂の右、一殿あり、祖殿と曰ふ、殿後の崖を下れば、巨巖屹然として立つ、其上平坦、能く數人を坐せしむるに足る、佛光出現する時、人これに躋りて望む、因て觀光臺と稱す、

峨眉の登山者は、外國人に在りては、概ね避暑若くは探檢の目的なれども、支那人は多く參詣者に屬し、其數毎夏五萬人を下らず、且つ五年に一回、西藏人の特に隊を結んで山に朝するありて、彼等は峨眉を以て一個の勝地とせず、實に普賢の靈境として、之を尊崇すること、猶ほ我か大峯白峯妙義等の諸山の如し、山中大小の寺院は、専ら登山者の賽錢喜捐を以て生活せり、而して米鹽其他の食料品及び一切の生活品は皆之を峨眉縣に仰げり、

到着の翌日より、二十八日迄、連日大雨、寒甚しく、爐を擁して身一步も室外に出でず、卅日に至りて雨收り、始めて出日を見たり、しかれども、夜來の雲氣未だ全く銷せず、午前十一時頃、同行學生の二人、走り來り、佛光出現すと告ぐ、驚破と金頂の傍なる崖

佛光

峨眉山



銀色世界

上に驅け付くれば、既に數人の支那人等は、崖端に匍匐して首を垂れて崖下を窺ひ居れり、余も之に仿ひしが、遂に此處よりは見るを得ざりき、佛光の虹たること固より言ふを俟たざれど、其現出するところ、恰も金頂の傍に在るを以て、尊んで佛光とはいふ、其現出の時刻、常に午前十時より正午頃迄の間に在り、其將きに現はれんとするや、日光雲に映じ、一面の銀色世界を呈す、之を兜羅綿雲と云ふ、既にして二三頭の佛現鳥と名くる鳥雲中に飛鳴す、尋で徑數尺に亘る一大圓光、崖の下方に在りて現出す、即是れ佛光にて、其現象は僅に二三分時間を出でざるなり、之を看るには、前記の靚光臺よりせば、崖上より俯瞰するに比し、危険少からざるのみならず、恰も真正面に當り、詳に其全影を觀るを得るなり、故に晴日に當りては、其時刻を計り、豫め靚光臺に登りて之を待つを要す、

佛光の類

佛光の狀、必ずしも一樣ならず、隨て其名稱亦た同じからず、峨山圖志の記するところを見れば、凡そ五種有り、其外暈數重、五色斑斕、虛明鏡の如く、望み觀る者、各自の形を光中に認むる者を、攝身光と名け、雲散して復た大圓光を出し、絢爛正視す可らざる者を、清現と名け、紫雲虹を捧ぐる者を、金橋と名け、白色にして紅暈無き者を、水光と名け、形、筭の如きを、辟支光と名け、鏡鏡の如きを、童子光と名く、是皆同時に其態を





千佛崖の雲



變じて名を異にするなり、

佛光は見るを得ざりしが、幸にも天晴れ渡りし爲め、四方の雲烟漸く消え、具に眺望の快を取れり、金頂の東より北にかけては、無數の小峯簇立す、皆相應に高くして且つ險ならんも上より見下せば、一拳螺に當らず、山勢漸く東するに及び、遂に平原と相連る、眼界窮るところ雲烟縹渺たり、南西二方峻嶺層嶽を隔て、遙に大雪山を望む、相距ること幾百里なるを知らず、天外の雪色芙蓉、碧空に挿む、最も是れ大峨の壯觀なり、

大雪山を望む

佛燈

此夜十時を過ぐる頃、僧來りて佛燈現ると報す、出て、金頂の後なる無地巖の上に至る、僧殿に戒めて隻語を發するなからしむ、此時霧無くして氣澄み、山樹聲を潜め、星斗闌干たり、良ありて三兩點の火、二三十間前に出づ、火の一び見ゆるや、僧切に警めて咳聲をも發するなからしむ、尋いで又出づること四五點、遂に數百千點の多きに至る、其火或は一所に住りて動かざるものあり、或は動いて趨るものあり、或は疾轉し、或は徐行し、儼として萬燈の光の如し、余等息を凝して眺めける間に、其中の數點、再々として進み來り、脚下の岩上に至りて止れり、竊かに小石一塊を擲ちしに、忽ち後退して、復た再び來らず、余等は尙暫く見まゝ居りしが、夜寒甚しきを以つて



客房に歸れり、此火は毎夜現出するものにて、曉時に及むで、始めて消失するといふ、火體の或小獸類に頼りて發せらるゝ一種の燐光たるは疑を容れざれども、果して其何獸たるやは、未だ究められざるに似たり、晝間には佛光あり、夜間には佛燈あり、峨眉山上の二異觀と謂ふべし、

三十日 昨夜の空合に似ず、朝來陰雲山を封す、余が意更に二三日を緩うし、その間に一び佛光を観んことを願ひしも、大野木田二君の否むところとなり、此日を以て下山の途に就くに決せり、下山は蓮花石より遇仙寺を経て、消音閣に出づべしと定め、急に歸裝を治む、

再遊期す可らず、歸裝成る後、又た相率ゐて金頂に登る、素濤銀海、數歩の外、隻物を認めず、唯た何來の響聲の斷えて、又た繼くを聞く、頃刻にして、殿角現はれ、塔松出づ、指顧の間、没して復た隱る、倏忽變幻、晴時無きところの奇なり、

午前八時を以て、金殿を下る、太子坪を過ぐれば、一天陰黒、雨を催さんと欲す、大乘寺に至りて、成都にて識れる二英人、息を喘きて登り來れり、我等は一個の磁石さへ帶せざるに、彼等は昆蟲採集器を携へたり、此時空合益益怪しくなりたれば、彼我俱に久語するに、遑あらず、各蓋を傾けて別る、蓮花石を下りて始めて大乘寺の磁碑を想

下山の途に就く

峨眉

第五十六

遇仙寺



峨眉山

遇仙寺

起す、引返すも容易ならず、恨を遺して進む、路傍に兩個の茅屋ありて、名も知れざる、木皮草根を嚼げり、皆山中生する所の藥材なり、中に鞞參と名くる、天生人參あり、大さ小指ばかり、淡黄色を帶ぶ、乾燥して石の如し、其價一斤三百文といふ、紀念の爲めに、余等三人各數斤を買ふ、鞞參は峨眉山の特有にて、其産額は明ならざれども、古來峨眉縣主要の輸出品として目せらる、藥材の外に、水晶の斷片をも鬻げるが見るに、足らず、又た軒先に數個の乾燥せる麝の上顎を懸けたり、又麝の鞞眉に産するを知るべし、

進むこと、凡そ半町餘にして、右折し、遇仙寺



觀音巖の

猿群

に至る、蓮花石を去る一千三百八十一歩、寺路に跨りて坡に臨む、寥曠無せんと欲す、寺を出で坡を下る、坡、長壽と名く、危磴、傾くるが如し、坡足、石梁、横に亘る、長壽橋と名く、橋右高深一練を挂く、石笋溝水源の一なり、梁を渡り、山麓に遊ひ、屈曲して行く、巨崖の右に屏立するに逢ふ、之を觀音巖となす、壁高さ數十丈、綫泉、之に懸る、水半空にして斷つ、飛沫、珠を撒す、崖下小潭、細石、璘璘たり、潭流れて路左に落つ、榛莽の中、淙然として聲あり、林泉の幽、實に清音閣と双絶を成す、觀音巖を過ぐれば、路漸く陡す、仙峯橋を渡る、二水皆石笋溝に注ぐ、坡右亂巖、欹仄、樹藤、糾紛の間、鳴猿三兩聲を聞く、眼を舉ぐれば、數頭の獼猴、樹又に箕踞して申如たり、人至ると見、梢を踏んで跳る、試に石を以て之に擲てば、相率ゐて地に下り、又樹を攀ちて奔る、人を認めて怖れざる、頗る愛す可し、調戲之を久うして去る、仙峰石に至る、石甚だ巨、形方柱の如し、路を夾んで立つ、上相倚りて仆れず、狀人字に似たり、進むで仙峰寺に至る、遇仙寺を距る、二千六百七歩、

仙峰寺

仙峰寺、陽に面して、崖上に立つ、殿閣高敞、庭除極めて寬淨、亦た峨山の佳境なり、寺前奇樹一株、椰瓢樹と名く、此樹一幹にして葉四種に分るといふ、寺前又た石峰數尖を望む、狀芙蓉に肖たり、蓮花峰と名く、

九老洞

寺右一路あり、往く八百餘歩にして九嶺岡に至るべし、岡上九洞あり、九老洞と呼ぶ、相傳ふ、昔、黃帝、天皇真人を訪ふてこゝに至りし時、一叟に遇ふ、帝、叟に侶ありやと問ふ、九人ありと答ふ、これより九老を以て洞に名くと、洞、深窈測る可らず、曾て人あり、炬を持して入る、進む三十餘里の後、鷄犬鼓樂の聲を聞く、蝙蝠あり、大さ鴉の如し、飛んで炬を撲つ、復た進む可らずと、余等探るに違あらず、

洪椿坪

寺を出づ、壽星坡を下る、坡一に九十九倒拐と名く、危磴盤旋、後人前人の肩を蹴んと欲す、峨山無比の險路なり、壽星橋を渡り、始めて平路に就く、往く數十歩にして扁擔巖に至る、巖路左に在り、其下、溪水盈盈、之を龍居溪と爲す、午後四時、洪椿坪に至る、宿す、仙峰寺を去る、七千四百四十九歩、

洪椿坪、坪を以て寺に名く、舊と千佛菴と稱す、楚山禪師の開建に屬し、明の徳心禪師之を重修す、其法嗣、銳峰接踵して工を畢ふ、前後二十餘年にして落成す、殿宇樓閣結構精を極む、清初に及び、峨雲圓滿禪師復た之を鼎新す、康熙乾隆間、經典字幅を賜ふ、現在の規模、左して宏壯なるに非ざれども、亦た峨山の巨刹に數ふ可し、

余等寺後の小院を以て宿房に充つ、院、深壑に瀕す、白雲青山、寢乍らにして管領す可し、此日は、金頂より殆ど直下して來り、途中は多勢にて興したれば、左迄疲勞も感せず、



太坪

ざりしが、寺に着くや、膝腰俄に痛み、飯畢るを待ち床上に委頓す。

會佛寺

三十一日 早發積善橋を渡る、此橋は屋根橋にして、兩畔各一字の屋門あり、路是に至りて、左右の二條に分る、右路に循ひ雙飛橋に向ふ、左路を取れば、太坪寺に至る、其路、急阪あり、蛇倒退といふ、古、此邊尤も虎害に苦しむ、坡上、山王廟、廟内虎像を置く、をつる建に及びて、患乃ち止むといふ、廟を過ぐれば、一池、路左に在り、池内蛙鳴、聲韻悠揚、人以て仙姫の彈琴に擬し、池に名けて仙姫と曰ふ、茂林を過ぎ、月臺を歴て、始めて禪院に至る、樓閣の結構、遠く洪椿坪の上、在り、寺邊虎多し、太坪を下り、山王廟下より左折せば、二千六百九十餘歩にして會佛寺に至る、其路、山脊に在り、陡甚し、行く者股栗せざる無し、路左危壁、人鳥到る能はず、之を猴子坡と爲す、坡に洞あり、猴王といふ、即ち猴王の窟宅なり、會佛寺蕭然たる孤刹のみ、寺を去る一千六百二十歩にして牛心寺に達す、順路を言へば、壽星橋より太坪、會佛寺をも歴巡すべき筈なれども、許多の荷物を携へ、再び絶險を度ること困難なれば、余等は壽星橋より、直に捷路を取らば、牛心寺に向へるなり、牛心寺、牛心嶺の上方に在り、一名延福寺、狭小なる荒刹なれども、逕思邈修煉の處を以て名あり、舊と曾て其遺す所の鐵臼、銅鑪を藏せり、吳船録に据れば、此寺、宋の繼業三藏の創むる所、業、俗姓王氏、耀州の人、東京天壽院に歸せり。

牛心寺

乾徳二年沙門三百人に詔し、天竺に入りて、舍利及び貝多葉書を求めしむるに臨み、業亦た遺中に在り、開寶九年を以て歸る、寺涅槃經一函四十二卷を藏す、業歸る後、每卷後に西域行程を分記せりと、此經、范石湖の時、尙は存在せり、其記する所の行程、范記、録して遺さず、寺、又た唐人張僧繇、或は曰く吳道子、筆に成る羅漢像の壁畫十六板あり、石湖の時、僅に其一板を存せり、石湖評して、當時成都古佛畫中、能く之に及ぶもの無しといへり、余普く搜索せしが、壁畫は勿論、經卷の一片すら得ること能はず、惜むべきなり、寺背温井涼井の二井あり、今、涼井獨り有り、現に飲料に供せらる、寺邊の峯頂、石洞あり、藥王洞と名く、洞中、逕仙か藥爐及び煉丹竈あり、皆探らず、洞外、巖石碎裂、草木を生せず、人、以て丹氣の蒸蒸して致す所と爲す。

回龍山

石船子

牛心寺を下り、黒龍江に沿ひ、清音閣に至る、少憩の後、道を廣福寺下に取り、溪を左にして進む、回龍山を下り、五顯岡を歴、溪中、一大長石の挺出するを見る、其狀、船の水面に浮べるが如し、名けて石船子と曰ひ、借りて地名と爲す、俗、又普賢の慈航に擬し、普賢船と稱す、下游鐵索橋を架す、長凡そ二十餘丈、幅一丈餘、懸然溪中に横亘す、對岸の路、即ち峨眉縣に至るの山徑なり。

石敢當

路旁石筍あり、高さ四尺許、方約六寸、石敢當の三字を刻す、本邦見ざる所なり、此石、

石敢當  
本邦見ざる所なり  
此石、



那隨處に之れ有り、其立つる處或は山間、或は路上、或は屋前、必ずしも一定せず、其用邪氣を禦ぐに在り、按ずるに、石敢當、漢の黃門令史游か急就篇に見ゆ、曰く、衛有石碯、石買、石惡、鄭有石葵、石制、周有石速、齊有石之紛如、皆有勢位敢當、言所當無敵也、今宅有衛射處、即位此石、蓋取此義、以禦煞星耳、故九人有擔當者、亦目之曰石敢當、即ち以上の數石、姓、勢位能く敵する者なし、人、義を此に藉り、遂に石敢當の三字を作り、之を石に鑄し、樹て、妖邪を斥けんと欲するなり、而して漢既に此俗有るを見れば、其由來、久しと謂ふべし、聞く我東京四谷區某町の上、此石ありと、知らず、彼に仿ひて作るものか、或は其石を齎らし來れるものか、

龍門洞

石船子より、一千八十四歩、龍門洞に至る、路仍は山麓に在り、兩岸峻巖、溪水石を嚼むて流る、此地一帶稱して龍門峽と曰ふ、巖眉出山、掉尾の一勝なり、石湖極めて其奇を稱し、盧山峽に減せずと爲す、路下大洞あり、龍門洞是なり、其口二方、一は溪中に、一は路右の崖側に在り、試に之を窺ふ、其中踴然たり、洞、舟を進むべし、洞中紺潭、底無し、盛夏の日、尙肌粟を催すといふ、洞壁、東坡が龍門の二大字を刻す、健峻喜ふ可し、豈石凸凹、鱗爪の如し、龍床、龍枕の名あり、洞中の奇觀なり、往く五六清里、始めて山と別る、これより平路に就く、

聖積寺

普賢銅像

八卦鐘

轉能

古塔

峨眉山

峨山十景

山を出で、村路に就く、路、聖積寺を過ぎる、寺、古、慈福院と稱す、明代の創建なり、建築類、紀を極むれども、大雄殿内、康熙中鑄る所の普賢騎象、金身丈六の銅像あり、象、地に伏す、制、萬年寺の象と異なり、最も寺中の鉅觀と爲す、殿外鐘樓あり、一銅鐘を懸く、其何代の製なるを詳にせず、鐘、八卦鐘と名く、高さ九尺、徑八尺、重さ二萬五千觔と稱す、頂部に六孔を穿ち、又別に一孔を頂心に開く、其制本邦播磨高砂寺の轉能に似たり、而して其大は彼に數倍す、以上二物、素より撫玩すべし、然れども、余をして流涎せしめたるものは、別殿中に放置せられたる古銅塔なり、其塔高二丈、總べて十二層、其周圍小佛四千七百尊を鑄出す、佛間又華嚴經全部を鑄す、緻工精妙、眞に無價の珍なり、日暮、峨眉山に歸る、縣の西門に入り、太和官店に歸る

餘錄

峨山十景

- 一 金頂祥光 金頂の佛光
- 二 靈巖重翠 地、未だ考へず、
- 三 聖寺晚鐘 聖積寺の鐘聲
- 四 象池夜月 洗象池の夜月



- 五 白水秋風 白水寺即ち萬年寺の秋風、
- 六 紅椿曉雨 洪椿坪の曉雨、
- 七 雙橋清音 雙飛橋の溪聲、
- 八 九老僊府 九老洞、
- 九 羅峯晴雪 羅峯庵を指す歟
- 十 大坪霽雪 太坪寺の霽雪

峨山四峨

峨眉山分つて大峨、二峨、三峨及び四峨の四境と爲す、四峨は普通に峨山の中に入れず、其高さ次を以て下る、大峨最も挺峻、群山を俯瞰し、三峨の勝を兼有す、二三四峨に至る、其道甚だ險、故に人跡極めて罕なり、余か行亦た大峨の外に出でず、今開く所に從ひ、茲に他峨の梗概を録し、聊か未見の記を作る、

大峨

- 大峨は前已に詳なり、今更に其寺庵を綜記して、後客の便覽に供す、
- 峨眉縣より大峨山麓に至る、
- 回龍寺 峨神廟 什方院 壁山廟 菩提菴 興聖寺 聖積寺 文昌廟
  - 保寧寺 子龍廟 報國寺 善覺寺

大峨山内

- 伏虎寺 雷音寺 華嚴寺 純陽殿 會燈寺 大巖寺 中峰寺 觀音寺
- 龍鼻岡 廣福寺 清音閣 金龍寺 萬年寺 觀心庵 息心所 長老坪
- 初 殿 華嚴頂 蓮華石 洗象池 大乘寺 白雲寺 雷洞坪 接引殿
- 太子坪 永慶寺 祖師殿 沈香塔 天門寺 七天橋 金 殿 錫瓦殿
- 臥雲庵 光相寺 祖 殿 金 頂 千佛頂 結草菴 明月庵 華嚴庵
- 萬佛庵 淨土庵 遇仙寺 僊峯寺 洪椿坪 太 坪 會佛寺 牛心寺
- 黑水寺 白袍殿 圓通寺 淨心廟 海會堂 佛牙殿 慈聖庵 新開寺
- 靈岩寺

二 峨

第二卷

二峨即ち中巖古の綏山なり、大峨の南に在り、高さ大巖に半す、形覆釜の如し、其路大峨伏虎寺上解脱坡頭より左折し、新開、靈岩の二寺を過ぎりて進む、山足紫芝廟あり、廟左紫南、純陽紫芝の三廟あり、紫芝廟より登る、先づ觀音殿に至る、殿左の樓を純陽樓と爲す、樓後猪肝洞あり、鍾乳を懸く、形猪肝の如し、故に洞に名く、明時四川督學王勳、洞前に於て地を掘りて石碣を得たり、紫芝洞の三字を刻す、因て洞一に紫芝と稱



す、其碕今道左に豎てり、其餘洞穴甚だ多し、今復た贅せず、觀音殿の上を老君殿と爲す、殿を去りて上る、三殿鼎峙、勢相讓らず、左を三皇殿、右を玉皇樓と爲す、而して兩殿の後に在るを清虛樓と爲す、三殿の左、數峰を隔てり、一寺あり、龍泉寺といふ、尤も到り易からざる處と爲す、巨洞、其下に在り、葛仙洞と曰ふ、二峩第一の名洞に屬す、山中桃を産す、名果の稱あり、但諺得綬山一桃、雖不得仙、亦足以豪之を指して言ふ、

三 峩

三峩即ち小峩、一名鐔、及二峩、清虛樓の後方に聳ゆ、山海經所謂西皇山是なり、山中寺庵あるを聞かず、空山寂寞、烟火の氣無し、但だ春晚、白桃花の歴亂たるを見る、其實紅色、味甘香、土人呼んで蟠桃と曰ふ、

四 峨

四峨一名花山、其形稜瓣花の如し、故に名く、大峨の直北に在り、印宗禪師止錫の處と爲す、水經注所謂峨山東北、有武陽龍尾山、仙者羽化之所、或は此山を指す、山中、小刹一竿、圓通寺と謂ふ、

峨山の記、大略右に盡く、抑も余峨に遊びて心に飽かざるものあり、何ぞや、余が見の會て科學的方面に及ばざる是なり、其氣象、地質より、以て動植物、建築物の異同、諸

陽桃

第三峩

第四峩

多の佛像、四川と西藏との宗教の關係等に至るまで、孰れか趣味あらざる題目なるべき、縱令以上の諸目が、悉く研究に値せざるにせよ、其自然物に至りては、儘に學界に資すべきものあるを疑はず、試に吳船錄六月乙未の記を見るに、大抵大峨之上、凡草禽蟲、悉非世間所有、昔固傳聞、今親驗之、余來以季夏、數日前、雪大降、木葉猶有雪漬爛斑之跡、草木之異、有如八仙、而深紫者、有如牽牛、而大數倍者、有如梨、而淺青者、聞春時異花尤多、但時山寒、人鮮能識之、草葉之異者、亦不可勝數とあり、是豈に高山植物の一斑に就き、しかも數百年前、頭腦單純なる一文人の記する所ならずや、彼其異とする所、今日にては未だ必ずしも珍とするに足らざるかも知れざれども、亦た以て奇種に富めるを思ふ可し、氣象なり、地質なり、動物なり、皆然り、徒に之を以て之を余輩遊客の過眼に委す、勿體無き心地ぞせらる、せめては其風光を記すれば、語りて未だ詳ならざるものあり、已んぬるかな、

峨眉縣より成都府に至る

八月一日、早天行を啓く、學生の一行は、徒歩にて歸省すべければ、一二日勞を醫せんとて、客店に留れり、縣城北門を出づ、稻田を度る朝風、颯颯として、輻簾を蔽す、田間往往白蠟樹を認む、午後一時、雅河の渡しを渡る、三時、夾江を踰ゆ、江、石橋を架す、橋寬

夾江

峨眉縣より成都府に至る



夾江縣

さ四尺餘欄無し、他所に見ざる所なり、對岸一城、夾江縣と爲す、此日烈日熾く如し、野外にては涼風に浴せしも、一び縣城に入りては、煥蒸殆ど堪ゆ可らず、城に入るに先ち、萬一にも清潔なる客棧に逢ふこともやど、空頼みに頼みけるが、此縣に限り、何條佳館の有るべき、轎夫は遠慮も無く、城内一等と呼はるゝ太和官店に昇き込みたり、請ふ讀者余が常に客棧の苦を語るを以つて、援となす勿れ、讀者若し支那内地に遊ばば、必ず余が言に點頭せられん、門内の廣庭に、既の敷藁とも覺しきものを、一面に乾し並べたり、今夜の寢臺に敷くものは、恐縮の至なり、此夜、蚊に苦む、南京蟲言ふ迄もなし、

二日 暮食して城を出づ、風露肌に可なり、行く數清里、小村に憩ふ、此道筋、從來外人の經過すること多からざる處にや、袒裼跣足の土人、犇犇と轎側に集り、甚しきは簾を揚げて窺はんとす、薄暮、斯蒙塲に達す、宿す、

三日 沿途異觀無し、午前十一時、眉州城に入る、街上年二十五六の一、女丐の屍體、路旁に横はれり、蛆蟲、鼻口に生じ、穢臭人を襲ふ、眉州を出で、彭山縣に向ふ、晚に縣城に入る、宿す、市街小なれども、其繁華、眉州の比に非ず、英人の設立せる福音堂及び佛人の天主堂、各一所あり、

彭山縣

洞治晏

小凌雲

第五十七



四日 午後三時、某河を渡る、外江の支流なり、對岸一小邑あり、洞治晏と名く、二水其下に匯す、邑、山を負ふ、山上奇樓翼然として出づ、余假りに呼む、小凌雲と爲す、吳船録六月己卯記に、新津縣對江一小山、上有絕勝亭、一望平野、可盡西川、杜子美所謂西川供客眼、惟有此江郊といふもの、殆ど是なり、峨眉を降りてより、一路平蕪、洞治晏に至りて、忽ち絶媚の江山に接す、天雨意あり、故に遊ばず、新津縣此處を去る遠からず、迂路に屬するを以て過らず、夜某驛に宿す、

五日 早發雙流縣に向ふ、午時、縣城に入る、縣、成都を去る四十清里、市井繁華、成都府屬有數の壯城なり、城内古關帝廟あり、香賽極めて盛なり、此地、曾て關羽の守たりし處といふ、縣の東南、唐の段文昌が讀書臺あり、俗之を段公讀書臺といふ、縣東十清里、故瞿上郷あり、孔子の弟子商瞿上の故里にして、又其墓の在る所なり、縣を出で、武侯祠を経て、薄暮、成都に歸る、和田氏余に先づ三日、青城山より歸る、是に於て相偕に、別後の平安を賀す、夜浴す、家書を読む、

成都に歸る

蜀道難より成都府に至る



唐岑參

峨眉山  
峨眉山  
峨眉山烟翠新，昨夜風雨洗，分明峰頭樹，倒掃秋江底。久別二室間，圖他五斗米。哀猿不可聽，壯客欲流涕。

唐鄭谷

峨眉山  
萬仞白雲端，經春雪未殘。夏消江峽滿，晴照蜀樓寒。道境知僧熟，歸林認鶴難。會須朝闕去，祇有畫圖看。

唐李白

峨眉山  
我在巴東三峽時，西看明月憶峨眉。月出峨眉照滄海，與人萬里長相隨。黃鶴樓前月華白，此中忽見峨眉客。峨眉山人還送君，風吹西到長安陌。長安大道橫九天，峨眉山人照秦川。黃金獅子乘高座，白玉麈尾談重元。我似浮雲滯吳越，君逢壘主遊丹闕。一振高名滿帝都，歸來還弄峨眉月。

宋趙抃

峨眉山  
蜀山天下奇，三峨壓岷右。誰為孤劍外，名出嵩華後。

明解縉

峨眉山  
峨眉山春日，闌輝娟。雷坪夜響空中泉，江南客子喜空翠。踏遍平羌江水邊，歸來夢寐遠虛壑。

千花爛錦明，曠嵬起來如。在峨眉巔，畫史新圖為君作。隔西太白去不遠，花茂草堂苔石斑。兩川風景世間少，令人長憶峨眉山。

明周洪謨

眉山天下秀

大峨兩山相對開，小峨迤邐中峨來。三峨之秀甲天下，何須涉海尋蓬萊。昔我登臨彩雲表，獨騎白鶴招青鳥。石龜金洞何參差，時遇仙人拾瑤草。丹巖瀑布連天河，大鵬圖南不可過。晝昏雷雨起林麓，夜深星斗棲巖阿。四時青黛如彩繪，岷嶓蔡蒙實相對。昔生三蘇草木枯，但願再出三蘇輩。

清覺和

懷

謁罷峨眉嶺，常懷第一峯。臺高常見月，山靜獨聞鐘。古雪搖瓊嶼，飛泉掛玉龍。何時重躡屐，散步倚雲松。

明李化楠

題伏查虎寺僧畫虎歌

林深月黑初出走，掉尾草間自抖擻。松聲颯颯斑奴來，空山無人一回首。夜聞咆哮驚雷電，頭為震搖股為戰。明朝寫向屏幃間，恍惚重岡陰雲變。知君前生善覺師，大空小空旁繞之。想其下筆身作虎，正當寅日風生時。嗟爾稱爲百獸長，真氣自可逐魍魎。莫學江乙客王門，謬將威柄假狐羆。



華嚴寺

雲從石上起，泉從石下落。多少遊山人，長嘯倚山閣。晚鐘有雲出，晚鐘有雲歸。遊人應未慣，忽訝雲生衣。

明楊慎

寄峨眉閣達

層巒碧落萬年烟，紅翠江頭橋露淺。寒雁一聲頻寄語，茄瓢笠笠枕雲眠。

清行密 峨僧

送印光禪師禮峨

正值春初柳眼開，折來相餞當茶杯。草鞋得到最高處，携取峨眉山月回。

清行喜 峨僧

山居

九日柴門雨亂飛，禪心無住客來稀。西風不管黃花夢，林鳥山雲各自歸。

清永宜

峨嶺早春

菲膚清淨只幽巡，日對清巒數點新。疎壁管留穿牖月，垂楊偏送隔簷春。止居不過三間屋，坦率惟捐一點塵。慚愧繁山無箇事，虛聽高臥一閑人。

清海源 峨僧

峨嶺秋

萬籟冷風紅樹顛，杖藜閒步洞山前。疎林過鳥知寒露，古木留蟬噪暮烟。寂寞泉聲依玉峽，蕭條梵宇長金蓮。曉鐘何事朝來急，敲落晨星散碧天。

清照裕 峨僧

贈伏虎寺僧

不知名利苦，念佛老岷峨。衲補雲千片，香焚冢一窠。巒山人事少，憐客道心多。日日齋鐘響，高懸瀟水羅。

唐唐球

伏虎寺

幾年塵土夢，得臥遠公房。雨過雲根靜，風吹石髮香。小溪秋水碧，蚤稻野雲黃。為愛山行樂，淹留亦不妨。

明王宣

峨眉山

出郭涼風入，抱清亂山遮。馬似相迎，寧知待詔金門客。忽作看山聽水行。

明方孝孺

峨眉山

峨眉樓閣現虛空，玉宇高寒上界同。茶鼎夜烹千古雪，花幡晨動九天風。雲連太白關中夏，日繞重元宅大雄。師去想無登陟遠，祇應飛錫驗神通。

元黃鎮成

峨眉山

鳥靴脫却換青鞋，踏遍名山愜素懷。虎嘯石頭風萬壑，鶴眠松頂月千崖。雲開面面峯如削，谷轉行行樹欲排。湖海故交零落盡，烟霞清趣幾人偕。

明方孝孺

山居次韻

明元英



抱拙林泉下，安貧任意間。無絃琴易操，有韻句難刪。雨過雲初曉，風回戶自關。故人何處見，梁月轉青山。

山居即事

蜀僧海明

幾年勤破是非關，小結茅茨擬住山。園裡竹鷄晴引子，崖前石虎老生斑。一條心事弓弦直，三個柴頭品字灣。法法拈來皆活句，更餘何事可躡攀。

華嚴寺

明方孝孺

棲身丹壑縱忘歸，水閣頻登趣不稀。雨脚斜侵耕叟笠，苔花青匝定僧衣。山餘積雪寒猶壯，巖墜流星曉更飛。下築吾將依此地，玉堂清夢任交違。

歌鳳臺

明楊慎

楚狂千載士，悠悠避世情。蜀山一片石，猶存歌鳳名。豈與熊鳥徒，導引學長生。列仙誰所傳，劉向徒聞聲。

白水寺

明趙貞吉

草路王孫遊，瑤京十二樓。春風山鬼寂，落日海雲秋。埃壘飛金虎，烟霞下玉虬。空聞孫子嘯，飄散最高頭。

白水寺淨光軒

宋范成大

翫華銷盡入窓明，雨竹風泉入妙聲。身世只今高幾許，北峯潭共倚闌平。

白水寺

明安磐

紫烟雨花濕，晴山已宿招提。第四關橫笛夜深，龍眠起，斷巖懸石水潺湲。

四會亭

清兩山

雲近天垂一鑑空，天邊春擁梵王宮。山桃花上輕含雨，烟柳枝頭軟帶風。錦繡粧屏舖殿北，笙簧吟鳥過樓東。旭晴細向臺端望，不是山中是畫中。

胡僧梯

明安磐

西望千峯路轉賒，碧杉紅藥有仙家。明年二月東風暖，來看杪樞五色花。龍蛇驅逐上胡孫，古木連陰白晝昏。八十四盤寒水石，空濛無處著人言。

靈巖寺

明徐文華

杉外疎鐘斷續聞，靈巖清曉渡溪雲。蒼茫還有看山興，獨立無言到夕曛。

木皮殿

明方孝孺

自慙非佛亦非仙，也宿丹巖綠樹巔。曉汲衣翻草頭露，午炊竈起木皮烟。日離滄海三竿遠，天壓烏紗五尺連。頓覺眼前無俗物，片雲飛過鳥爭喧。

觀心坡



入山簪宿雨，上山賀朝霽。跬步便歷險，轉盼已呀氣。豈惟膝點心，固已頭搶地。遊人貪勝踐，姑念蜀難易。

八十四盤

宋 范成大

冥鴻無伴鶴孤飛，回首塵籠一笑嬉。八十四盤新拄杖，萬千三乘舊牙旗。石梯碧滑雲生後，木葉紅斑雪霽時。說與同行莫惆悵，人間捷徑轉嶽巔。

杪樞坪

仙聖飛行此是家，路逢真境但驚呀。神農嘗外盡靈藥，天女散餘多異花。嵐雨逼衣寒似鐵，冰泉炊米硬於沙。峯頭事事殊塵世，缺甃跳梁笑井蛙。

臥雲菴

清 通 醉眠僧

七重天末號峨眉，樹裏老僧下榻遲。八十四盤行欲盡，青山湧出象王兒。

光相寺

宋 范成大

峯頂四時如大冬，異花幽草春自融。苔痕新踏六月雪，木勢舊偃千年風。雲物爲人布世界，日輪同我行虛空。浮世元自有超脫，地上可憐悲撥蓬。

臥雲菴

明 楊 慎

青鸞紅塵此地分，飛屐削壁迴人羣。穆王馬跡何曾至，望帝鸞聲絕不聞。春夏未消千古雪，

陰晴常見一溪雲，支笻石上寧辭倦。采藥名山喜共君。

送臥雲菴僧

唐 賈 島

下視白雲時，山房葢樹皮。垂枝榕落子，側頂鶴聽棋。清淨從沙劫，中終日未歇。金光明本行，同侍出峨眉。

光明巖

宋 白 約

樹倒因成路，林開忽見村。鳥音傳木杪，梵語出雲根。雪色連春夏，風聲接曉昏。徘徊幽興極，回首謝煩喧。

光明巖

宋 蘇 軾

峨眉山西雪千里，北望成都如井底。春風日日吹不消，五月行人凍如蟻。膠西高處望西川，興在孤雲落照邊。瓦屋寒堆春雪後，峨眉翠掃雨餘天。治經方笑春秋學，好士今無六一賢。且待淵明賦歸去，共將待酒趁流年。

勝峯山 (即ち大峯の嶺)

宋 范成大

勝峯高哉摩紫青，白鹿導我登化城。住山大士喜客至，兜羅布界領相迎。圓景明暉倚雲立，絕如七寶莊嚴成。一光未定一光發，中有黑像隨心生。白毫從地插空碧，散燭象偉天龍驚。夜神受記亦修供，照世洞然千百燈。明朝銀界混一白，咫尺眩轉寒凌兢。天容野色儼開閉，



慘儻變化愁仙靈、人言六通欲大現、洗山急雨如盆傾、重輪疊采印岩腹、非烟非霧非丹青、  
 我與化人中共住、鏡光觀面交相呈、前山忽湧大圓相、日圍月暈浮青冥、林泉草木盡含襄、  
 是則名為普光明、言詞海藏不勝讚、北方復有金橋橫、衆慈久立佛事竟、一塵不起山鈴響、  
 向來無法可宣說、爲問有耳如何聽、我本三生同行願、隨緣一念猶相應、此心且復印心地、  
 衣有寶珠奚外營、題詩說偈作公案、亦使來者知吾曾、神通佛法須判斷、一任熱椀春雷鳴、

光明巖

累塊蒼然是九州、大千起滅更悠悠、雪光正照天西角、日影長浮雨上頭、峯頂何曾知六月、  
 塵間想已別三秋、佛毫似欲留人住、橫野金橋晚未收、



淡白鹿觀瓦  
 文曰 甲天下

巴蜀と雪村

世に岷峨集なるものあり、僧雪村が秦蜀荆楚の間に成れりし詩を録せるもの、雪村  
 とは誰ぞ、今は世に忘れられたるが、前六百餘年、遠く巴蜀に吟嘯し、縦横の才華と鏗  
 鏘の詞音とを以て、當時其名を士大夫縉紳の間に馳せたる、我五山の僧、釋有梅是な  
 り、余竊に以て祕書晁衡以來の一人と爲す、

雪村の傳

雪村諱は有梅、雪村は其字、自ら號して幻空と曰ふ、越後白鳥の人、其母和州東大寺の  
 大鐘を呑むと夢みて身む、正應三年庚寅の歳を以て誕す、童子の時國師一山に禮し  
 て契する所あり、長じて相模の福鹿寺に隨侍し、又移りて京師建仁寺に入る、當時本  
 邦の衲子争ふて元に入り、知識に參して大事を決す、後二條天皇の徳治二年、雪村甫  
 めて十八歳、亦た錫を振つて海に浮ぶ、彼土に在りては、實に元の成宗の大徳十一年  
 なり、著國の後、京兆諸勝に放浪する二年、文名藉甚、緇素朝野、並に參扣せずといふこ  
 と無し、曾て趙子昂を翰苑に訪ふや、李北海か筆勢を揮ひて之を驚す、趙氏、其頗る八  
 法を得たるを稱し、贈るに大府煤を以てせり、後ち湖の道場山に登り、堂頭叔平隆和  
 尙に執侍す、博學多聞を以て稱せらる、是時、元主方に四海を臣伏するの志あり、獨り  
 日本の思服せざるを以て、雪村を刑籍に列し、之を雪川の獄に囚す、叔平もまた雪村

獄に囚せ

巴蜀と雪村



西蜀に  
せらる

の故を以つて囚へられ、遂に獄に亡せり、雪村將に刑せられんとす、自若として憚色無し、乃ち佛光禪師の乾坤無地卓孤筇、且喜人空法亦空、珍重大元三尺劍、電光影裏斬春風の一偈を唱ふ、因りて死に免る、これより名益振ふ、時に雪村年二十四、長安に宥在する三年にして、朝議雪村を西蜀に竄す、雪村出て、函谷を踰え、秦隴を度り、崧華に登り、苦吟跋涉、遂に成都に編置せらる、其蜀に入るや、曾て峽中の舟中に於て、其喜ぶどころの南華真經を繕く、一紙を看畢る毎に、劈いて之を水中に棄つ、人其故を問ふ、雪村笑つて答ふらく、記せずんば、何をかせんと、聞く者舌を捲く、成都に到るの後、鉅家名門多く子弟を遣して、業を受けしむ、刑餘の身を以て、師長の優禮を受く、恐くは今古其儔無し、然れども、扶桑萬里の外、蠶叢魚鳧の荒僻に屏居す、豈に心憤口排能く、自ら禁するを得べけんや、一部の岷峨集、殆ど其黻讎の餘孽なり、既にして大赦に遇ふ、召し還されて、復た長安に留ること三年、天曆元年戊辰、文宗位に即く、雪村命を享け、京兆翠微寺に住す、翌二年の夏を以て、始めて東に歸る、時に年四十、元主特に寶覺真空禪師を贈る、

東歸

旅船恙なく、博多の津に達す、直に相模に赴く、親舍何れの處ぞ、存没亦た知る可らず、道、由比が濱を過ぎる、乗る所の馬、一蹶して泥中に墜つ、因て路旁の茅舎に就き、泥衣

大赦に  
遇ふ

東歸

母子奇遇

を燥澀す、舎に一嫗あり、見て而して泣く、雪村其故を問ふ、嫗曰く、我に二子あり、皆早く空門に入る、一子遠遊して未だ歸らず、我れ其季と待つこと已に久しと、雪村之を聞きて心驚く、近いて嫗の面を熟視すれば、其母なり、是に於て母子相抱て、悲喜交も起る、雪村平生一金を携へ、奔竄の時と雖も、敢へて漫用せざるものあり、志、母氏に獻して、慈顔を怡ばしめんと欲するに在り、乃ち包を解きて之を奉る、之れより母子同居、夏清冬温、孝を致して己む、

入寂

歸るの翌年、鎌倉の壽福寺に入る、後出て、諸國の名刹に轉住し、遂に勅命を以て京師建仁寺を董す、貞和二年丙戌の冬、俄に病を獲、朝廷醫藥を錫ふ、辭す、病革る、左手を以て逝偈を書す、字畫成らず、憤つて大筆を屏上に擲つ、墨未だ乾かざるに、其位に寂す、時に年の十二月二日なり、享年五十有七、越えて三日、清住庵に開維す、

雪村の遊

雪村禹域に在る者、二十二年、南衡北恒、東岱西嶂、巴閬嘉渝、荆唐灃瀟、瀟湘洞庭、廬山の瀑金山、玉山、吳雪、楚花、皆丈頭の玩具たり、而して巴蜀に費すの日月、實に其半に居る、然れども、其間に於ける出入行住、今詳に考ふ可らず、但だ行道記及び岷峨集に據り、長安より雲棧を踰えて蜀中に入り、成都に滯留する幾年の後、岷江に由り、重慶に下り、三峽を経て、中原に出で、更に北指して長安に歸りたるを知り得るのみ、



岷峨集

岷峨集上下二卷、元祿中、天啓か零簡を散佚の餘に求めて編するところ、詩を録する共に二百四十餘首名は岷峨といふも、詩の必ずしも蜀中得る所のみに限られざるを見れば、此篇は幾と雪村か禹域に流寓せる全年間に亘れるものとなすべし、且つ編次錯綜、又詳に干支を繋げざるを以て、甚た作の後先を知るに苦む、然れども、全體の次序、入蜀前を首とし、在蜀間を中とし、出蜀後を尾とするが如し、歷程此くの如く遠く、經年彼の如く久しくして、詩且つ三百に足らざるもの、固より全豹の一斑に過ぎざるも、その風藻と壯遊とを懷ふには、尙ほ餘り有るを覺ゆ、余今ま他か入蜀より出蜀に至るの吟を抽き、又略ほ其錫程を按じ、以て、巴蜀と雪村の半面を窺はんと欲す、

雪村竄せられ、長安を去りて蜀に向ふ、躊躇獨行、途、函谷を出づ、偶作十首、胸中の茅塞を披かんと欲す、

雪村函谷を出づ

函谷關西放逐僧、黃皮瘦、衰骨稜、囑、有時安坐幽巖石、只空空生作友朋、

函谷關西放逐僧、是何頑惡得、人憎、獨體刃下逃、腥血脚、債會煩、驛吏微、

函谷關西放逐僧、慣騎鐵馬走、冰稜、曇花落、二千年後、又見黃河一度澄、

函谷關西放逐僧、同行唯有一枝藤、終南翠色連嵩華、慶快平生此一登、

函谷關西放逐僧、生涯善以拙爲能、千鈞弩發難邊雀、驚落搏風化海鵬、

函谷關西放逐僧、鈍根仍得嗔羊稱、瓶空遠餉他方國、誠海無風浪自騰、

函谷關西放逐僧、擬將何法當宗乘、三玄三要閑戈甲、半滿偏圓爛葛藤、

函谷關西放逐僧、全機銷燐火中冰、破弟風捲荒山頂、百鳥啣花更不曾、

函谷關西放逐僧、海山衣鉢取無憑、千生黑業性猶在、百煉黃金色更增、

函谷關西放逐僧、砂非鉢本不勞蒸、長伸兩脚深雲裏、自在烏沈魄又升、

岷峨の雄に對し歌ふて曰く、

西南足元氣、融結川與山、大峨勢不群、渥注出天閑、奔騰六合表、一目窮海寰、

轉、睥睨坤靈頂、鳥兔岩半腹、昏曉蟻循環、脚雲白如綿、祥光圖畫間、幽禽呼念佛、

薄俗疑生姦、此景無此客、獨吾開心顏、吳侯文豹姿、天才富不慳、九原如可作、携手遊松關、

岷山は天下の名山なり、大江一萬里、其源を發するところ、雪村之に對して岷山歌を

作り、以て胸臆の豪宕を開擴す、

岷山岌岌天尺咫、岷水湯湯濤萬里、險隘攢聳莫耶鋒、烟塵隔斷咸陽市、塞隘異候自仙

都、氷雪嵌空從太始、崖前鹵井湛星芒、谷底甘水流石髓、琪珎錯落雜、

嶺、芝草蒼生蘭芷、鸞鶻飛鳴蟠赤龍、麒麟蹂躪伏青兕、形勝自可暫遊觀、

出奇未許窮躋攀、橋梁架祭

岷山歌







蜀中得る所の道友詩侶、其何人たるを考ふ可らず、詩意を以て之を搦るに、岷峨集載する所の石橋、快菴、習野大師等の入、其唱和交游たるに庶し、

乙丑立春後一夕錦城燈火、因誦甘露滅歌、紅香霧噴東華之句、別成一章寄石橋

南隣歌鼓北隣絃、景物催人底更連、春到江城纔一日、燈觀林寺恰三年、冰魂夢月梅先老、凍眼悲霜柳未眠、有興不險陰有愧、石門文字石橋禪、

再韵答石橋

一奏獅絃絕衆絃、驚人妙語玉相連、淨絲須了百八首、此話大行三十年、錦里光風中自數、湘山秀色裡誰眠、寥寥燈火春寒夜、萬象森羅對說禪、

石橋再和兼寄快菴故茲三韵以成雅況耳

我詩久緩弗鳴絃、春草池塘忽夢連、風月真成無盡歲、關山同是未歸年、隣鐘飯熟嗟來食、賓榻氈温快活眠、明日莫教東道主、江郊築室去安禪、

病枕織長句謝石橋發樂

君不見江西馬祖昔强健、眼若流星機若電、一日不安却勞忙、被人看破日月面、又不見毘耶城裏彼上人、寥寥一室清風清、我病推與衆生病、靈山一會皆春變、乃佛乃祖千萬錯、檢點將來束高閣、半年蜀道歷艱險、寒熱相攻病正作、耳黑面黃支體枯、頭疼目眩頻

呻呼、何物小兒巧乘隙、欺我萬里形骸孤、擠排不去廿日餘、連頭傲死難、枝梧移床側、枕酒家墟、主人歡飲忘甘荼、天生我命有時蘇、未必逝者如斯夫、問君囊中狼虎嘔瀝藥、河似雪山肥膩香草純醍醐、

既にして赦命下る、雪村蜀を出づ、路舟に岷水に由る、并州故郷の情寄せて雪山陰留別錦里諸友の一篇に在り、

我愛雪山雪、堆銀沙萬仞之、巖峽、顛倒春風吹不銷、今古高寒太清絕、又愛雪山雪、披絮帽一片之輪困、追隨元氣衆復散、乾坤廓落何邊垠、雲與雪兮殊不惡、雪與雲兮竟何若、上林賦客氣應飄、姑射仙人顏渾約、雪可尋雲可伴、誰云無語難相款、孔父傾蓋温伯雪、呂安命、忽稀中散、人間輕薄託輕言、方寸何啻千兵屯、幾回回首雪山山下雲邊村、思君明月愁黃昏、

岷江に循ひ行く行く漢嘉に到る、又た三詩を將つて石橋に寄す、

遠林斜日鳥高翔、湖海知君夢未忘、我亦凌雲非久客、鮮甘待熟蒹葭管、

雕肝刻腎稿殘形、語笑春風草木馨、歲晚不知重會否、楚江烟水白鷗汀、

道人來覓寄君篇、廢我山房半夜眠、一雲松風吹雨過、破窓新月上陰肩、到漢嘉寄石橋三首

漢嘉の淹留は一日にして止まざるが如し、詩傳ふるもの兩三首に過ぎざらん、



江に鑑み九頂に攀ぢ、以て其險身を養へる、想ひ見るに堪えたり、

丙寅夏五凌雲會荔枝

猿枝百尺翠虬鬚、子熟南風氣正炎、色似玉環妖血染、味如唐令諫書甜、况無三日香堪、  
裏那有千飽蜜可、醜待我移筇闔嶺路、更攀龍眼食相兼、

凌雲訪鑑堂不值和壁間韻二首

岩苑凋玉暈、江月琢水痕、對此兩萍梗、懷君幾曉昏、筆端真箇活、身外若爲論、賺我凌雲頂、空留翠鎖門、捫蘿詩興爽、隔岸市聲喧、春水橫浮閣、暗嵐對泡軒、釋龍那可問、花鳥自忘言、細讀磨崖篆、坡仙學有源、

六七月の交は、蜀中多少の川流、皆漲らざるは無し、漢嘉三江の會、滔滔襄陵、尤も其壯を見る、是に於て、嘉陽觀水漲三十韻の作あり、雪村の詩其無量の感憤を排するもの、或は淡然として二十八字に止む、然れども、一旦名山川を詠するに至りては、往往多韻を以て行るものあり、此篇の如き、縱橫排募、勢控勦す可らず、

嘉陽觀水漲三十韻

嘉州匯三江、深發浮滂泱、千尋底莫窮、萬里源而往、澎湃據上游、滄浪逐佳賞、七月暑闌珊、一川氣清朗、圓闔轉鈞樞、風雲變忽恍、靈隱殷昏朝、天瓢洗穹壤、巖山對空蒙、瓦屋迷茫蒼、龍泓即鳴竈、鳥尤僅如象、枯查逐浪來、巨石崩湍槍、奔駭劈箭機、灣澗旋車輞、皎織

漢嘉去

綃以潛募盪舟莫、上城郭決沙堤、亭臺漂石磔、林塘滾潢汗、洲渚明混濛、昨日映蕪菼、今朝失菰蔣、鳧鷖各散飛、魚龍恣爭攘、任公請收綸、預且安施網、似乘若肩可、泚馮夷顛、行客且驚惶、奮夫宜慷慨、斗斛付空空、田禾殊勞勞、清哦強自寬、賦坐端可想、池井涸有時、蛙蛙聒於龔、吹畝圻文龜、靈湫虛脾壘、早潦初難期、炎涼或易爽、去病得時名、衛青叛其黨、人情但桔槔、宇宙空俯仰、物理惣輪環、古今幾消長、曲士辯連犴、達人才側儻、泐澗絕端倪、溝洫誠缺掌、我欲乘此流、明當擊蘭漿、赤岸洞庭東、烟波渺方丈、七月下旬嘉陽觀水漲三十韻

八月を以て、漢嘉を去り、渝州に向ふ、寄別李公叔の二首あり、李公叔は漢嘉にして相識る所の者なるべし、其詩に曰く、  
水榭聲名記昔年、追隨鷹隼雪帳天、筆扛龍鼎臺、術表蒼抱鴻、鈞造化篇、行樂人生能幾幾、竊靡世事動連連、嘉陽幕府江山好、今若詩仙與酒仙、  
山城宿雨霽晏高、萬斛炎歇一戰塵、吟到峩尖中夜月、夢隨巴激半江濤、我方無事學龜策、君亦有官如馬曹、話別西風烟棹遠、青雲他日望英豪、  
八月十四日の夕、尙漢嘉に在り、凌雲の僧鑑堂と同じく、岩房の月を賞す、一詩あり、叙興と別離とを併せ賦するもの、

半歲冷交情如水、折鑄聊共煮新葵、絕冷筆底無塵滓、不道胸中有町畦、寥寥岩房同夜



重慶に至る

月看看烟艇別山溪、應知巴峽啼猿曉、夢夜龍泓竹庵西、八月十四日夕、口占上寄靈堂  
 翌十五日、孤舟峽中に入る、夜清水溪に泊す、一盤の明月、斷腸の色、  
 一峽寒江界尺天、玉繩低水耿人眠、十分清賞今宵月、不在朱樓碧戶邊、中秋舟泊、清水溪  
 往くこと四日、重慶に至る、

嘉州七月愁、伏雨渝州八月困、殘暑山川何處異、乾坤造物戲人遊、如許炎涼態度何足、  
 云、江上風波嘗險阻、長嘯推逐玉宇浮、眼明白鳥橫烟浦、十九日至重慶舟中苦熱  
 九月九日、身未だ重慶を離れず、節物風光早く已に重陽に逢ふ、黃菊情多しと雖も、東  
 歸期して待つべし、

巴國風霜曉未嚴、籬邊無酒憶陶潛、白衣知是送不送、黃菊情多拈更拈、逸興東歸雲海  
 外、浩歌西遠雪山尖、明年兄弟登高樂、水石蕭蕭竹半欄、九  
 和鶴野相公送行韻二絕寄筆の作、重慶滯留の間に成れるが如し、

再び峽江に浮ぶ

半年淪落大江東、夢裏相尋不見蹤、記得餞行雙白玉、分明月影與春容、  
 剡藤未有玉相知、安得黟川點漆餘、只遺毛生穎囊脫、奇勳終待策中書、  
 重慶を去り、再び舟に乗りて峽江に浮ぶ、進むで雲陽に至る、其識る所の玉州剣在り、  
 賦して之に贈る、

耿世文章自有宗、鶉鷺百練淬詞鋒、佐州先試判花手、莅事全無芥帶胸、江帶青衣秋漲  
 綠、城連白帝晚烟濃、知公政簡多陰興、還許詩僧一笑逢、寄王  
 余が観る所を以てせば、岷峨集中巴蜀に關するの篇、略の如し、雪村か畫ける巴峽三  
 峽の什詠は、竟に看るに由無し、雪村が詩、大半亡逸に歸す、人の惜んで措かざるとこ  
 ろ、余特に楚蜀三峽の作の傳はらざるを恨む、

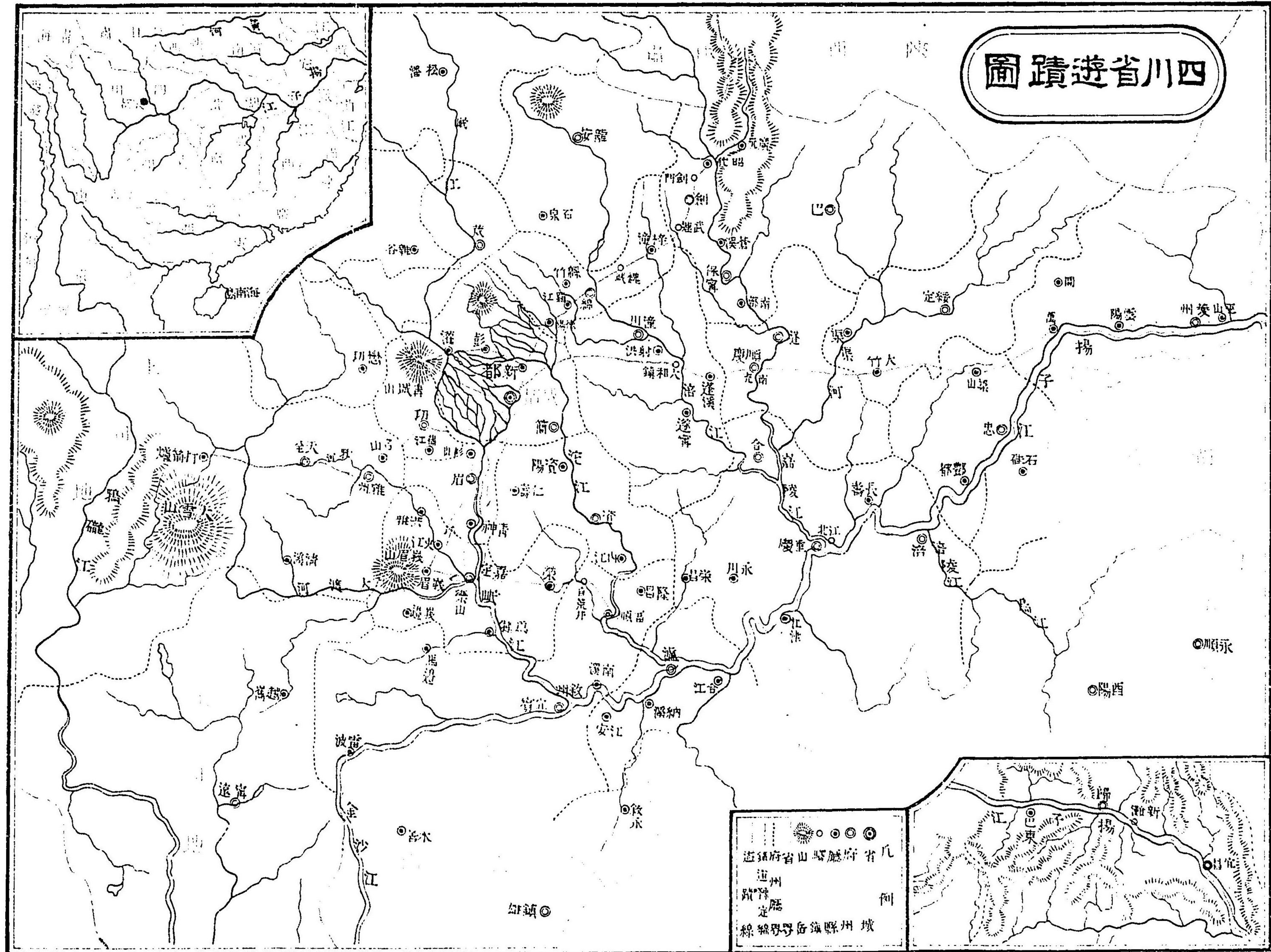




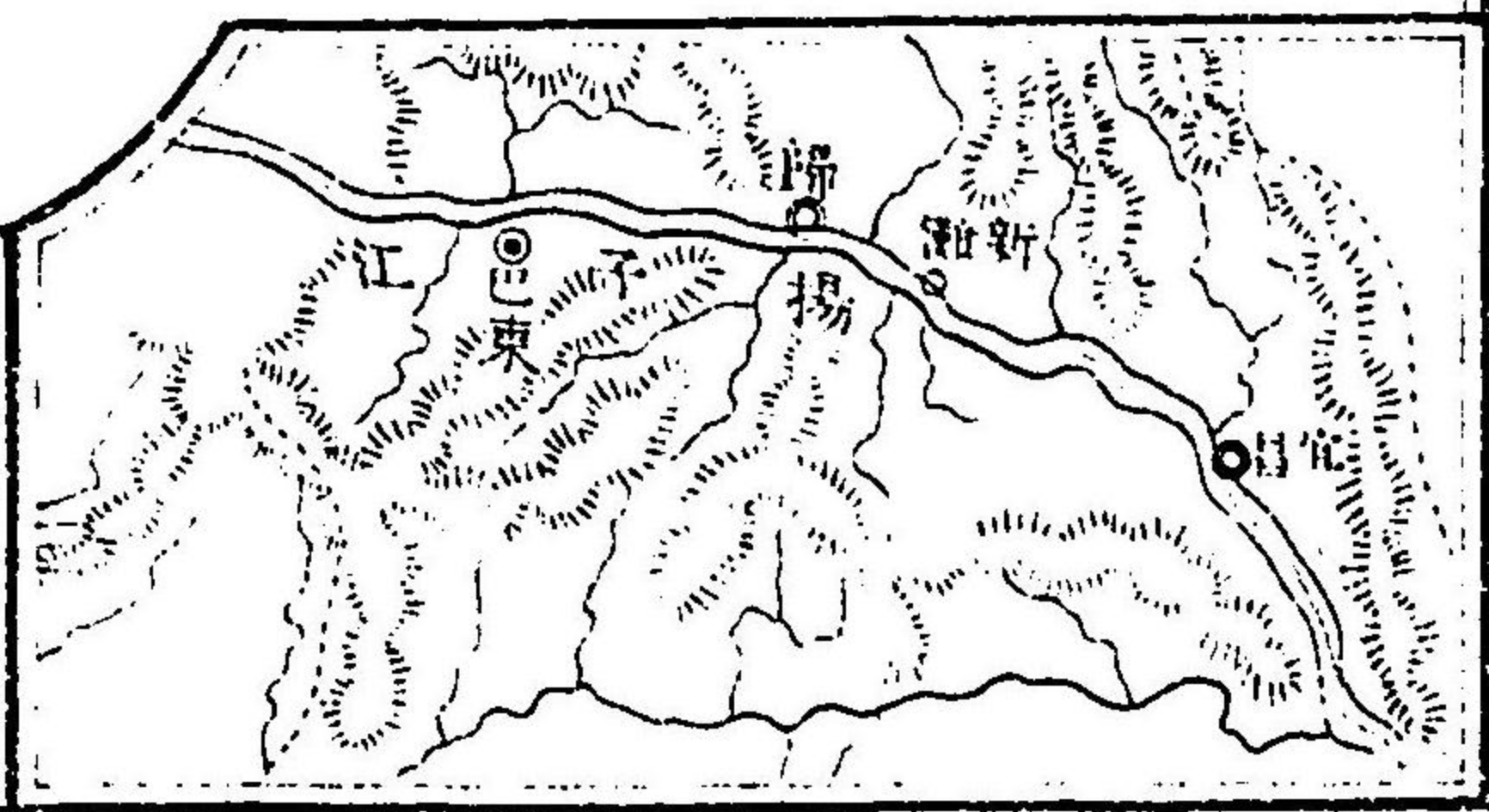
桑阿房宮瓦  
文曰四瓦廿九六月官瓦



# 四川省遊蹟圖



凡省府廳縣  
 州府廳縣  
 定縣  
 州縣各縣  
 城





出 蜀

成都府より嘉定府に至る

明治三十九年六月十四日 成都を去り、歸東の途に上る。同行吉田義静氏及び令息防氏、此行、一路江に由る。此日午後四時、成都城南門を出で、錦江の南岸に沿ひ、東して成都東門外の大碼頭に至る。送客本邦人の半は、一行と舟を同うして、偕に望江樓に下る。他の一半、及び支那人の一團は、別に先づ望江樓に至りて待つ。

望江樓に達す、主客皆俱に園中の濯錦樓に登る。送客諸氏更に一行の爲めに、最後の祖宴を張る。日暮方めて樓を下る。互に別後の平安を祝し、並びに再會を約し、午後七時半手を分ちて舟に登る。此日遠く進むこと能はず、夜中和場（中興場）に宿す。行程二十清里。

十五日 午前五時、中和場を發す。中興場、蘇碼頭、傅家壩を経、十時古佛洞に達す。朝來の霏雨、此に至りて纔に收まる。古佛洞の高崖、烟霧の間に在り、午後一時彭山縣外を過る。千葉縣人瀧口定次郎氏夫妻、現に縣内高等小學堂教習として在留せり。江より縣城までは、日本里數にて一里を過ぐるを以て、心ならずも訪問せず。江上會々漁舟の過ぐるに逢ふ、呼び留めて大魚の一尺許のもの數尾を買ふ。價毎尾百五十文を出



出蜀

成都府より嘉定府に至る

成都を去る

明治三十九年六月十四日 成都を去り、歸東の途に上る、同行吉田義静氏及ひ令息昉氏、此行、一路江に由る、此日午後四時、成都城南門を出で、錦江の南岸に沿ひ、東して成都東門外の大碼頭に至る、送客本邦人の半は、一行と舟を同うして、偕に望江樓に下る、他の一半、及び支那人の一圈は、別に先づ望江樓に至りて待つ、

望江樓に達す、主客皆俱に園中の濯錦樓に登る、送客諸氏更に一行の爲めに、最後の祖宴を張る、日暮方めて樓を下る、互に別後の平安を祝し、並びに再會を約し、午後七時半手を分ちて舟に登る、此日遠く進むこと能はず、夜中和場に宿す、行程二十海里、

十五日 午前五時、中和場を發す、中興場、蘇碼頭、傅家壩を経、十時古佛洞に達す、朝來の霏雨、此に至りて纔に收まる、古佛洞の高崖、烟霧の間に在り、午後一時彭山縣外を過る、千葉縣人瀧口定次郎氏夫妻、現に縣内高等小學堂教習として在留せり、江より縣城までは、日本里數にて一里を過ぐるを以て、心ならずも訪問せず、江上會ま漁舟の過ぐるに逢ふ、呼び留めて大魚の一尺許のもの數尾を買ふ、價毎尾百五十文を出



でず、其賤驚くべし、但だ其大江激流の間に産するものなるを以て、肉間細骨多くして食ひ易かられども、味頗る海鮮の佳なるものに似たり、午後六時眉州に達す、泊す、行程百五十七清里、

本年二月を以て新に招聘せられたる、茨城縣人後藤美之氏、眉州高等小學堂教習として、城内に在留せり、故郷への事傳てもやあらん、又た索居の樽をも慰めんと、小吉田氏と夜を肩して之を其學堂に訪ふ、暢談二時餘にして辭し歸る、

平羌峽

十六日 曉發、九時中岩寺下を經、鴨婆灘を下り、漢陽橋を過ぐ、之れより下、板橋溪に至る、凡そ三十清里の間を平羌峽と爲し、其江を呼むで、別に平羌江と名く、即ち李白の詩に謂ふ影入平羌江水流は、之を詠せるものなり、昨夏峩眉に遊びし時は、睡裏に通過したれど、此度は幸に其光景を覽取するを得たり、峽中の奇、三峽の豪には及ばず、雖も兩岸巉岩、高樹離披、江水山に循つて迂曲し、或は震蕩して、激して灘と爲り、或は洪へて潭を成すもの、亦た岷江の名峽たるに負かず、蓋し岷江、灌口より下流、數十枝に分派し、其流域概ね平原の中に在り、其江口に滙合してより、是に至りて始めて峻山を伴ふ、平後の險奇を覺ゆる所以なり、加ふるに李白一代の名詩に入る、平羌江の名、遂に天下に喧し、峽を出で、犛子灣、桓梁子を經、午後五時、嘉定城下に達す、泊す、

四川第一の製鹽地

成都嘉定間は再過の路なれども、嘉定萬縣間は、未見の旅なり、明日よりの江山を樂み、舟中の煥熱を忘れて、艇に就く、此日行程百六十清里、嘉定府の東、叙州府領の西端に四川隨一の製鹽處あり、自流井と曰ふ、嘉定より、陸行凡そ三泊四日程と爲す、

嘉定より東し、自流井に赴き、それより富順縣に至り、沱江を下らば二日にして、其揚子江との滙合點たる瀘州に達すべし、重慶より成都に上らん者は、内江縣より左行するを便とす、何れにしても、稍迂路の嫌はあれども、蜀に遊ばん程の人は、狂びて一遊を試みられんことを望む、余遂に往き觀るの機會を得ざりしは、今尙以て恨とす、所なり、因て爰に友人秩父氏の旅話に本つき、行程及び製鹽狀況を略述すること左の如し、

嘉定府より自流井に至る路

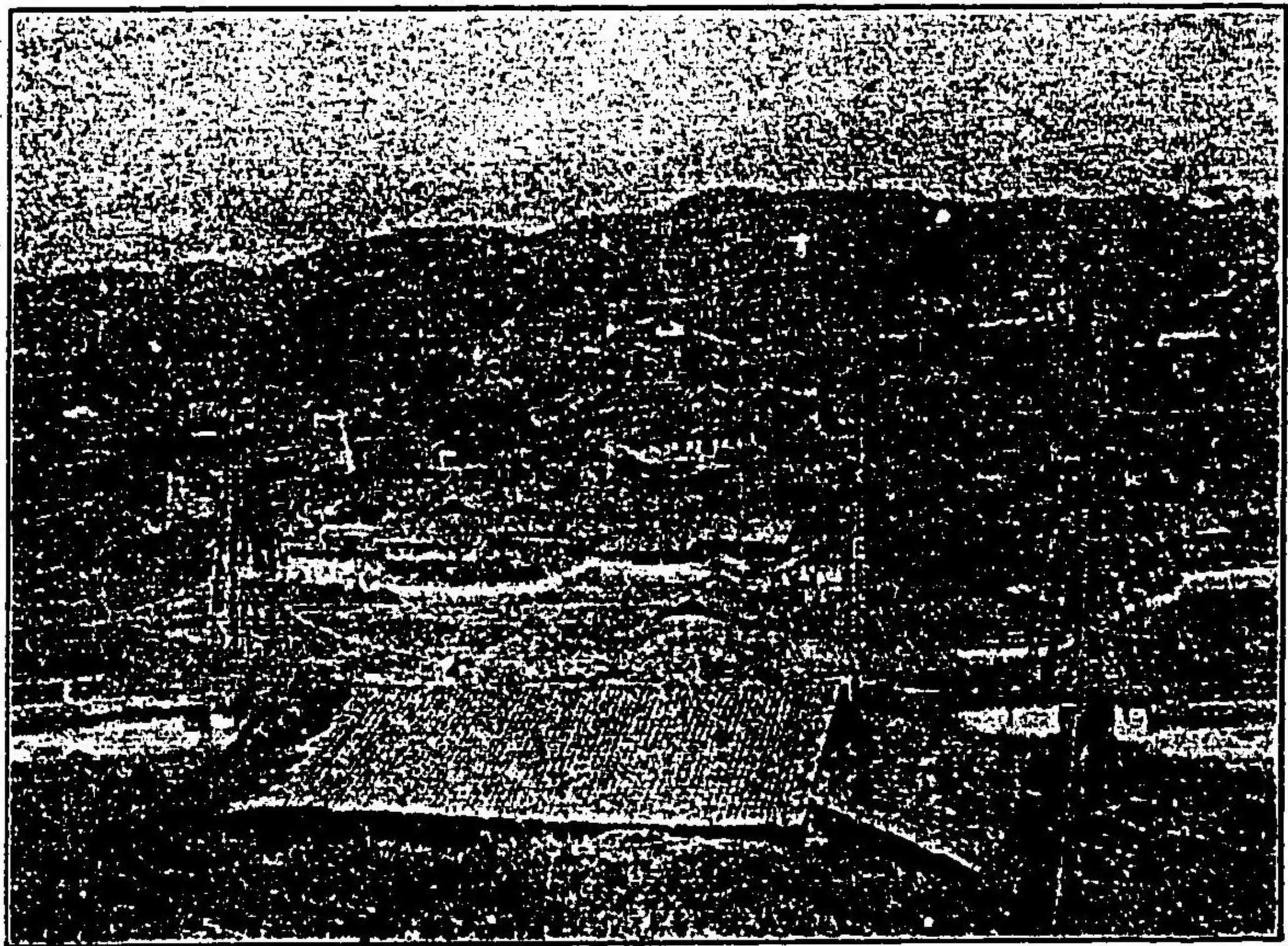
初日嘉定府を發し、馬踏井に宿す、次日長山橋に宿し、第三日高山舖に宿す、第四日張家場、程家場を經て、頼家店に至れば、已に大規模の鹽井、各處に散在するを見る、頼家店より二所の小驛を經ば、則ち自流井に達すべし、嘉定府を距る、共に三百六十清里とす、

自流井

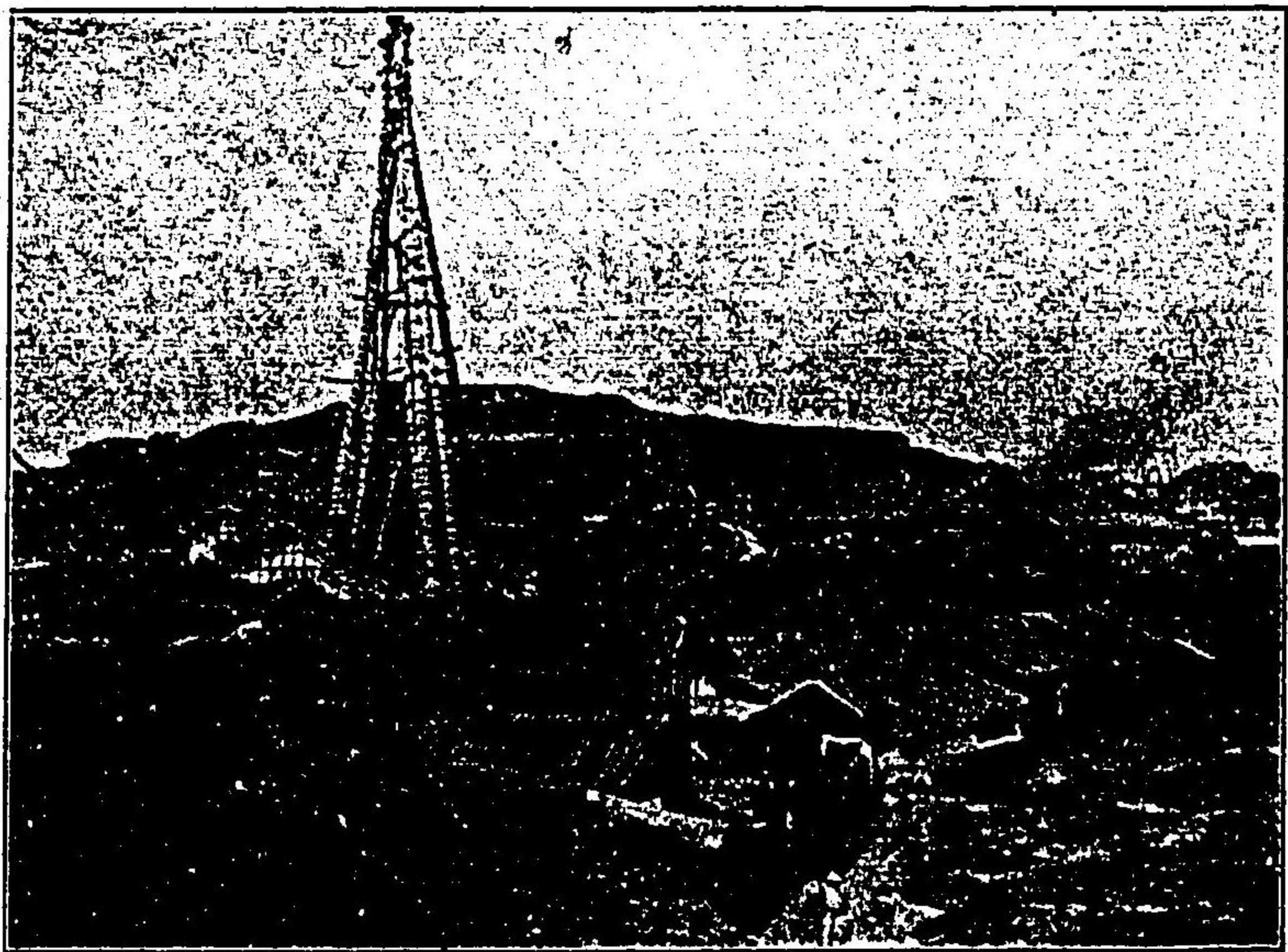
自流井、居民大半製鹽を業とす、鹽皆井より出づ、其井、口徑五六寸、深さ百五十丈より



二百丈を過ぐ、竹筒を垂れて之を汲む、其法、高く三角形の塔を作り、上より竹筒を釣り、竹索を筒の上端に結び、索條は之を轆轤に懸け、地上の盤側に巻き付け、牛をして之を卷寄せしむるの仕懸けなり、汲みたる水は筒を以て爐上の鍋中に注ぎて之を煮る。この地又天然瓦斯の噴出あり、直ちに之を以て煮鹽の燃料に供せり、其製造の状を言へば、單に之に過きすと雖も、規模にこそ大小あれ、幾百家の鹽戸、終日終年、筒を捲き下げ捲き上ぐる響は、人をして其盛に驚かしむるあり、其産額及税額の多寡に至りては、余未だ之を聞かざれど、四川が支那全國製鹽七大區の一に居り、其中にて自流井を推して巨擘となすを見れば、以て産出の夥大を想ふべし、七大區とは、第一、直隸省及び北部一帯に供給する長蘆、第二、山西、陝西、河南地方に供給する河東、第三、安徽、江西、江蘇、湖廣に供給する兩匯、第四、浙江、江蘇に供給する兩浙、第五、福建に供給する福建、第六、兩廣、雲南、江西に供給する廣東、第七、四川及西清一帯に供給する四川是なり、在重慶、農商務省練習生石井綱雄氏、明治三十八年中、一び自流井鹽業調査の爲め出張せられたることあり、數字上の情況は氏の報告を見れば、之を詳にするを得べけん、余は未だ自流井の大鹽井は之を知らざれども、農家の副業的鹽井に至りては、萬縣成都の間に於て、屢ば目撃したり、其井戸の口には、中央に竹筒の通ふだけの圓孔を



自流井製鹽場



同上



穿てる方一尺餘の板石を覆へり、井の側に水車様の大車輪を立て、竹索を捲けり、此索を以て竹筒に繋ぎ、車を廻轉して、筒を上下するものとす、これ等は往往民家の傍又は路邊、田間に在り、鹽井の所有者に就いて其説明を求めば、彼等は喜んで之に應ずるなり、

自流井より陸路、一宿二日程にして富順縣に至る、富順より舟にて沱江を下る一日にして瀘州に達す、これより楊子江を下りて、重慶に至る、自流井富順縣間三四驛あれども言ふに足るものなし、

嘉定府より重慶府に至る

十七日 午前九時發す、途次吉田氏に勸め、舟を對岸に移し、復た凌雲山に遊ぶ、昨夏他くまで登臨を擅にせしが、今年再び觀るところ、其烟霞江山の爽、猶ほ初遊の時の如し、凌雲寺を訪ひ、遂に東坡樓に上り、涼を引き眼を放つもの多時、樓を下り、凌雲寺の開祖某和尚の木乃伊を藏せりといふ寺に赴く、この寺のあることは昨年峩眉より歸りて後ち聞く所なり、寺は東坡樓の後方に沿ひ、畔路づたひに凡そ四五町も左行したる處に在りて、恰かも凌雲山下の上陸地點より、正面に上り詰めたる處に位せり、寺とはいへど、一個の草庵に過ぎず、住僧の之を守るとしも非ずして全然廢寺

再び凌雲  
に遊ぶ

木乃伊



の姿なり、庵堂の中央に、瓢形の土籠一個あり、木乃伊は此内に坐らせてあり、籠の上部の正面に徑五六寸の圓孔を穿てり、此孔より金箔を塗れる木乃伊の全面部のみを見るを得、余試に手を以て其面を撫せしに、其質紛ふ方なき金屬にて、即ち金屬製の外包を以て其法身を包みたるものと知らる、其面部の稍や前方に傾きたると、金屬製佛像として見ては製作拙劣に過ぎたることより察すれば、此内正しく人體を藏せるに相違なきが如しと雖も、唯た是れ外面よりの臆断に止るを以て、余は其果して木乃伊なるを必すること能はず、

庵中に憩ひ、庵後の清泉に咽を濡し去りて碼頭に下り、舟を發して流れを下り、佛頭灘に入る、即ち彼の有名なる凌雲山腹大佛像の前なり、灘險にして舟を崖足に近く可らざるを以て、約半町餘を隔て、像を望む、其大、數字を以て表すを得ざれども、見上ぐるばかりの高壁の頂上より、水際までに亘れる、古人が稱して天下佛像の大を極むと言ひしも、溢辭に非じと覺えたり、凌雲山を過ぎ、烏有山下を繞れば、江紆曲して峽中に入る、これより湖北省宜昌府の上流まで、亂山急水、相連互して斷えざるなり、

峽中に入る

嘉慶の大佛

烏有山を經、沙板灘、老木孔、竹根灘を下り、入峽最初の險灘たる道士鐘に入る、道士

盆魚寺灘

鐘より三清里、鐵蛇關を過ぎ、又七清里にして磨子場に至る、泊す可し、場の下游、亭あり、子雲亭といふ、楊雄の故址なりとぞ、磨子場より三十清里、成都重慶縣最險の巨灘、盆魚寺灘に入る、此灘冬秋枯水に於て、其險殊に大、此時舟客往來灘の上流なる燈杆欄より上陸し、下流の月坡亭まで徒歩する者あり、若し又水極めて漲るに當りては、同じく危険なるを以て、客岸上趙基浩と名くるころより上陸し、二十餘町を迂回して下流に出づ、岸崖、蜀水第一の四六字を刻せり、以て其險を察す可し、此日水候方に可なり、然れども狂濤怒號、舟實に一葉に當らず、正に灘の中央に在る時、遙の後方より、一隻の小舟逆巻く大浪になぶられ乍ら、余が舟目懸けて漕き來れり、之を見れば幅三尺長九尺許の柴舟にて、酒肴、鹽茶、駄菓子等を滿載せる物賣舟なり、慣れたる業とはいふものゝ、其すさまじき冒險、一驚の外なし、慈悲にて少許の點心を買ひ遣れば、物をも言はで漕き去りたり、今更改めて言ふを要せざるが、固有の國民性は、何處までも發現せり、

犍爲縣

物賣舟

盆魚寺を下る、十清里にして犍爲縣に至る、縣城江の右岸に在り、地平にして河寬し、城壁、河濱の間に立つ、堞樓完好、其山河と相配合せる趣、嘉定重慶間の絶景となす、此地去年峨眉に遊びし當時は、土匪蜂起の爲め、成都より若干營の官兵を派遣し、物情

嘉定府より重慶府に至る



月坡

頗る擾擾たりしが、今や全く平穩に歸し、江山依稀、城民其堵に安せり、縣を去る八十里、清里、月坡に至る、月坡は左岸に在る小落なり、其地江中に斗出ず、黎瀆、瀘江の中、數株の楊柳、暮烟を掛けて、島島たり、下る二十清里、夜に入りて泥溪に達す、泊す、行程二百清里。

叙州府

十八日 曉發、江山昨の如し、午時叙州府に達す、城、右岸の高崖に倚りて起る、水を去る石礎數十級、上陸して市街を見、例によりて書林をあせりしが、何の獲る所なし、雜貨店に、日本製紙、石盤、中將湯杯を販げるあるを見る、叙州府附近の山中には、多く豹を産する由にて、到たる處の皮舖、率ね金斑皮を懸けたり、叙州府は又た成都中原より雲南省に通する要衝に當り、雲南産物は最も多く、此地に集合し、其價格亦た大に廉なり、普洱茶と稱する茶の如き、其中に在りて大宗と稱せらる、土産としては、諸種の藥材、草席、砂糖、漬胡桃、ひて製する桃片と名くる菓子、尤も有名に屬す、此地は古に在りて、戎州と稱す、宋時黃山谷久しく講居するところ、城中其遺蹟甚だ多し、探るに遑あらず。

四川雲南の要衝

英艦

城下に英艦一隻碇泊せり、重慶より遡航し來れるものと知らる、叙州の府たる岷江、屈指の巨津、其繁華實に嘉定府と如く、一帯の大河、右方より來りて岷水に匯するも

金沙江

のあり、金沙江即ち是れなり、古より曰ふ、岷江の水清く、金沙江の水赤し、二水會するところ、兩色辨すべしと、遠望の爲め、見分くるに由無し。

楊子江の本流

岷江の名稱は金沙江と會するに及むで失はれ、これより始めて楊子江の稱あり、而して古來岷江を以て楊子江の本流とせしが、近世地理學者の説は、多く金沙江となすに一致せり、楊子江本流の名は、新研究の結果、或は金沙江に歸すべしと雖も、然れども、其水利を較せば、金沙江は多く、夷界蠻地の間を流れ、岷江は殆ど全く蜀の中原を貫くを以て、灌溉と曰ひ、舟運と曰ひ、其民生に益するところ、復た金沙江の及ぶところに非ず。

英艦と呼

南溪縣

午後二時城下を去る、下ること約一時間、一砲艦の遡航し來るを認む、舟夫舟の搖蕩せられんことを憚り、岸邊に漕き付け、艦の過ぎるを待つ、艦の漸く近くに及び、旗章を認めて、乃ちその英國砲艦たるを知れり、余等皆舳に立ち、手高く日章旗を振り、之を迎ふれば、彼れまた艦員等舳に立ち出で、手を揚げて我に應ず、やがて艦の余が舟と並行の位置に來るや、彼れ一齊に帽を舉げ、巾を振りて呼號す、我亦た之に應じ、双方影の見ゆる限り、相顧みて別る、多少の感慨、未だ此境に臨まざる者の爲めに言ひ難し、叙城を去る百二十清里、南溪縣に至る、城江左に在り、盜多し、縣は水經に見えた

嘉定府より重慶府に至る



江安縣

漢の樊道縣にして、其沿革甚だ舊けれども、今日に在りては、蕭條たる寒城に過ぎざるなり、下る四十三清里、江安縣に至る、縣城、江右に在り、其地多く竹器を出すを以て名あり、其彫刻膠漆並に粗悪なれども、竹質堅好、意匠奇雅、客過ぎる者、大底購ひ歸らざるなし、又桂元、冬筍、竹蓐、石炭、鹽、米等を出す、俱に此縣の尤産なり、對岸佛祖寺と名くる寺あり、岸壁、雲水鐘聲、及び江城如畫の字を刻す、下る四十五清里、大渡口に至りて泊す、行程三百四十八清里、

納溪縣

十九日、大渡口より下る三十清里、納溪縣外を過ぎる、縣城、江右に在り、小縣言ふに足らず、江水中、瑪瑙石を出す、俗之を文石と呼ぶ、又下る三十清里、瀘州に至る、蜀諺所謂、天成重慶、鐵打瀘州是なり、又孔明が出師表に五月渡瀘といへるもの、亦た此地を指す、州城、江左に在り、沱江、北より來り、城を繞りて大江に匯合す、市街繁華、商務の盛叙州に譲らず、現に川南道の駐紮するところに係れり、地産の主なるもの、桂元、南竹、冬筍等となす、城内の師範學堂に本邦男教習某氏一名、女學堂に同女教習某氏一名、在留せると聞き、訪問の爲め上陸して、其學堂の所在を尋ねしが、屢ば道を教ふる者に誤られ、遂に尋ね當らず、瀘州より下る百七十三清里にして、合江縣に至る、縣城、江右に在り、赤水河、雲南より來り、縣東を流れて大江に注ぐ、赤水河、貴州仁懷を經過す

本邦人在留す

合江縣

青果

るを以て、又た仁懷河の名あり、此地の産物としては、冬筍、佛手柑、青果、桂元、茶等と爲す、此中青果といふは、本邦の榧に似たる植物の實にて、形、楕圓を成し、大さ、拇指の如し、食時、脂肪質を喫せし後、口、其一顆を銜みて、微嚙せば、酸味と澁味とに由り、能く口内の粘滑を除き、兼て清爽を感ずるの功ありて、支那料理には、關ぐ可べからざるものなり、その價は、一個、一二文に過ぎざれども、西藏産に至りては、實に一個、一圓を出づるものありと聞く、支那人が食事に勤能なる、此一事を見て、其一斑を知るべし、合江には、又近年樟葉を熱して樟腦を製するの法行はれ、將來有望の事業として、目せられつゝあり、縣南、山あり、少岷山と名く、明媚愛すべし、下る二百十三清里、江津縣に至る、縣城、江右に在り、泊す、行程四百五十六清里、

江津縣

重慶府に達す

二十日、午前十時、重慶府に達す、江津縣を去る百八十清里、重慶の上流、凡そ四五十清里の邊より、山勢俄に驟峻を加ふ、重慶に至り、又稍や展開せり、舟、城下朝天門外に達す、直ちに上陸し、首として我領事館を訪ふ、始めて領事、德丸作藏氏、警部、石井某氏、書記、生池永某氏と會す、德丸氏一行の重慶出發の日まで、領事館内に留宿せんことを勧めらる、因て其厚意に従ふ、在留本邦人諸氏相踵いて來訪あり、夜、德丸氏一行の爲めに盛宴を開かる、

嘉定府より重慶府に至る

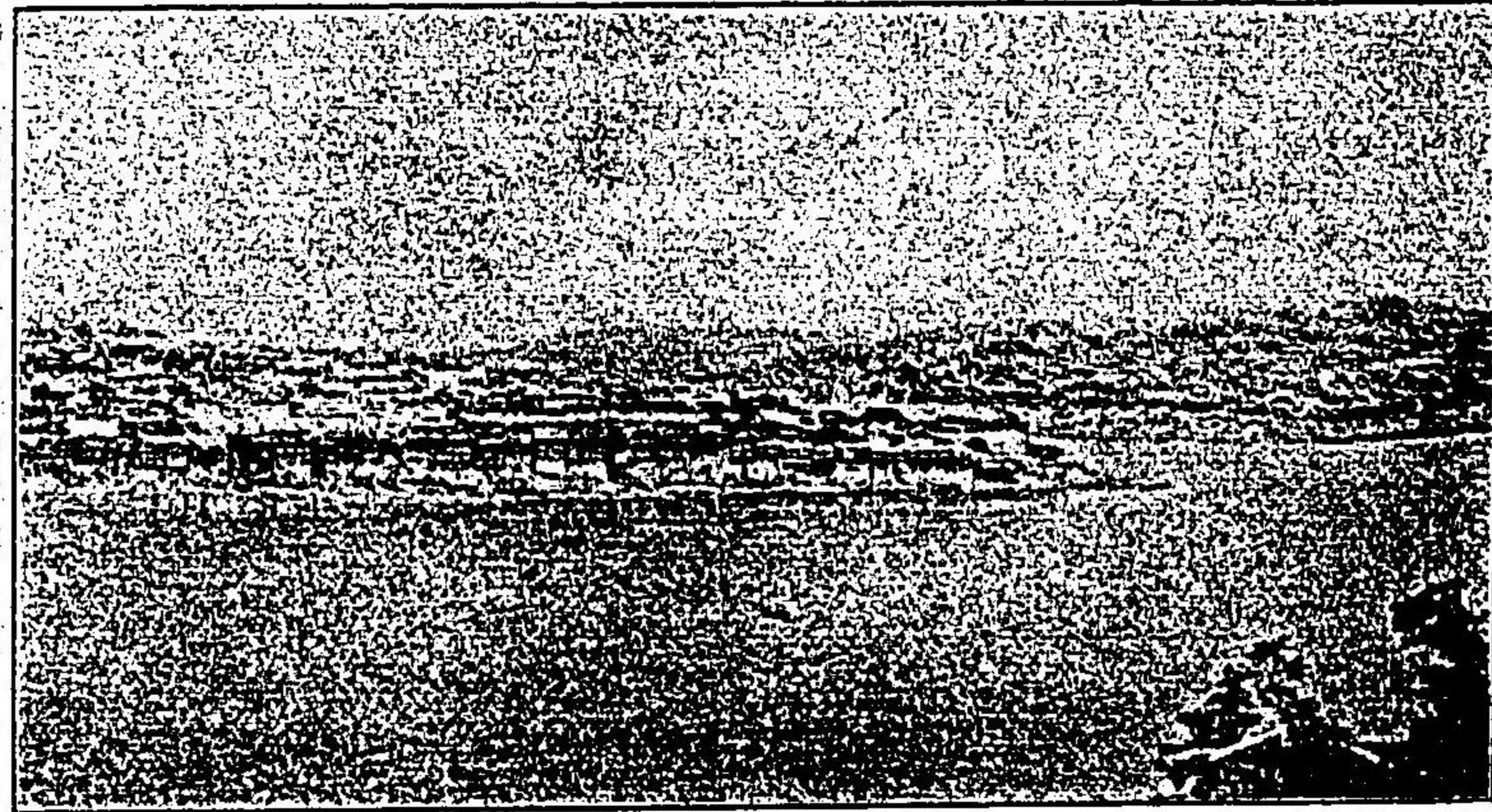


重慶記

重慶は我々特種の関係ある處なれば、各方面に亘り精査を遂ぐべき筈なれども、滞在日數二十日より二十七日に至る、僅に七八日に過ぎず、且つ酷暑の候にて、大抵領事館に盤伏したれば、本記の如き頗る粗笨の嫌あり、讀者幸に懶を尤むる勿れ、

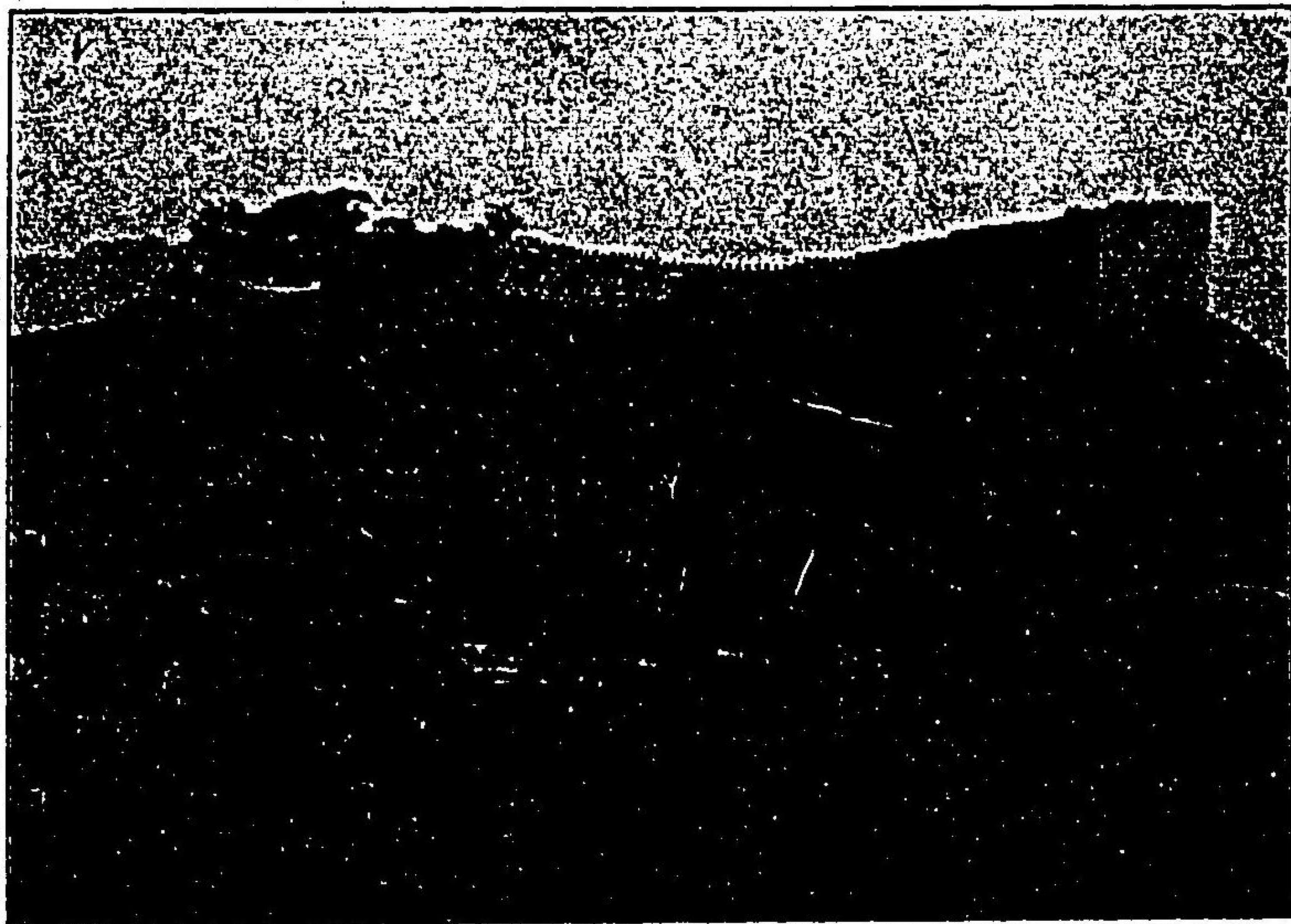
重慶府の位置

重慶の位置 重慶は古の渝州にして、重慶の名は宋後の稱なり、其地、楊子江と嘉陵江との會合點に在りて、四川一等の商業地に屬し、又楊子江岸屈指の大埠となす、地形半島形狀を成し、東南北の三面は共に江に臨み、僅に西方一面のみ、平陸に連れり、城市江面を去る一百尺乃至二百尺の岸上に在り、街區起伏、高低一ならず、其道路の如き、地盤の岩石を削りて、磴道となせるところ、往往之れ有り、重慶より上流に在りては、嘉定の如き、叙州瀘州の如き、下流に在りては、涪州の如き、皆二江の會合點に位置せる大都なれども、其市面の歎仄、未だ重慶の如く甚しきものあらず、斯る高地なるも、一旦江流暴漲せば、半市は水に没することあり、此時に當りては、江は剛ち重慶に取り、一大仇敵たり、然れども、究竟重慶の發生も、其發育も、皆江に負ふ所なれば、遂に江を避けて、其城を陸原に遷すを得ざるなり、



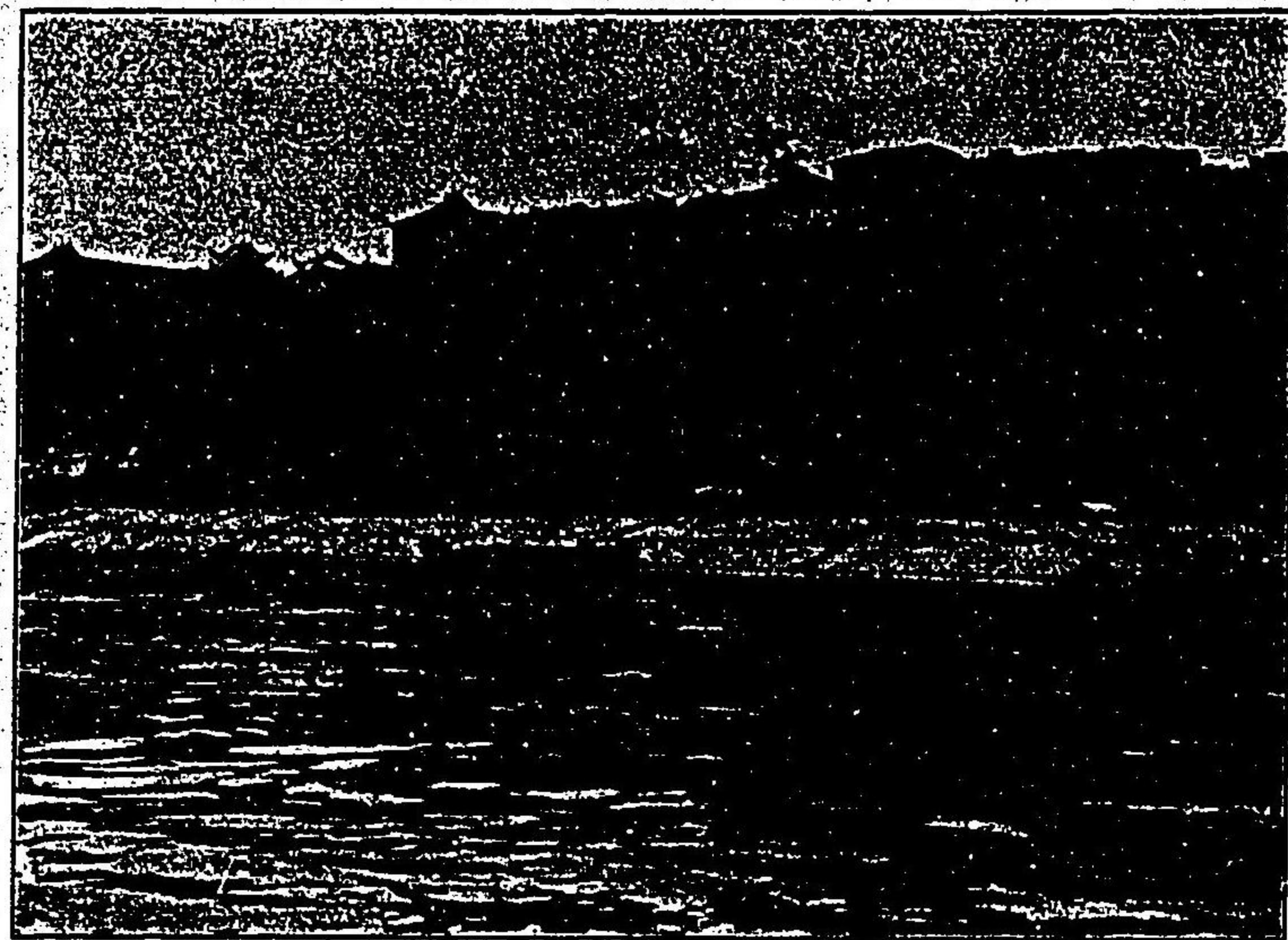
重慶府

向つて重慶府右江北嘉陵江其間を流れて大に江に注ぐ

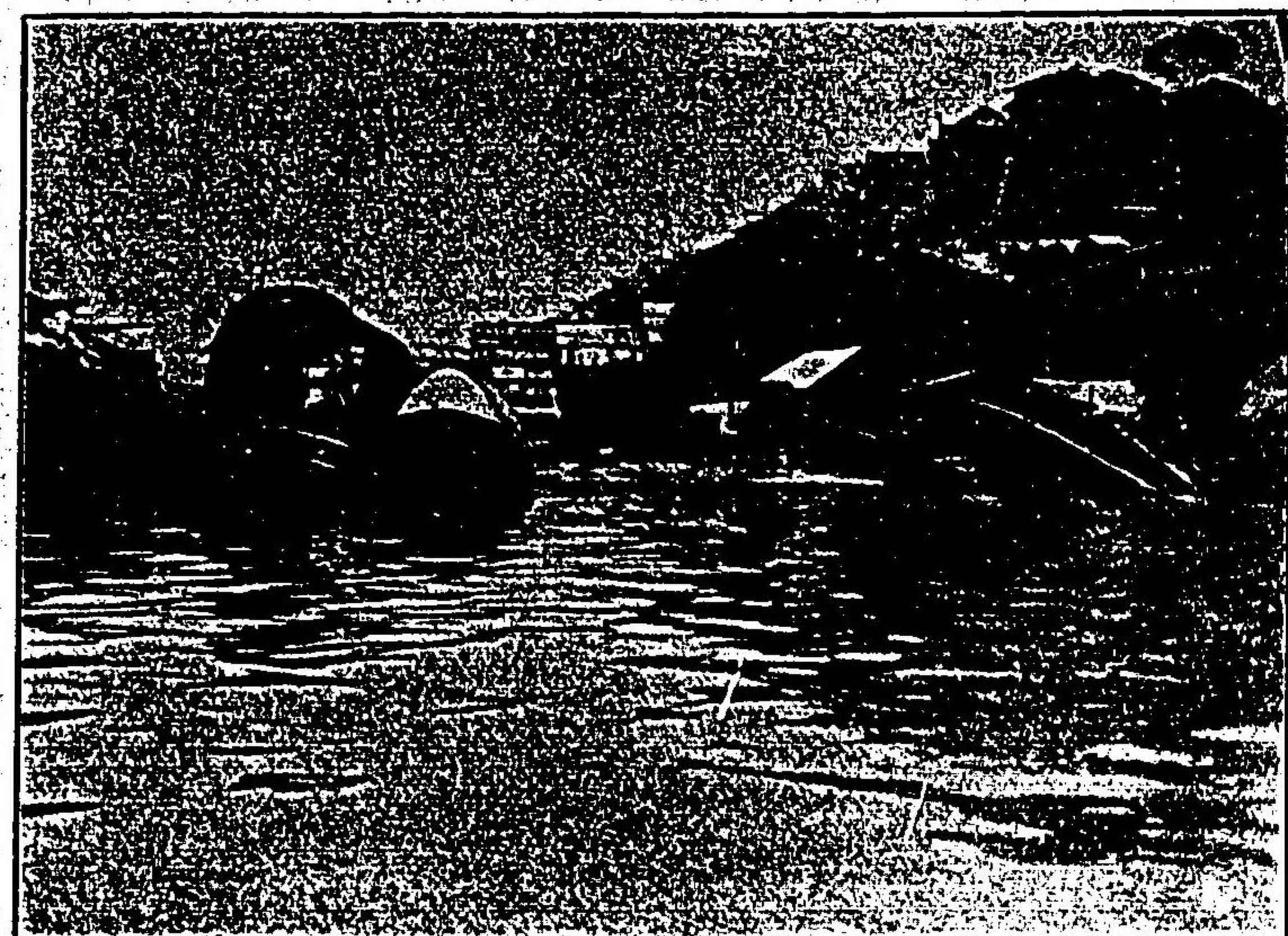


重慶城の骨面



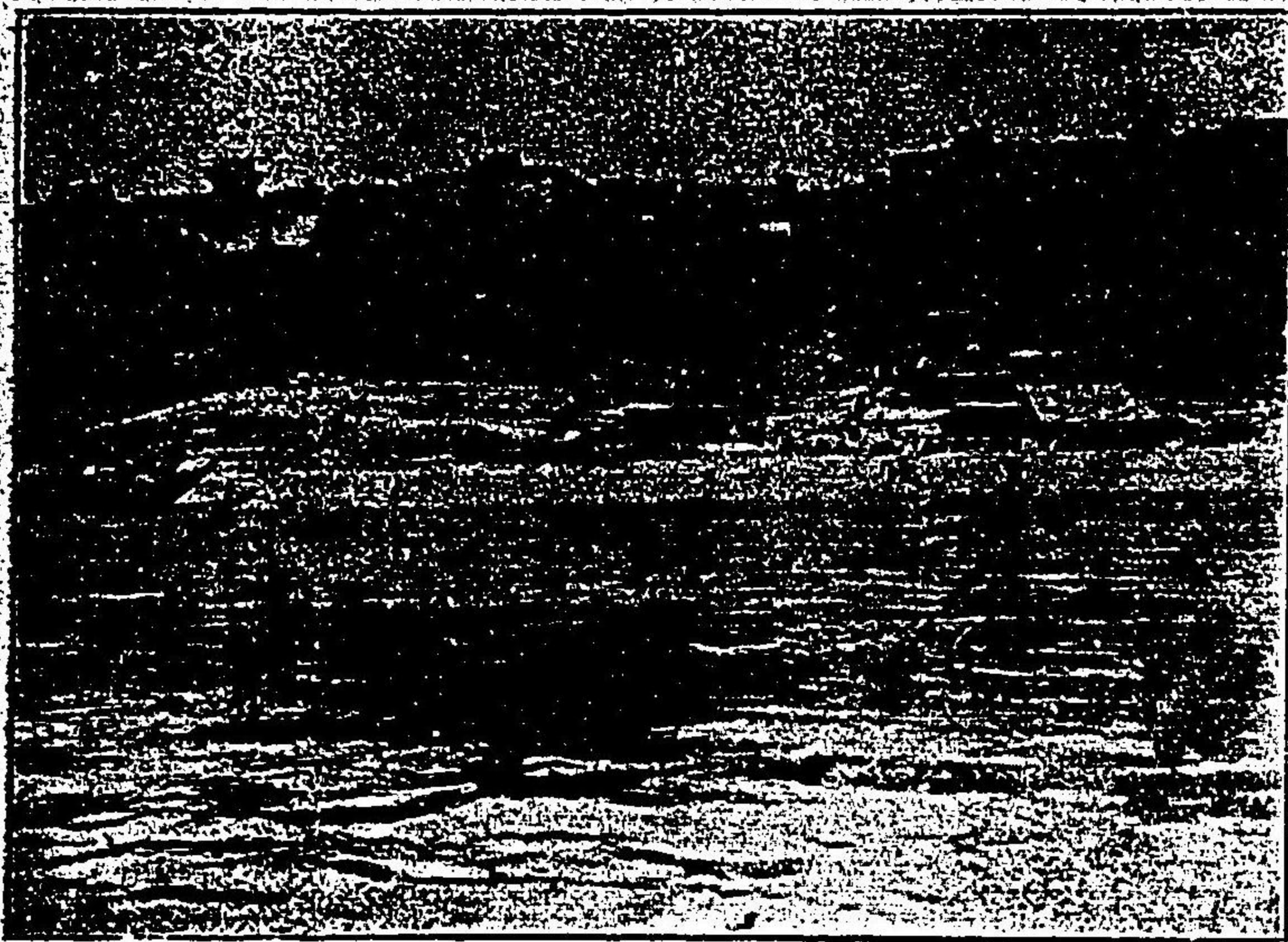


重慶外江水上禮和洋行を望む



重慶朝天門の橋頭





重慶

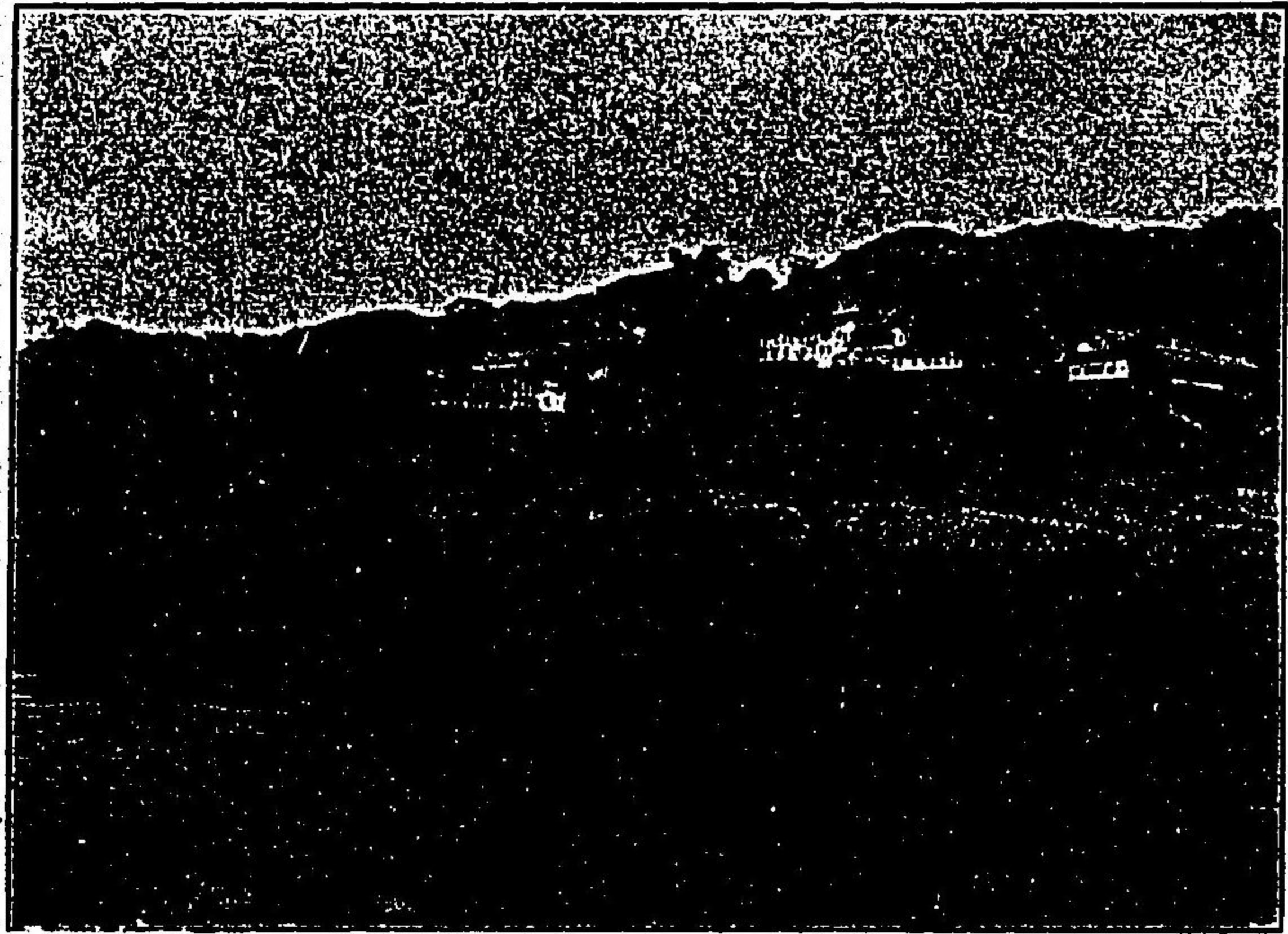
楊子江に面せる重慶市街

城市の幅員大約四英方里あり、人口最近の調査にて約三十餘萬と稱すれども、確實なる戸口調査を経たるにも非ざるは固より論無し、其實數に至りては、支那の常として、大抵號數の上に在れば、重慶の如きも、或は四十萬を超えたらんかと思はる。

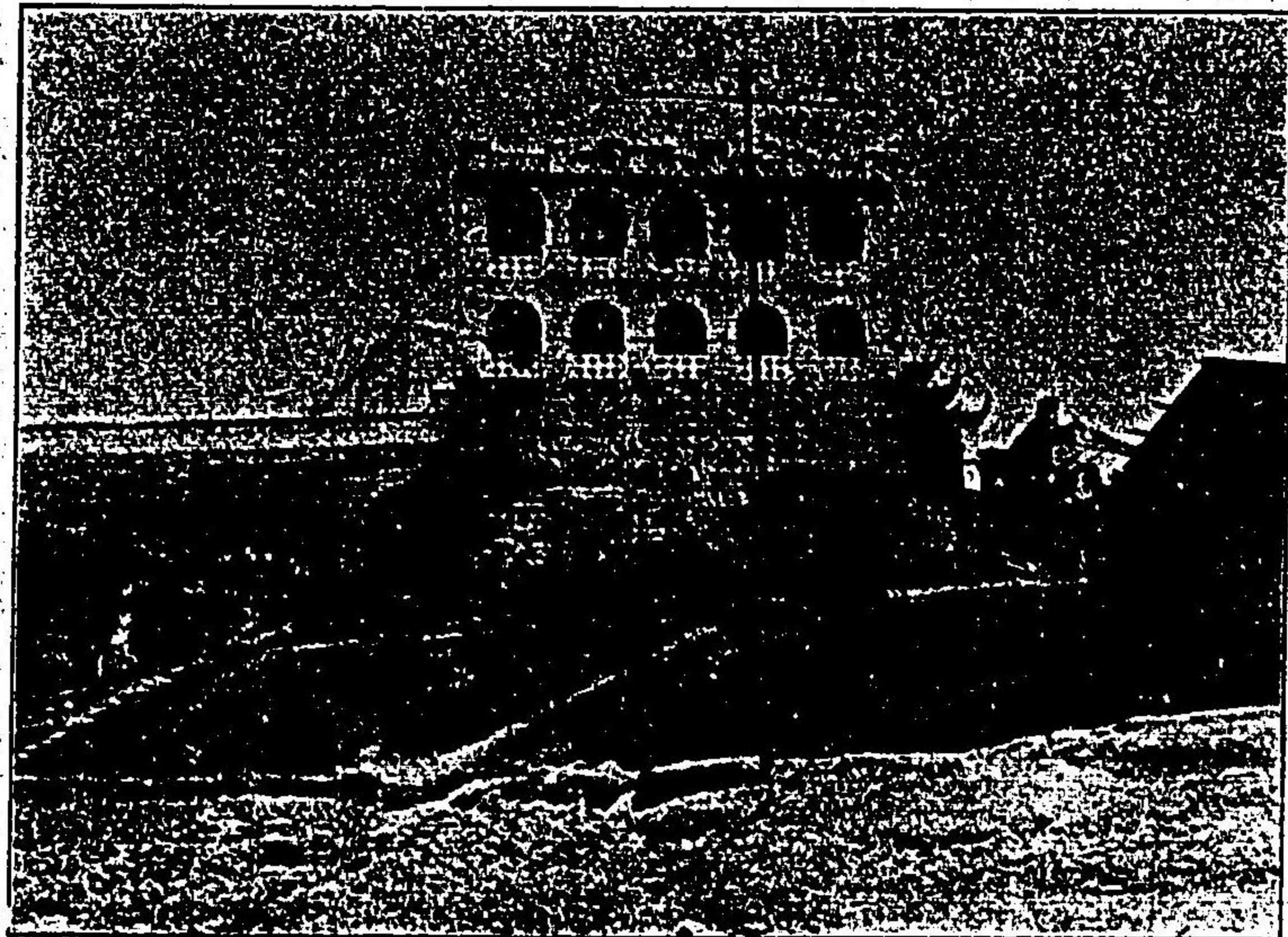
市街は一二の大街を除く外概ね狹隘なること、亦た支那町の例に洩れず、而して其大街といふものも、之を成都に比せば、其外觀甚だ遜色あるを免れず、但だ開港場たるだけ、外國商店及び比較的大規模の洋式建築を見るを得るは、成都の無き所なり。

市街の楊子江側の對岸は約半里を隔





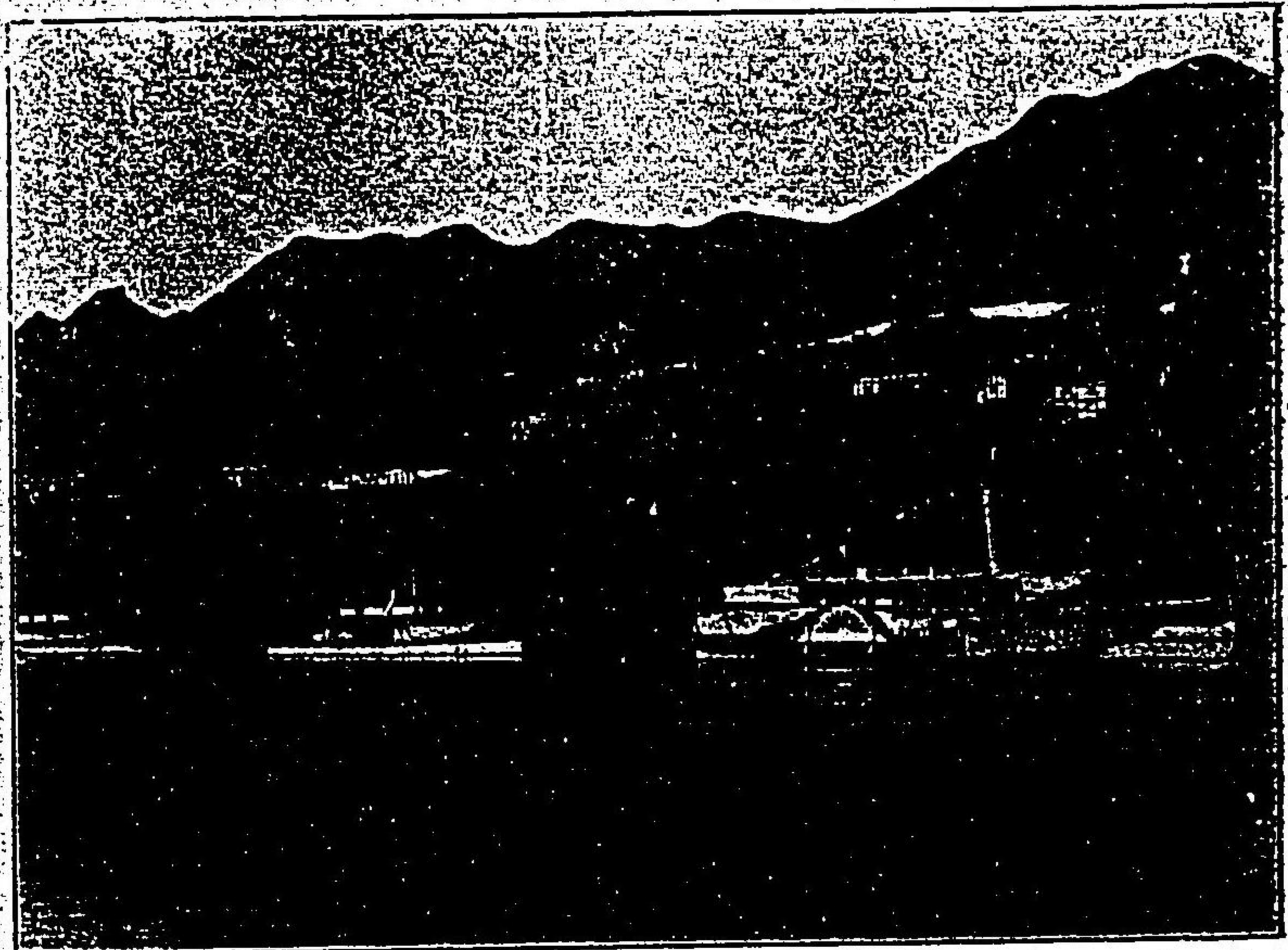
重慶對岸の洋館  
下岸の船屋は海關検査場



重慶對岸の佛國水兵俱樂部

宇水

第五十九

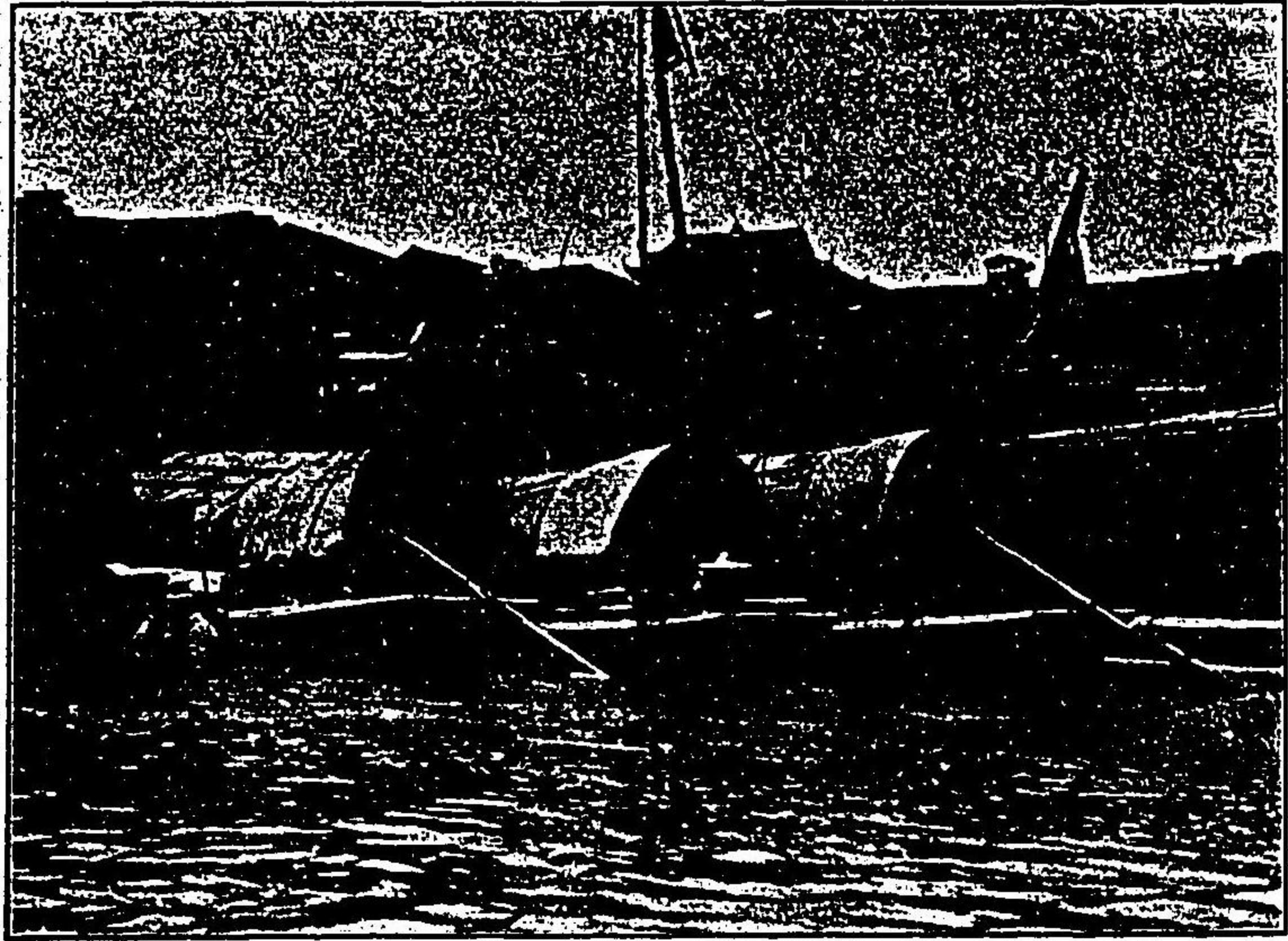


巴

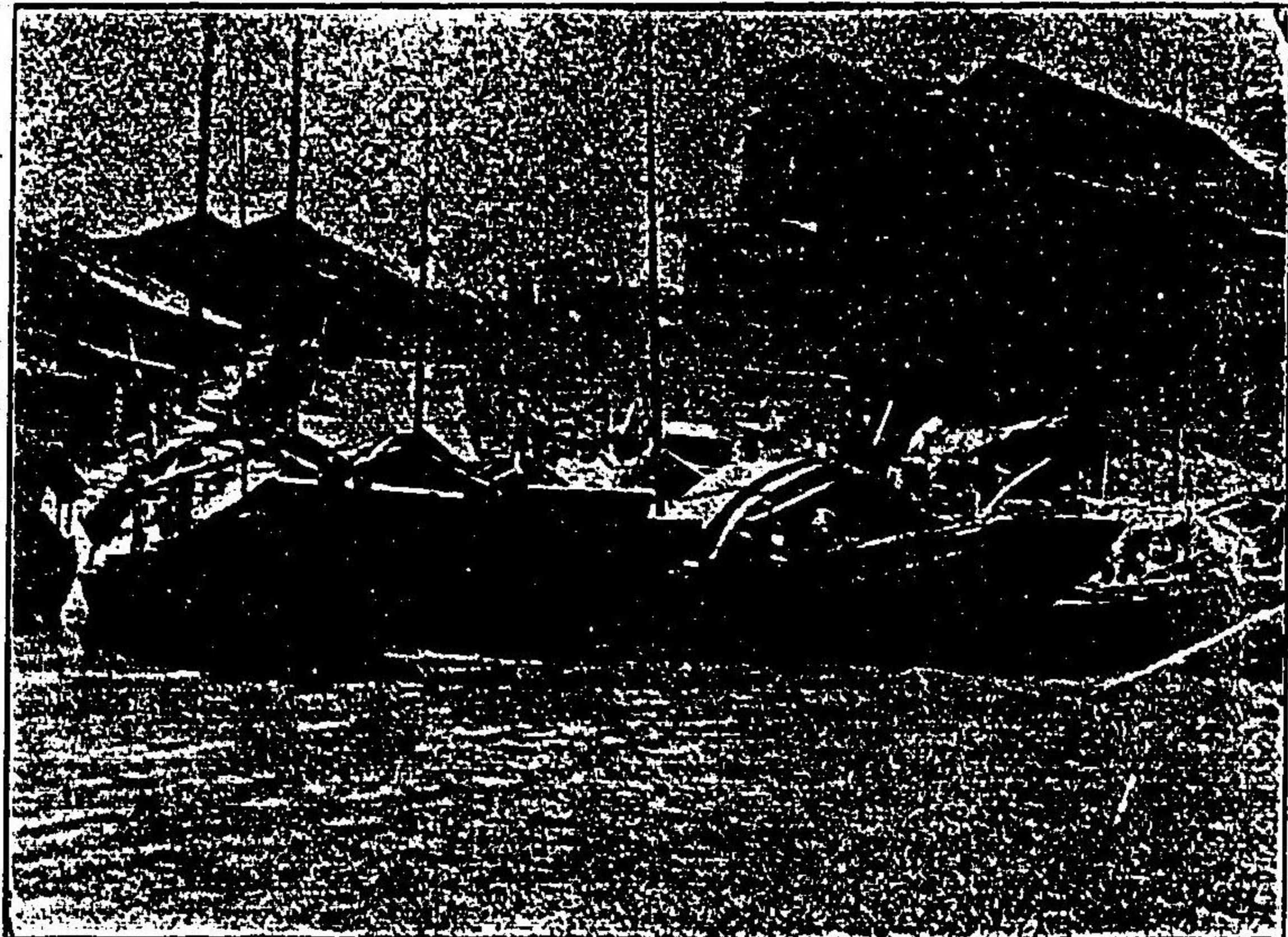
重慶碼頭各砲船

つ、其地一帯の山岳にして、地勢甚だ峙  
てり、西洋館の多くは、此山腹に建てら  
れたり、其内、佛國水兵俱樂部及び在留  
西洋人の別業の如き、皆形勝を占む、崖  
下水深く流れ緩にして、列國砲艦の碇  
泊場に屬す、重慶海關亦た此處に在り、  
關下常に一隻の屋船を擧ぎ、貨物検査  
場と爲す、  
對岸の碼頭より數丁を隔つる上游に  
當り、削るが如き絶壁あり、壁面宇水の  
二大字を刻す、其字、尙ほ對岸より望む  
を得、壁下の水、巴字形をなして廻流す  
と云ふに本つきて名く、古、重慶を巴州  
と曰ひ、今又城内に巴を以て名くる一  
縣ある者、或は之に因らん、余、小舟を泛





門天朝るせ面に江子揚

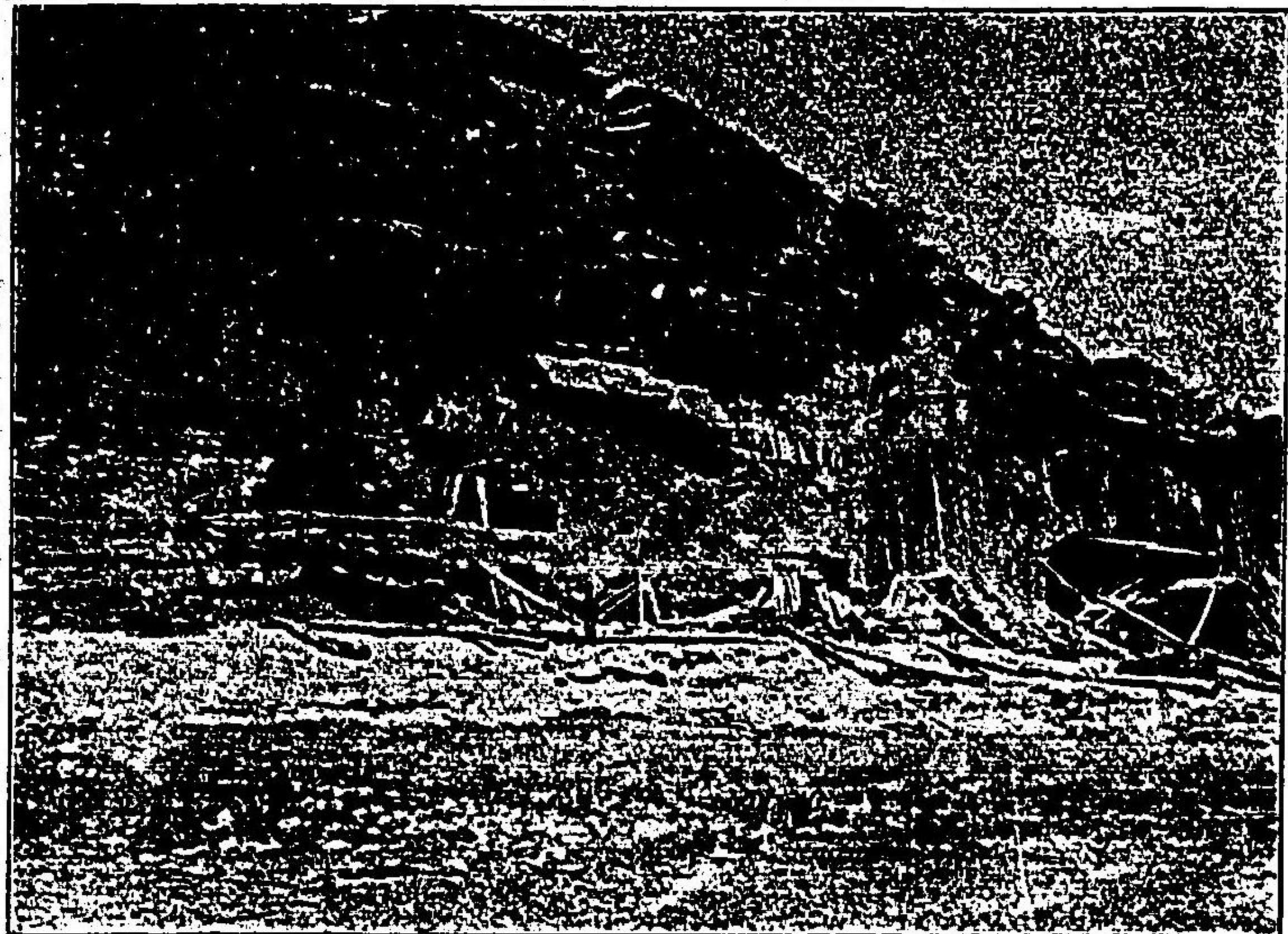


頭橋門天朝るせ面に江陵嘉



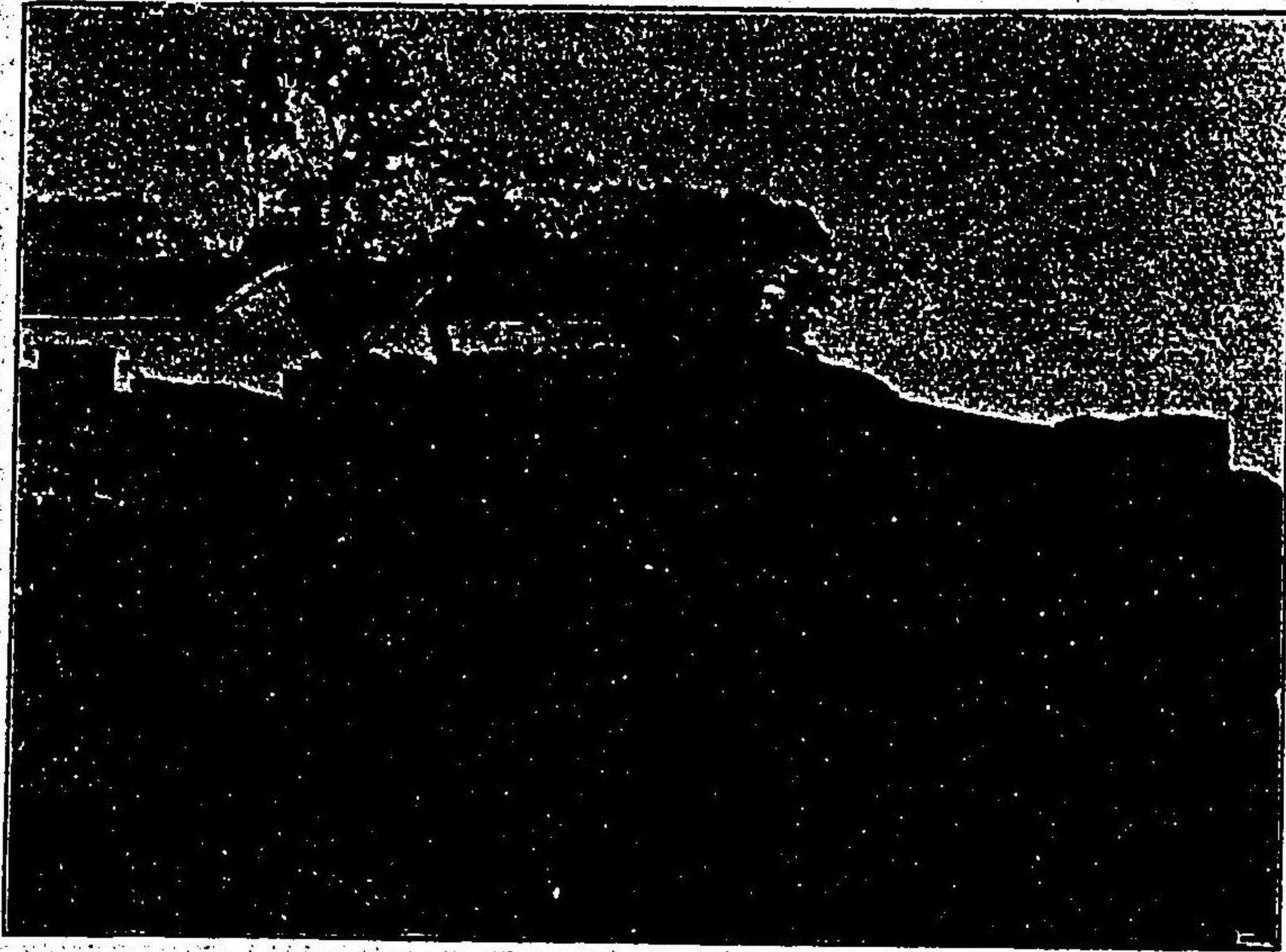


門江臨の外門道通慶重

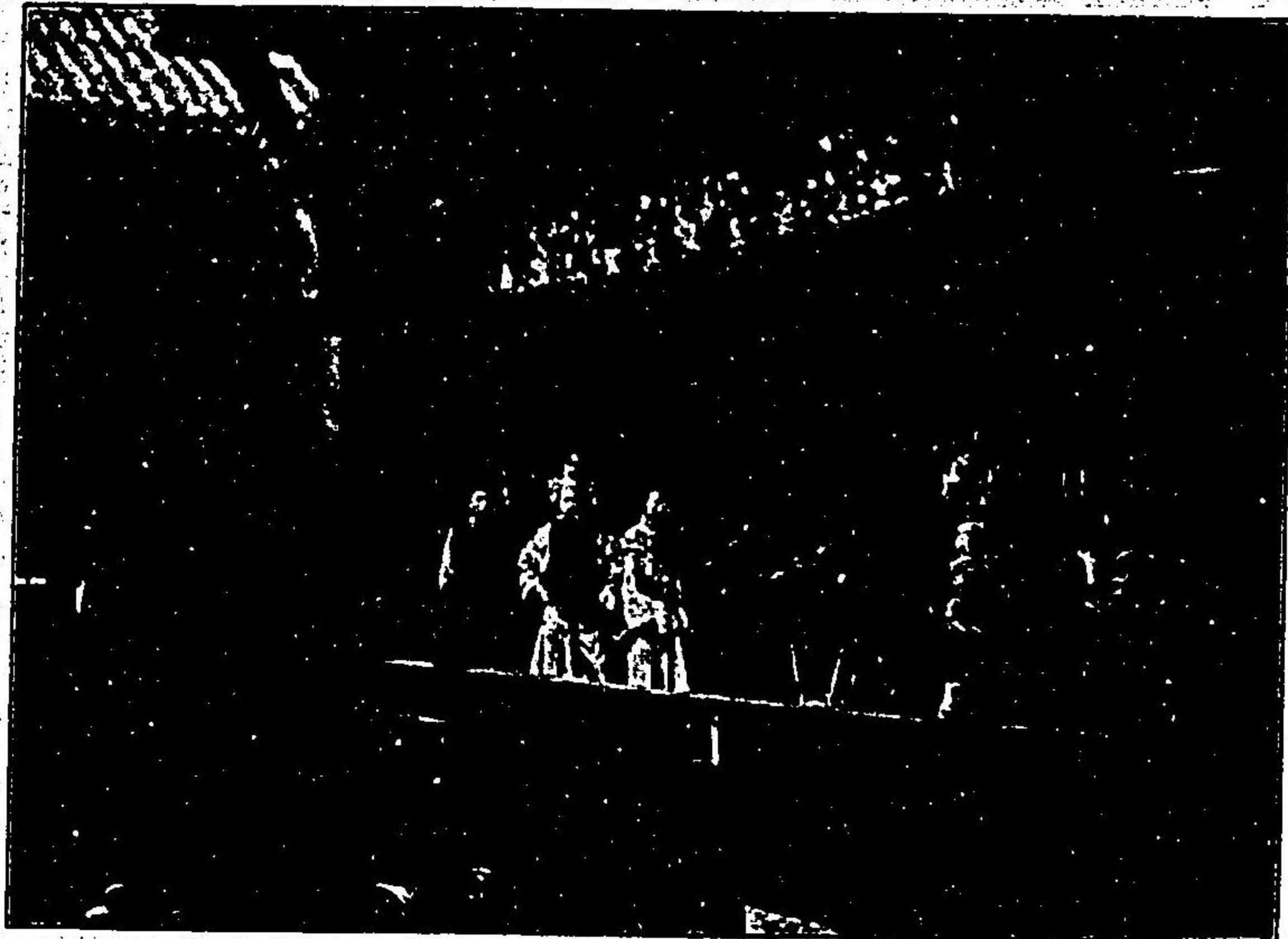


外門平太慶重





重慶城外都街上見りたる五福宮



重慶の演劇



重慶の氣候

風

在留外人

夔、夔兩岸の間を往來せしが、險灘、危礁の憂は之れ無しと雖も、江廣く流れ急なるや、心を放ちて去留に任ずる底の快を取る可らず、彼の成都城外に在りて、或は錦水に棹し、或は岷江に濠ひ、楊柳樹下に飲み、鷓鴣を弄ぶが如き、萬擬すべからざるなり、獨り水上の遊樂に不便なるのみならず、陸上に於ても、亦た成都の望江樓、浣花草堂等に似たるものあらず、究竟重慶實利一偏の地なり。

重慶の氣候　冬季の最低度、華氏三十五度、夏季の最高度、同百度内外に在るは、成都と大差なければども、空氣濕重の爲めに、寒熱共に甚しきを感じ、而して春冬兩季は大抵陰天に屬し、日を見ること極めて稀なり、重慶も亦た成都の如く、秋末より春初に亘る間は、早曉より午前七八時頃まで、濃霧に封せられ、時としては、咫尺も辨せざることあり、但し消霧の後には、必ず快晴となるを例とするを以て、此時間に於ける朝霧は、其日の晴兆となすべし。

在留外人　重慶の外人は、殆ど日、英、佛、米、獨の四國人に限らる、之を上海の二十八個國人の雜集せるに比すれば、重慶と上海とは比較にはならざれども、四川唯一の開港場といふも、尙徹微たるものと謂ふべし、試に明治三十九年末の帝國領事館の報告に據れば、

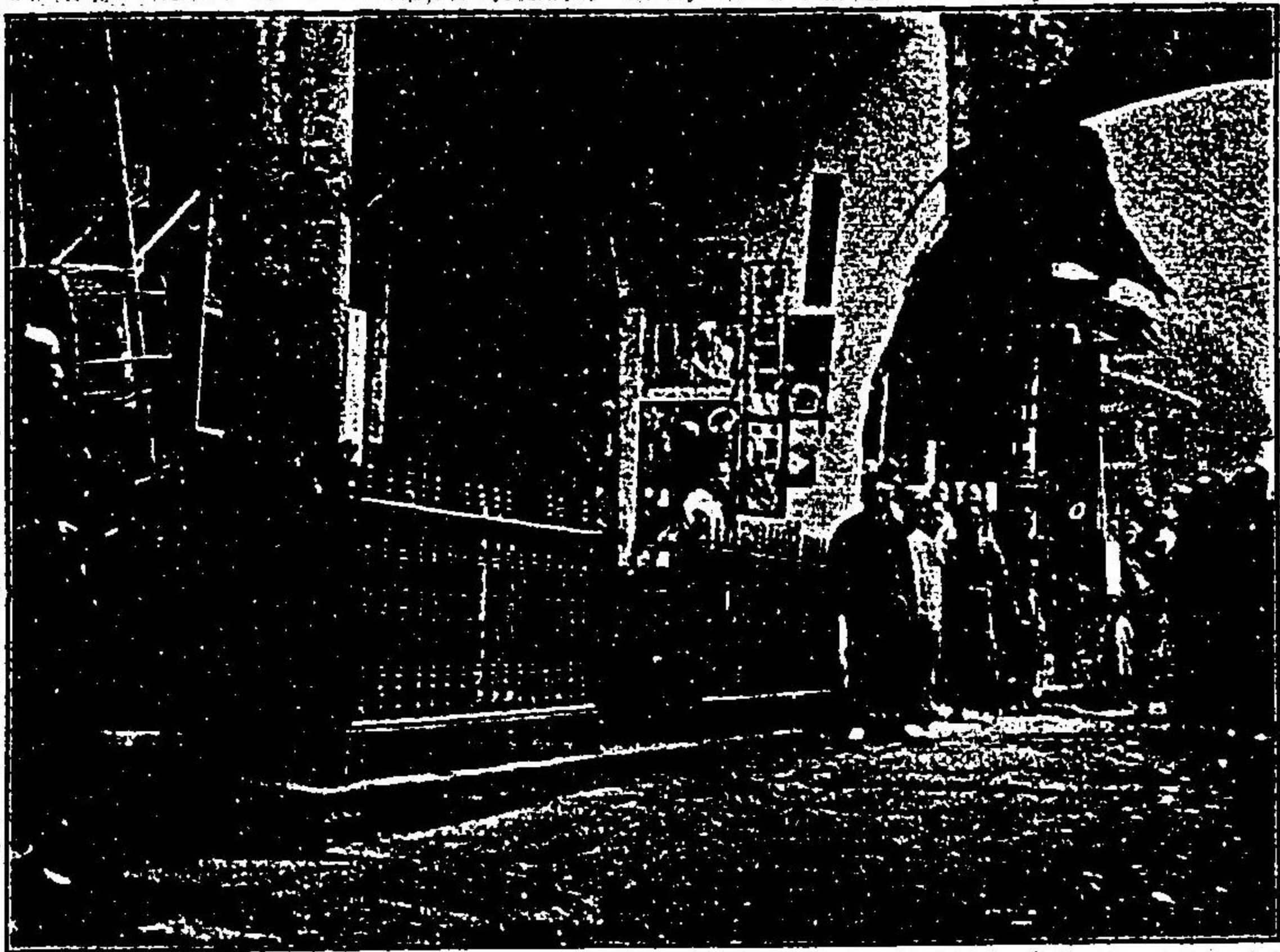


國別	男	女	小兒	合計
白人	三三	三	一	二四
英人	二五	一五	八	四八
佛人	一五	七	一	二二
米人	一四	八	五	二七
獨人	七	一	一	七
其他	二	一	一	二
合計	八四	三三	一三	一三〇

(軍艦乗組員は右表の外に在り)

を算せり、現今にては勿論増加し居らんも、恐くは未だ二百を出でざらん、表中最多員を占むるは英人なり、之を同年度に於ける四川全省に視るに、其最多員を占むるものは猶ほ英人なり、日本人は領事館員の三名及び學校教員一名を除く外は、悉く在留商人若しくは商業視察として滞在する者に屬す、商店は、大阪公司支店(今の日清汽船會社支店)瑞和洋行、日森洋行、太和洋行、有鄰公司及び某燐寸公司(公司名を逸すとす)となす。

本邦人の状況



重慶記

大阪公司支店は明治三十八年末の創設にして、重慶宜昌間の貨物運輸を營めり、初め助役村田省藏氏、支店長たりしが、余が經過當時は、去年宜昌の同支店員たりし中川重治氏、其後を襲き居たり、

瑞和洋行は神田省三氏の經營するところにして、主として日本賣藥を販賣、上海發行の翻譯日本教科書の取次をなせり、賣藥中尤も支那人に歡迎せらるゝは、太田胃散にして、次は守田實丹なりと云ふ、此二藥の喝采を博する理由は、一は反應の速なり、一は清涼的刺激性を帯びたる爲なり、こは支那内地にて賣藥業を營まんと欲する者



の特に注意を要する點なり、水藥の如きは成可く濃厚なる有色性たるを妙とす、若し無色なれば、往往、一見して効能なきものとして排斥せらるることあり、而して水藥と散藥丸藥の勢力を言へば、水藥は最も劣位に在り、  
日森洋行は大阪なる帝國ブラッシ會社の出張店にして、西本三藏氏の主管に屬し、刷毛の主料たる豕毛買收を以て營業とす、長江沿岸に於て、本邦人の此業に従事するもの、當時西本氏一人ありしのみ、重慶にて蒐收したる原毛は、多く黒色にて、皮より剥去したるまゝの、外見極めて不潔なるものなるが、本邦に輸送したる後、漂白せられて、純白色となり、やがて刷毛中の最高位として、市場に送らるるもの、支那内地にては、市街にあらざる限り、殆ど家毎に飼養するを以て、其毛も隨處に求むるを得れども、從來之が産地としては、北清一帯を以て主要と爲す、是れ氣候寒冷の關係より、毛量豊富にして、其質亦た硬堅なる爲めなるべし、價格は、南北地平均毎百斤四五兩の間に在るが如し、  
太和洋行は成都製革公司經理人石塚豐次郎氏が、重慶在留の際、創設するところにして、現在は氏の商友たる磯崎三一氏之を主管せり、其營業は、日本食料品及び雜貨販賣にして、重慶日商中の老舗に屬し、重慶在留本邦人は勿論、成都の本邦人等に郷

食を供給する唯一の機關なり、

有鄰公司是宮阪九郎氏の經營に屬する黃磷燐寸製造會社にして、其規模小ならず、創業以來既に數年を閱し、將來頗る發展の望を屬せらる、

他に一つ有鄰公司に後れて、邦人會根原某氏の創設に係る燐寸公司あり、創業以來日尙は淺けれども、是亦た漸を以て進境に向ひつゝありと云ふ、

紀念すべき重慶は、主として上述の六商店を以て、我商勢を代表せり、既往十餘年間に於ける我發展の結果は、實に此くの如きに過ぎざれども、吾人は以上の諸氏が、遠く三峽の險を超え、諸多の困難を排し、其商旗を樹て、一び樹てたる商旗は、斷じて之を撤せざる意氣を以て、其業とする所に従はれつゝあるを見ては、未だ曾て其志を壯せずんば、あらず、去り乍ら、吾人旬日間の察する所を以てせば、重慶の地は、三峽の改修せられざる限り、川漢鐵道の開通せざる限り、本邦商人乃至外國商人の事業は、今日以上、歩を進むること、甚だ難かるべしと信ず、而して三峽は終古改修の時無かるべく、川漢鐵道も預め其成るの日を卜す可らざれば、重慶が開港場たる面目を發揮するは、尙ほ遠き將來に在り、讀者若し同じく長江沿岸なる漢口が、年年許多の外人を招徠し、我が日本の如きも、居留地經營に着手すべく餘儀なくせられたる位



に發展するに拘はらず、重慶が差したる影響をも蒙らざるを想は、亦以て望んで就き易からざる處たるを知るに足るべし。

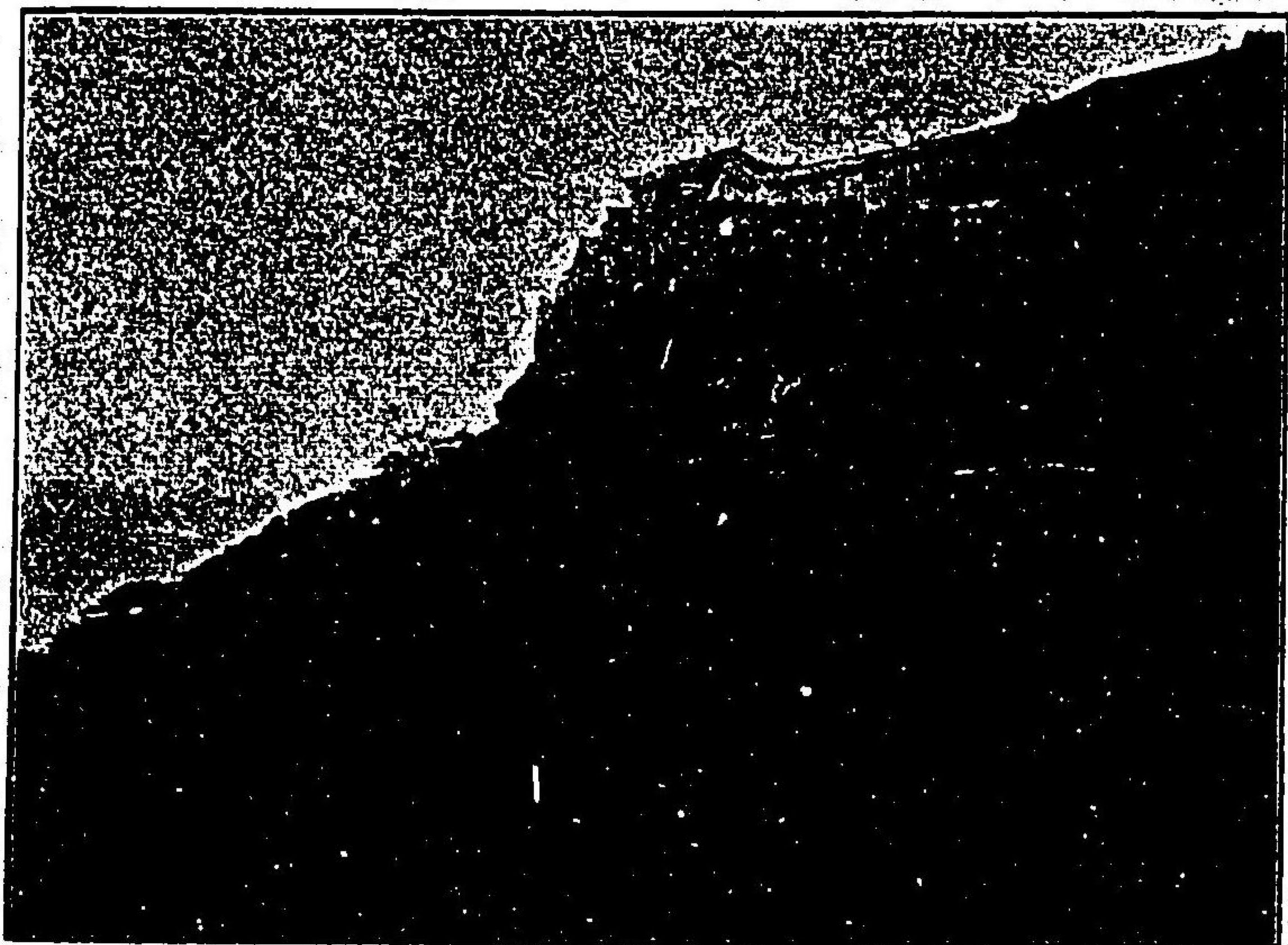
重慶の本邦事業家としては、右の商人以外に、尙一人小野徳太郎といふ人の教育に従事せるがあり、氏は明治三十八年に渡來せられ、獨力を以て、一普通學堂を城内に開けり、何様場所柄が場所柄とて、氏の學校設立は、聊か地利を得ざるの憾あり、されども、其學校が普通程度なると、他に日本教習なる者、此地に居らざる爲め、陸續入學の申込ありて、余が經過當時は、己に開校中に屬せり、支那には西洋人の經營せる學校は各地に在れども、本邦人の創設せる者は、極めて希に、此點に於ても、彼れ西洋人に一步を譲り居けるを、爰に小野氏が西清の一角に、一校を創められたるは、其規模の大小は、兎も角、日清兩國の爲に、其舉を賀せざるを得ず。

西洋商人は、商店を開ける者、佛商信義昌の外、余の目に觸れたるもの無し、勿論其他にも幾許かは有るべけん、要するに、西洋商館としては、數ふるに足るものあらざるに似たり、然れども、竊に彼等の云爲する所を察するに、各個人の發展を謀るよりは、先づ根柢に於て、勢力を扶植するを急とし、所謂網を擧げば目從ふの方針に向ひ、其手腕を振ひ居れるが如し、此論は姑く措き、現在重慶在留西洋人の事業中、尤も耳

西洋商人



重慶耶蘇教會堂



重慶臨江門外



四  
人  
の  
病  
院

目に響くものは、彼等の唯一手段たる病院及び宣教となす、此點は本邦人の仿ふ能はざる所にして、彼等は之を以て着着其功を收むるだけそれだけ、本邦人は其發展上に消極的侵害を被ると謂ふべし。

病院の最大なる者を、米人ドクトル、マーカードネーの設立せるものとす、設立者は前十餘年、空拳にて此地に來りしが、如何なる手腕や有りけん、内外官民の信用を博し、全然其義捐を以て、重慶一等の形勝の地を下し、圖に見る如き、壯大なる病院を建造せり、其義捐は今も尙ほ繼續中にて、徳丸領事も毎年八十元を捐出すべき約束なりと云ふ、醫員は自己が院長兼醫長たる外、助手一人、米國人の看護婦一人にて、常に男女合計六七十人の支那人患者を有せり、勿論支那人に對しては、一切診察料を徴せざるなり。

マーカードネー病院に亞ぐを、佛國天主教會の設立せる者とす、該院は醫師一名、看護婦五名を有し、其勢力、マーカードネーと頡頏せり、之に亞ぐは英國宣教師の設立せるものにて、其規模前二者に及ばざれども、醫術を以て開ゆると云ふ、明治三十八年中、獨乙軍醫に由り、又一院設立せられたり、此病院は流石に正則に醫學を修めたる軍醫の開く所なるを以て、醫術は前三者を凌駕し、漸漸好評を博しつゝありとぞ。



病院政策の奏功率ね此くの如し、

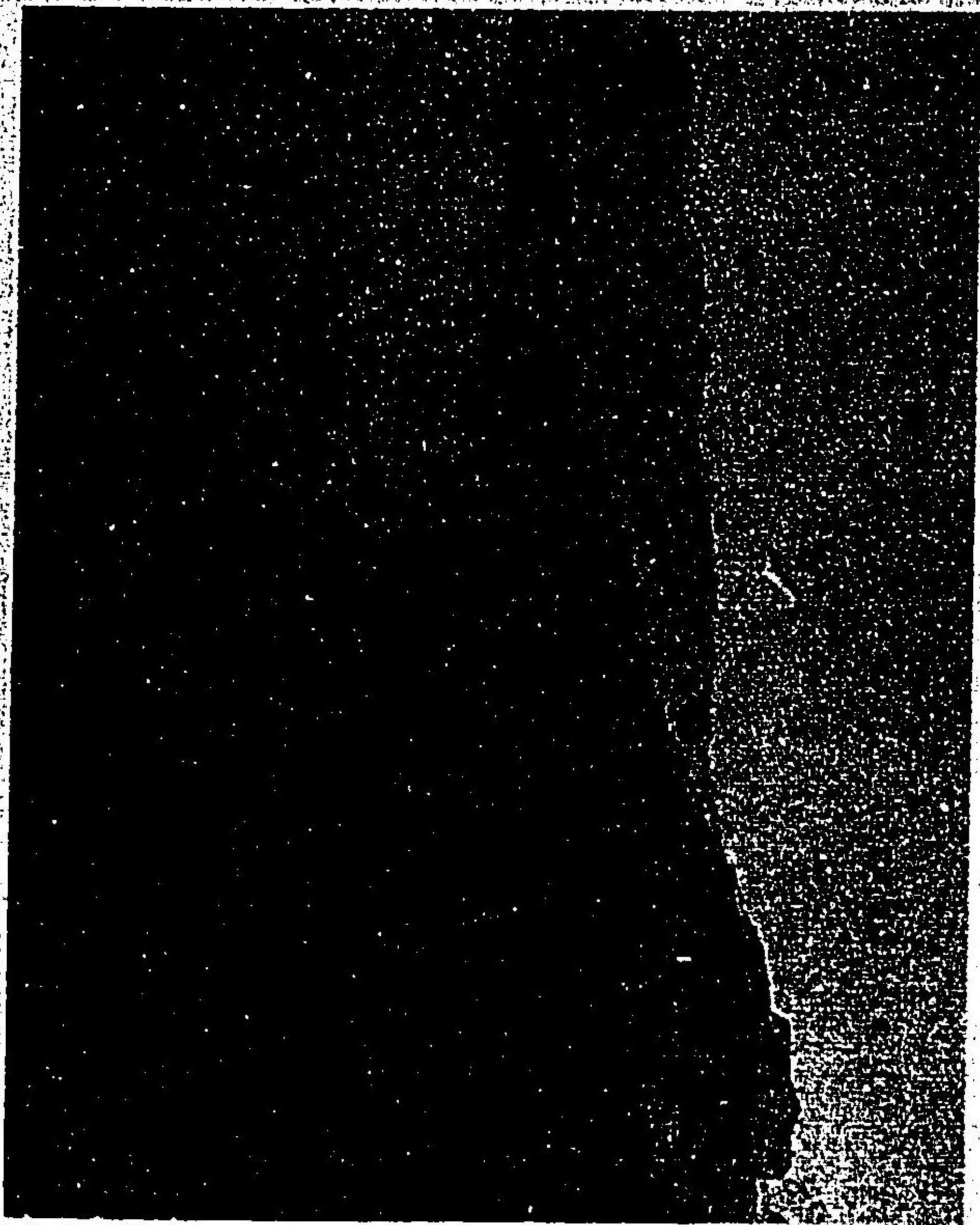
余は宜昌に於て、成都に於て、又重慶に於て、幾多の成功せる西洋病院を見たり、願ふに他の地方に於ても亦た復た然らん、然れども、こは西洋人にして始めて成功するものにて、若し本邦醫師か本邦に在りて、之を聞き、或は日本賣藥の好評あるを聞き、其技を挾み、一番支那内地に渡り、巨利を占めんと試みば、多年の星霜を積み、巨萬の資本を投せざるよりは、萬失敗に歸すべし、何となれば彼は多く政治手段として其醫術を用ひ、其志單に利上に存せず、我は最初より絶對的營利を以て其目的とすればなり、況んや之に加ふるに、支那の中流以上の輩は、決して外國醫者に頼らざるを以てするに於けるをや、

領事館及び居留地

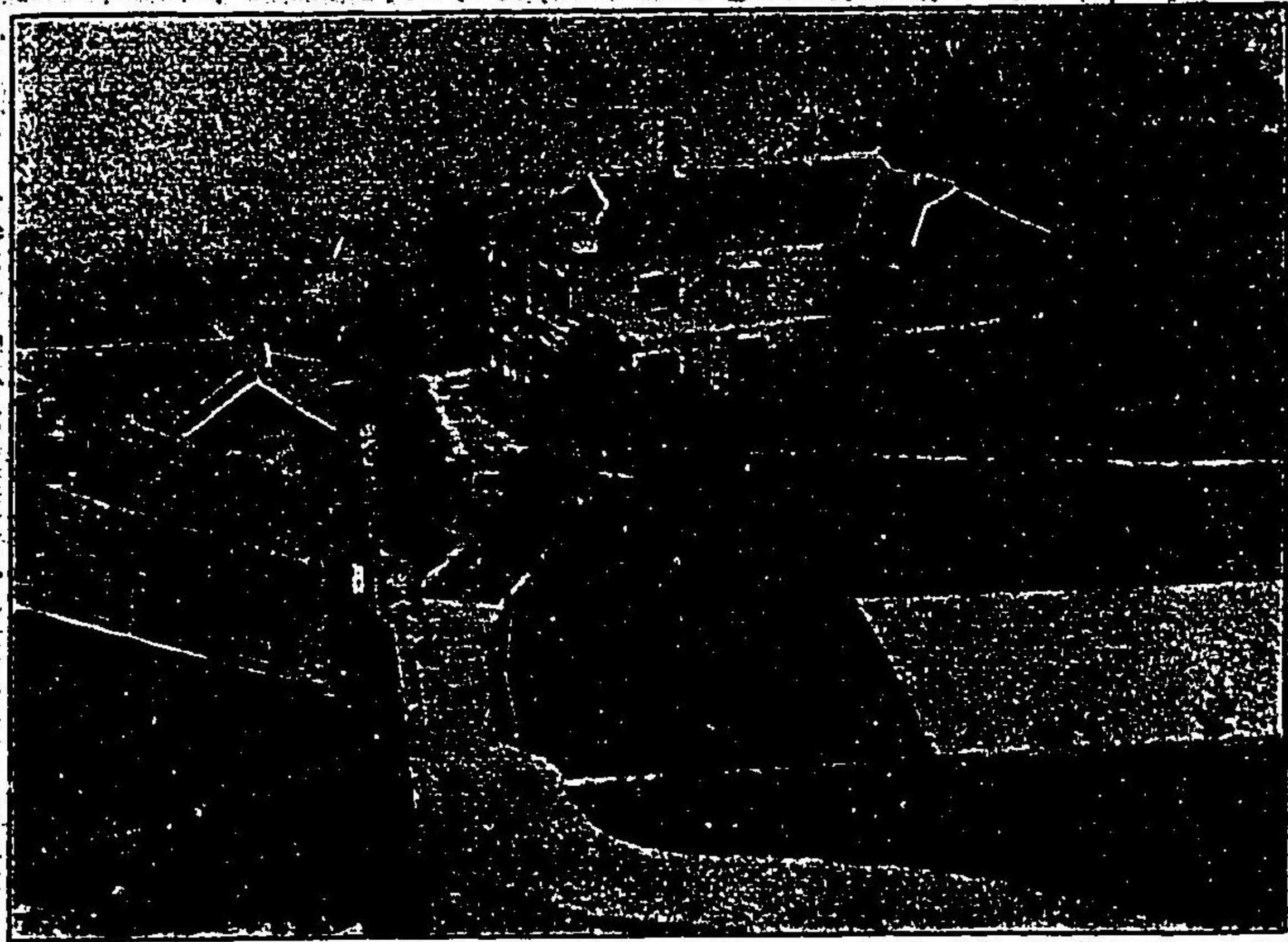
領事館及び居留地　領事館は日、英、佛、米、獨の四國と爲す、其中、英、佛、獨の三領事は常に遊歴滞在の名の下に成都に駐在し、重慶の本館には、副領事或は書記生を留めて其事に任せしむ、帝國領事館は城内の最後街に在り、支那家屋を以て之に充用せり、吾人は徒に其建築の如何を以て、心を動すものに非ざれども、英國領事館杯と見較べ、我領事館の見榮無きに對しては、人情忤怩たらざらんと欲するも得べからざるものあり、



大江下流の風景







重慶

居留地を有するは、獨り我が日本のみ然れども、地域内には、従前より居住せる十餘戸の農家と、有鄰公司の製造場とあるに過ぎずと聞きては、空しく長吁を發する外無し、在留邦人が居留地に住せずして、専ら城内に住するは、列國臣民の城内に雜居する限り、帝國臣民も之に準するといふ取極書十四條に因るものなり、

居留地は重慶城朝天門對岸凡そ十餘町の下流なる岸邊に在り、地勢東は山を負ひ、西は楊子江に臨み、南村落に接し、北部は則ち丘陵に連れり、其副員領事館報告に據るに、東西十二町十七間三尺五寸、南北三町十三間五尺九寸、面



碇泊軍艦

積十四萬三千八十坪七合五勺に達す、東西四百丈の内、河岸を去る五十丈の間は夏時江水増漲の時浸水の憂あれば、家屋建築に適せずと云ふ、碇泊軍艦 碇泊せる軍艦は、峡中航行に適する特別建造の小砲艦にして、英國三隻佛國一隻あるのみ、佛艦は大抵重慶に停繫すれども、英艦は夏時の増水に臨めば、常に嘉定重慶間を遊弋せり、我日本も一艦を廻航せしむる議ありとは、夙に聞くとこゝろなるが、今尙ほ之が實行を見ず、

江北廳

江北廳 重慶城の對面嘉陵江の口に、一城あり、重慶府領に屬し、江北廳と名く、此地は重慶と呼應の間に在れども、人情桀驁にして、前年某外國人一名殺害せられたることありと聞く、

銅元局

銅元局 銅元局は重慶上流の對岸に在り、川漢鐵道資本補助の目的を以て、四川省が設立せる銅貨鑄造所なり、設立年時及建築經費等は聞き洩せり、其建築の落成するや、部員を上海に遣し、鑄造器械を購入せしめたるが、派遣せられたる部員は最初回に器械の前半部を購ひ、首尾能く長江を遡りて運搬を了へ、之を局内に置き、再び上海に赴き、器械の後半部を購ひ、又江に由りて運搬し來り、三峽の險も恙無く經過せしに、重慶の下流なる唐家沱に至りて、之を分載せる數隻の巨船は、悉く沈没せり、



重慶茶園圖上

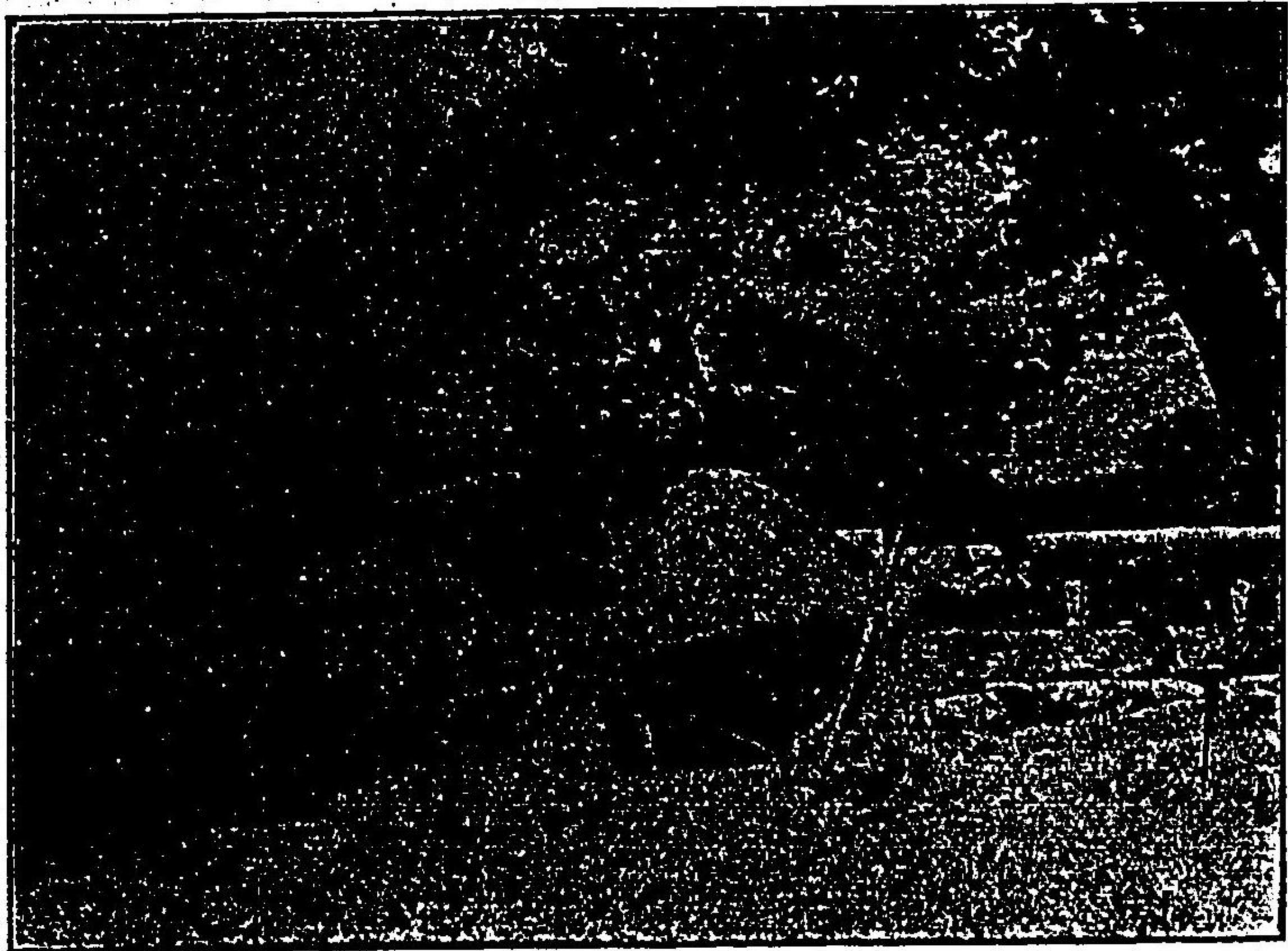


同上



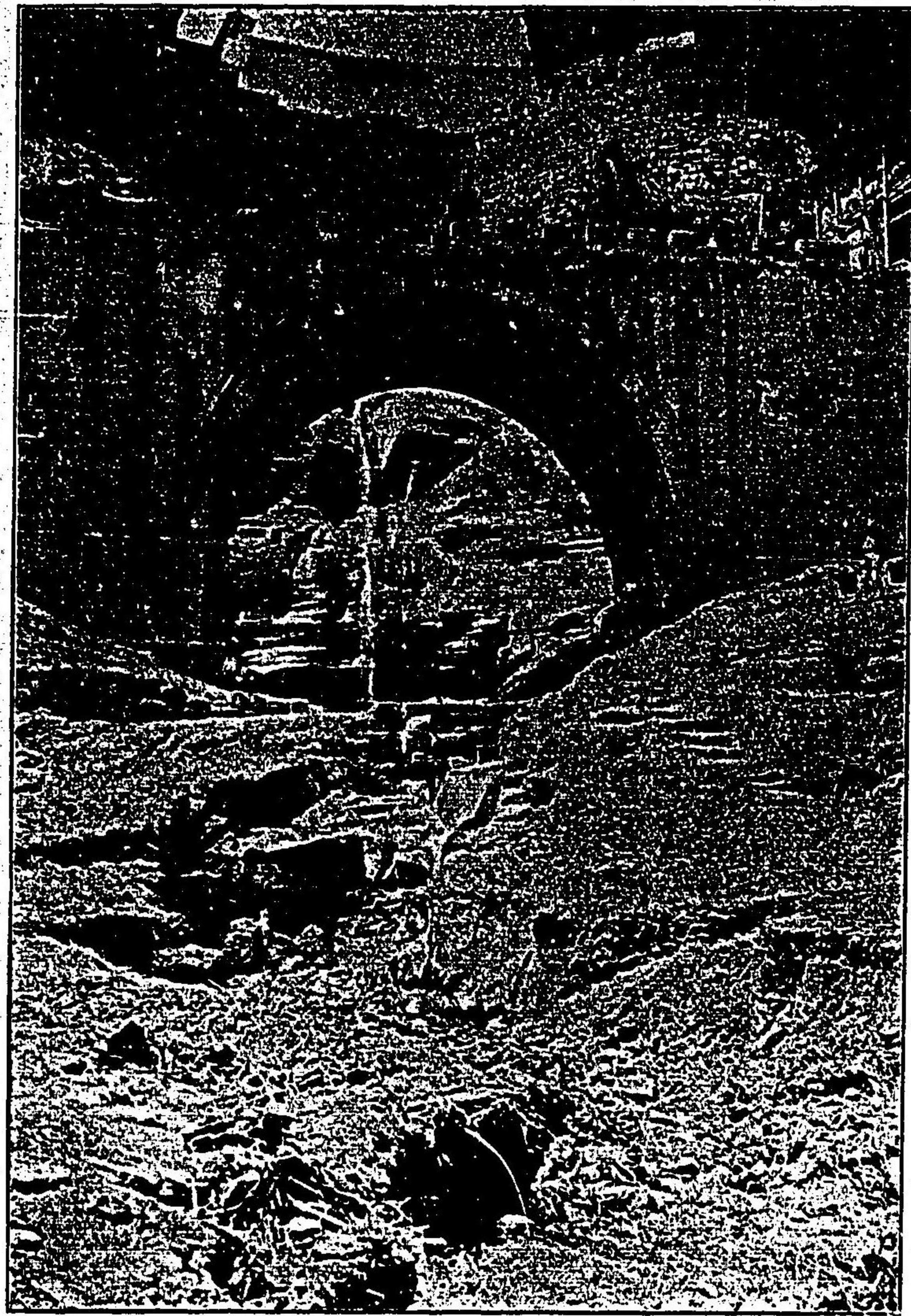


重慶城外野路



重慶南門外馬舍





橋平太外門平太慶重



名勝

塗山

温泉

されば前に運搬を了へたる半部のみにては、全く其用を成さず、更に後半部を注文せんに、其如何なる部分を補ひて可なるかを知らず、沈没以來余が経過當時まで事業中止の姿となり、宏大なる建物のみ、徒に江岸に兀立せり、其後の成行は詳にせざるが、想ふに鐵道計畫も抄抄しく進行せざれば、随つて此局も依然として開辦の運びに至らざるべし、

名勝 重慶も随分名勝に富めりと聞けど、炎暑の爲め、一處も探くること能はず、舊志の記する所に據れば、府城の東南楊子江の南岸(里程明かならず)に塗山と名くる山あり、寰宇記に高さ七里、周圍二十里とあり、禹が諸侯を會せしといふ塗山是なり、又史記夏本紀に云ふところの禹の夫人の家塗山氏の居る所なり、  
 山麓、峽あり、黃葛峽と曰ふ、水經注に所謂江水右逕黃葛峽是なり、地、黃葛樹を生ず、地名之に出づ、又府城の西南、百六十清里、温湯峽と名くる處あり、温泉を以て開、其泉懸崖より落つ、下に浴場を設く、尤も皮膚病に功あり、西本氏會て一遊を試みられたり、泉質も温度も良好なれども、湯槽の不潔なるがため、久しく浴するに堪はずとなり、西清の温泉、恐くは此峽と、楊貴妃が浴せりといふ陝西驪山の温泉との二處なるべし、以上は重慶城外に於ける名勝の最なるものならん、



日本僧の遺墳

重慶府領、府城の西方に、永川と名くる一縣あり、重慶成都間の孔道に當れり、此縣に古より日本僧の墳墓ありと傳へらる、余、縣の中學に教習たりし羽根田輝氏に囑し、墓地の所在并に之に關する傳説の有無を調査せしが、唯だ遺墳ありといふ外、何等の結果を得ざりき。

羅羅

羅羅は苗族の一種にて、下圖は其用ゐる所の樂器の一に屬し、秩父君重慶に於て之を發見せられ、余が爲めに作られたる實寫圖なり、異方殊俗の一斑を示さんと欲し、爰に掲ぐるべくせり、彼等の間には、其笛の名稱有るべけんも、支那人等は單に之を羅羅の笛と呼ぶ、四川西部の巴塘、裏塘等の蠻子が成都に來るが如く、彼等も亦た時時重慶に來遊すと云ふ。

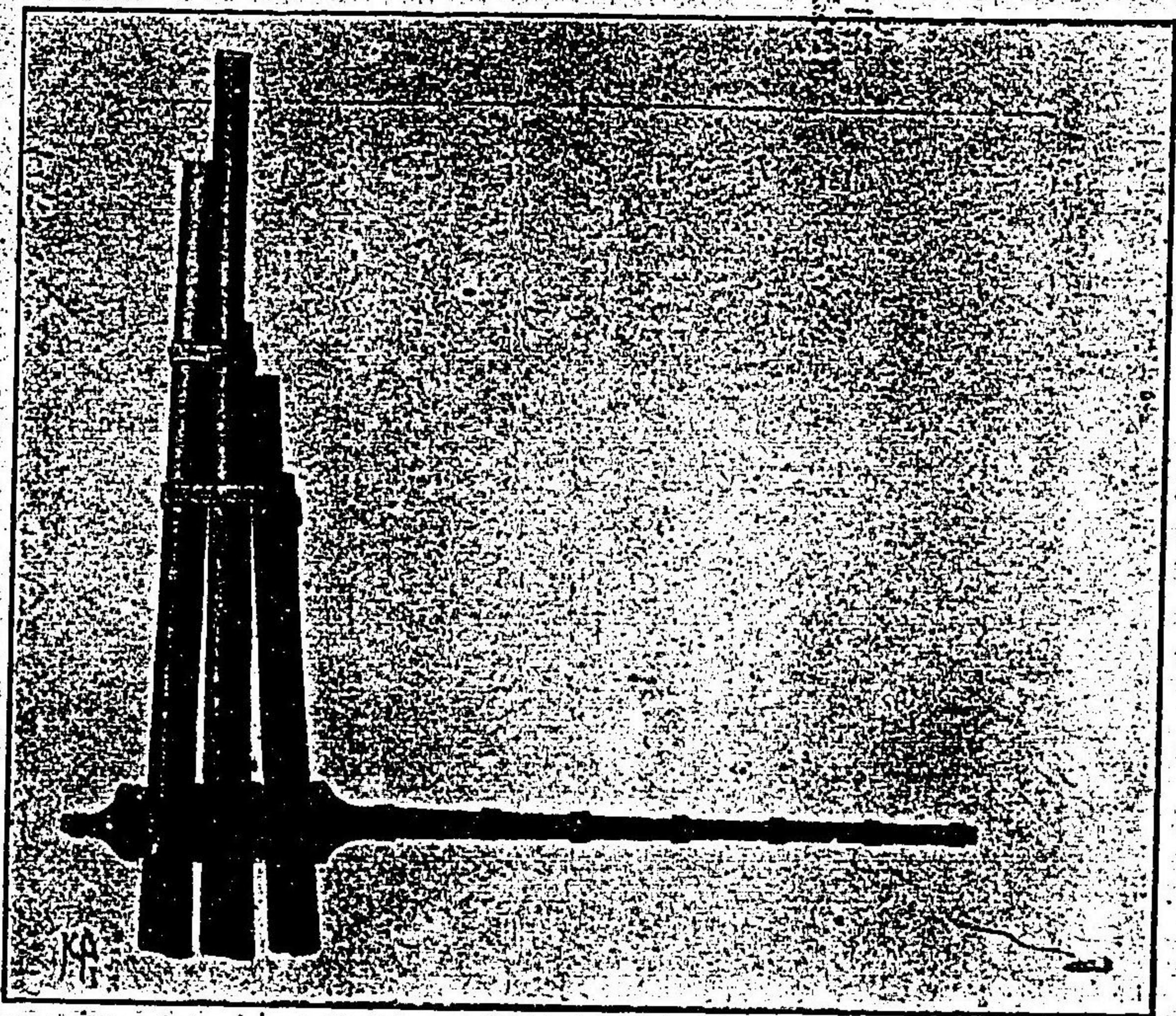
苗族

苗族は、夙に東西専門學者間に於て、實地の研究を遂げられたるを以て、此方面にも何等の智識を有せざる余が、臆説を用ゐる要なしと雖も、少しく聞き得たる所あれば、贅を顧みず、之を述べんと欲す。

苗族

開漢が如くば、苗族は四川西南部より雲南貴州の西南部に散居せる蠻夷にして、支那史上普通に西南夷と呼ぶものなり、而して其族の存在せることは、既に三代の時に知られ、漢の武帝の時に至りて、始めて中國より交通を開けり。

圖六十二



重慶の苗族

爾來今日に至るまで、其種族の或ものは、租貢を政府に納れ、又納租せざるまでも、各自治に由りて、其境に安じ、蜀漢時代に諸葛亮に一征せられたる所謂五月瀘を渡りて深く不毛に入りたるもの、外、格別中國より討伐を被りたることも無くして、今日に及び、同じく蠻夷の族たりと雖も、北方諸狄の常に中原の患をなすと、大に其撰を異にせり、是れ南北地味氣候を別にし、彼れの瘴土、返寒、勢ひ南下せざるを得ざるに反し、此の腴田、温暉、土水のもの、豊足し、自ら中原を犯すの必要なきに由らざらんや、而して其種族の昔に依然として存在するのみならず、漸く繁殖し



て已まざる傾向あるもの實に中原絶大の地漢族を溢出し其れをして移住的侵略  
 を行はしむるを要せざる爲めなり然れども中央政府にして若し佛國政府が計畫  
 せる佛領東京鐵道の目的に想到し又た晩近に於ける佛國と雲南土司との關係并  
 に某國人が土司の一たる干崖に於ける行動を見なば此蠻夷の地を以て永久に化  
 外若しくは半化外として打棄て置く譯には行かざるべし吾人は地理的研究に於  
 ても政治的成行の旁觀に於ても此地方の極めて趣味多きを覺ゆ

苗族分布の地方は前に述ぶる如し而して其最も多きは雲南貴州兩省なり四川の  
 如きは僅に重慶の西南部に位せる一角のみ其部落を稱し總して某某土司といふ  
 四州の西部に在りては雅州府の過半部松潘廳の過半部の地一帶幾んど土司地方  
 なれどもこれ等は所謂蠻子と稱する種族にて苗族とは其類同じからざるが如し  
 苗族文化の程度は一般に低劣にして羅羅族及び他の一二種を除けば純然たる蠻  
 夷なり苗族の種類は余が聞けるだけにても實に七十餘種あり其名稱亦た固より  
 一ならず苗を以て名くるものには青苗白苗紅苗花苗東苗西苗牯羊苗谷蘭苗蘭  
 苗天苗生苗等あり犬を以て名くるものには打牙狝狝剪頭狝狝狝獐狝狝等あり是  
 或は一幹より分れたるやも知る可からず羅羅は即ち羅羅を以て名くるものにて

苗族名稱  
の一斑

特長ある  
苗族

羅羅

分ちて黒羅羅白羅羅の兩種となし一に併せて昆廬といふ凡そ諸苗皆夷種に屬す  
 但た其中宋家蔡家と稱するものは往古に放竄せられたる漢族の遺裔に係り宋家  
 族の如きは間漢字を知れる者あり苗族は又分つて生熟の二種となすを得べし  
 生苗は常に山叢に棲匿し容易に探検者等の目に觸るゝこと無けれども熟苗は力  
 役に服し耕作を營み田租を納め往往漢人の間に出て來ることあり此區別に於て  
 羅羅は熟苗に屬するものなり若し其特長を言へば羅羅最も大部に狛家最も慍悍  
 に生苗最も狠惡なり

黒羅羅又の名烏蠻其俗幽鬼を尊ぶを以て一に羅鬼といふ貴州省の平遠大定黔西  
 威寧地方其居る所なり蜀漢の時烏蠻中濟火と名くる者あり孔明が南征に従ひ孟  
 獲を破りし功を以て羅甸國王に封せられたり羅羅は蠻人に似合はず殊勝にも極  
 めて主思ひにて一旦主長と仰きたる上は凌虐せられて死に至るも尙ほ之を戴き  
 敢へて貳心を挑まざる性質あり其性質ある結果黒羅羅族部の長は蜀漢の濟火以  
 來世世其子孫の占むるところと爲れり其族すへて四十八部あり各部の長を頭目  
 と呼ぶ頭目に九種あり九扯と曰ふ其最も貴き者を更苴といふ是れ即ち中央頭目  
 にして全羅羅の主權者なり

重慶部



黒羅羅人は、長身にして黒面白歯、高く頭髪を額上に束ね、青布裘を以て之に被ぶ、狀一角を戴く如し、其出て行くや、笠を戴きて、穂を荷ふ、主長に見る時、禮必ず羊皮一方を拖す、性質剛悍にして、氣力を尙び、古來水西(按ずるに水西は烏江の西、彼等の住地は烏江の西に位す)羅鬼、斷頭、掉尾の諺ある位なり、又彼等の間には、特種の科斗狀の文字有りて、他種の或は繩を結び木を刻して號となすより、一段の進境を呈せり、其集りて飲食するや、飯一盤、水一盃を置き、各一本の匙を以て飯を抄ひ、口中に打込むこと、丸を投する如し、其酒を飲む、之を盞に盛り、蘆管を以て之を啜ふ、性又潔癖、食畢れは必ず漱滌して齒を刷す、

彼等の間には、醫者といふもの有らず、疾病に際しては、巫女を請ふて、瘡を祈るなり、其巫を大奚婆と名く、巫は病を祈るのみならず、疑事は巨細と無く、之に由りて決せらる、又彼等醜惡の何たるを知らず、悉報旁通、恬として耻ぢず、然れども、家系は正妻所出の長子に非されは、繼くを得ず、一方に禽獸の行ありて、一方に長子相續を重する、其平夷の合はざるどころ、夷狄の本領とや謂はん、

彼等は甚だ武具製作に長せり、堅甲利兵、標槍勁弓、皆其手に作らる、矢末には、一般蠻族の如く、一種の劇毒を付せり、その矢一たび皮肉に觸るれば、立ろに死するといふ、

彼等か山野に鹿兔を狩るや、皆駿馬を驅り、手に長槍を持し、好距離を得るに及び、槍を擧げて、獸に擲刺するなり、其徒行するものは、三尺長の小弩を發して、獸を射る、何れも手練の巧妙なる百發百中、一失なしと聞く、

白羅羅一名白蠻、貴州省、永寧州、慕役司及び水西等の地方に居る種族、黒羅羅に同じ、(何故に白羅羅と名くるを知らず)しかれども、文化の度、黒種に劣れり、文字なるもの無く、尙ほ結繩刻木を以て信とせり、飲食、盤盃と箸を用ゐず、鼠、雀、蚺、蝮、其他の昆蟲、手あたり次第に、三足釜を以て燂炙し、相集りて食ふ、死者あれば、尸を牛馬の革に裹み、野に出して之を焚く、白羅羅中、貴州安順府普定地方に居るものあり、一に阿和羅羅と稱す、俗、他の白羅羅と同じけれども、此種は稍や生産に通じ、平生販茶を以て業とせり、

再ひ羅羅の笛に就て述へん、余は花苗か此笛を用ゐる圖を見たり、されば、此笛は廣く苗族に行はれ、特に重慶地方にて、羅羅の笛といふものは、たまたま羅羅人の所し遣せるか故に非すやと思はる、花苗(貴州省新貴縣地方に居る)に一、艶俗あり、初春の候、男女打雜りて野外に出て、燈樂を奏して跳舞す、之を跳月と曰ふ、其時男子例の羅羅の笛を吹き、女子他の樂器を鳴して和す、其跳舞に充てられたる地を、月場と稱す、



月場の會

舞踊の間に、男子已が意に中る女子を刁挑し去るなり、月場の會は彼等に取りて、實に一年の最快なり。

前重慶領事加藤氏重慶駐在の時、羅羅人の寫真及其服飾の實物を得、之を東京帝室博物館に寄せられ、現に同館内に陳列しあり、余は讀者の往き觀られんことを望む、余か羅羅及苗族に關し聞くと、以上述ふる如きに過ぎず、苗族は少數の支那人及び一二の本邦學者、歐洲人の旅行家に研究せられたる外、他に詳細なる調査を遂げたるものなし、或は之れ有らん後の南蜀、雲貴地方に遊はん人、冀くは其實際に就きて之を究め、其結果を發表し、以て學界に補益せられんことを。

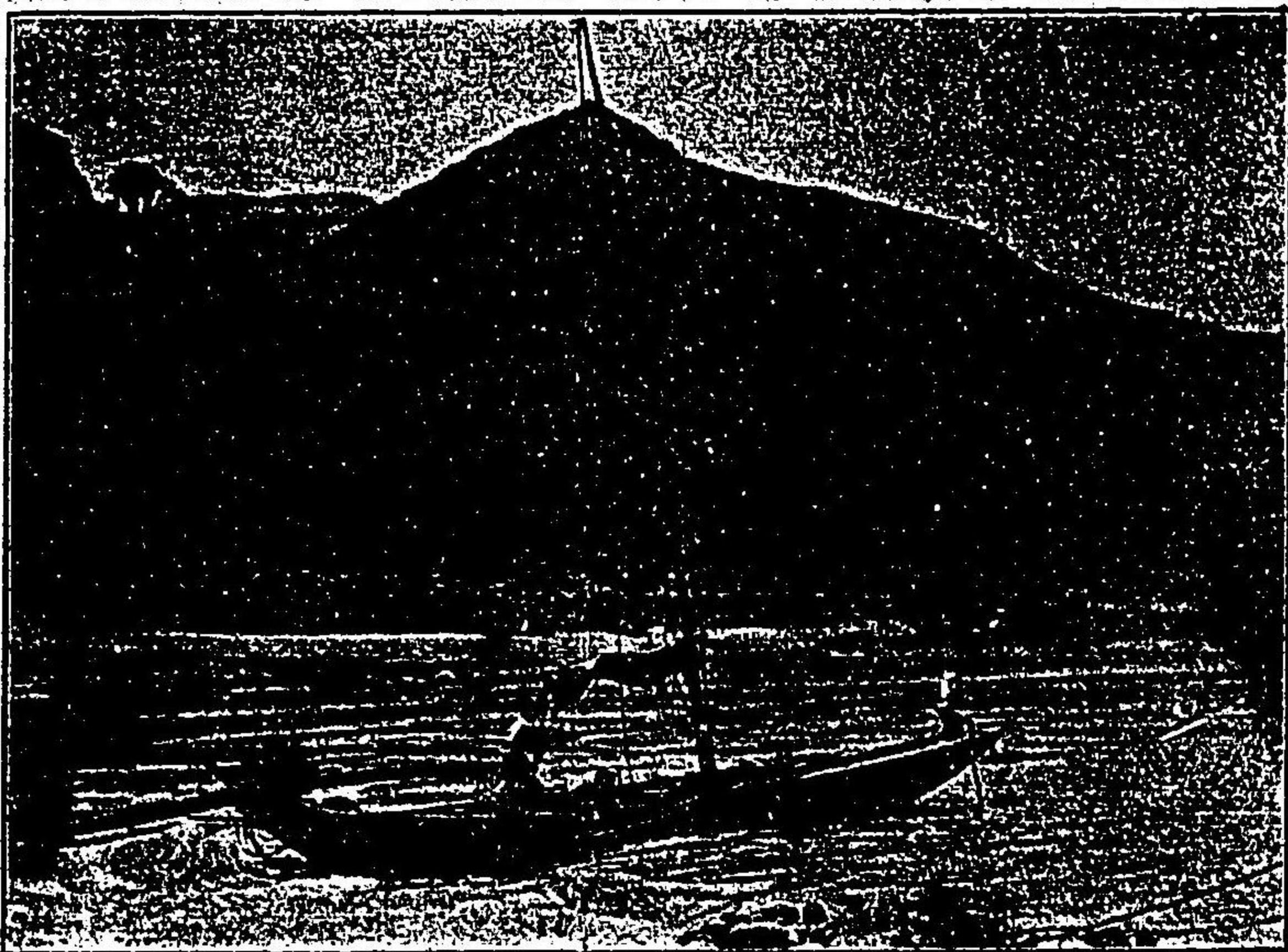
一撮毛

余上海に在る時、一骨董商、一軸の繪卷を持し來れり、卷徑三寸餘、高さ一尺餘、圖は雲南地方に住する一撮毛といふ夷族(苗族)の一種なる(へし)の生活状態を寫せるものなり、余其半はさて開き見たるに、男子は頭を剃り、顛頂に一撮の毛髮を存す、狀あたかも慈姑の把手の如し、族稱の由りて起る所と知られたり、其他彼等か飲食、機織、耕作等凡百の状態、皆密筆を以て畫出せり、當時之を購はんとも思はざりしか、試に其價を問ひ、五十圓と聞き、一笑に付し去れり、此稿を作るに臨み、思ひ出したるまゝ附記す。

重慶を去る

第六十三

紅船



重慶府より宜昌府に至る

重慶府より宜昌府に至る

二十八日 重慶を發す、是れより先き中川氏を煩し、公司の支那人と碼頭に赴きて舟を求めしか、賃錢の相談纏らす、會ま磯崎氏より一艘心當りありと報し越されしを以て、又た氏を雇して碼頭に至り、遂に其舟を雇ふことに決せり、船賃は、宜昌まで二十一兩と約す、此時恰かも江水増漲期に臨めるを以て、德丸氏特に川東兵備道に知照し、紅船一隻を發せしめらる。

紅船は、官備へて江中の救助に充つる輕舸なり、紅く船體を塗れるを以て、紅船とは名く、成都より宜昌に至る間、沿岸府縣、及び險灘所在の地若

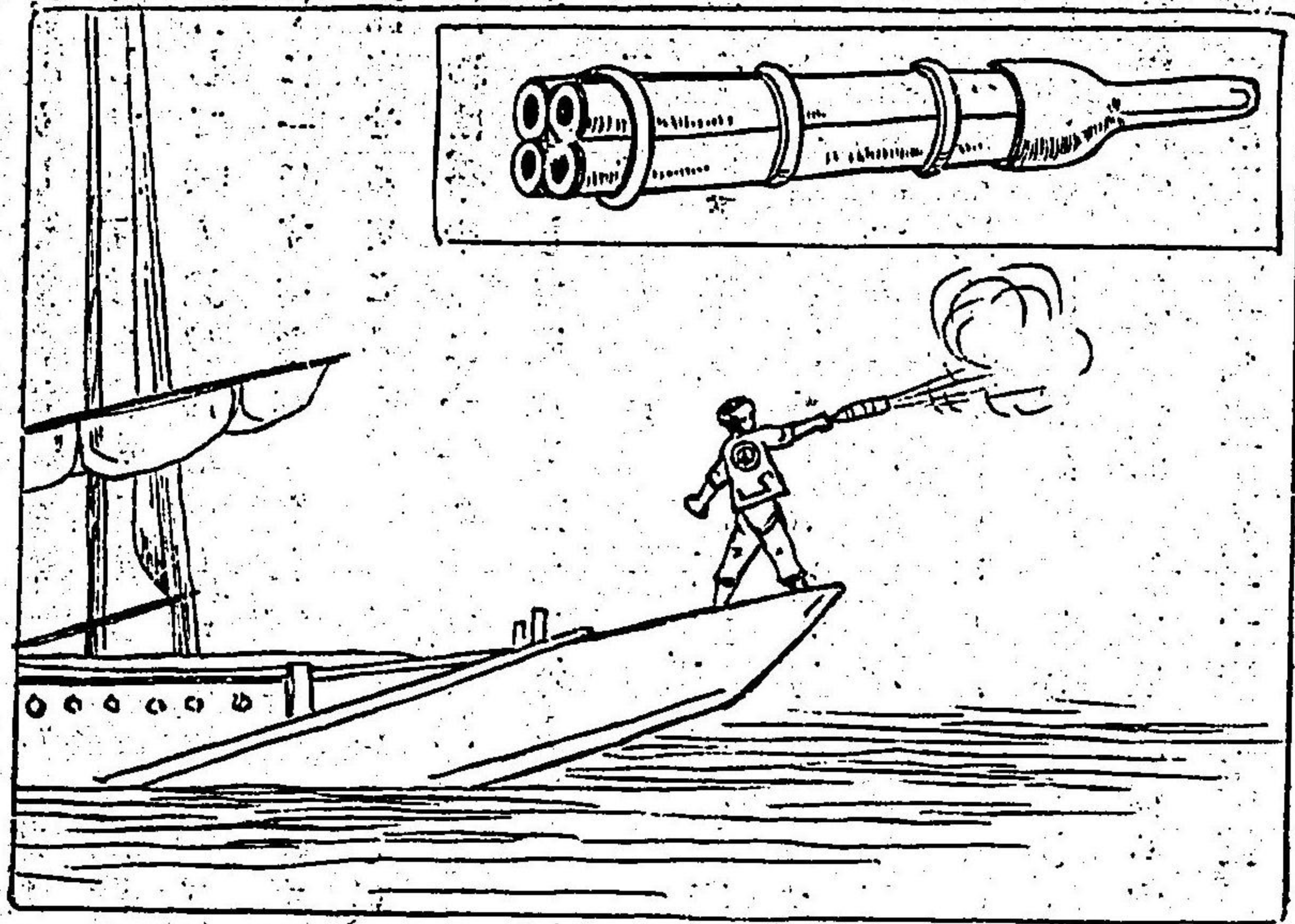


しくは其最寄の津驛、大抵若干隻を準備し、江客の請求ある時、或は難船等に際して之を發する者どす、但しこは成都宜昌間に限られたるか、支那各地の水路を通じて然るか、余未だ之を詳にせず、其船體圖に示すか如し、柁の長さ殆ど船に等し、故に激流急灘に當りても、能く船體の廻轉するを免る、且つ船體輕小なるを以て、止に駛走快速なるのみならず、操縦自在の爲め、又能く暗礁岩嘴等を廻避するを得るなり、水手は悉く官兵にて、一隻の乗組四五人となす、雇費に就ては、別に制規なく、雇業者より、水兵の員數、雇用の日數、旅程の長短等を按し、隨意に酒錢として、全員に給與するの例なり、但し途中に於て、諸種の使役に供するを得ること、猶ほ陸程に於ける從兵の如し、紅船は成都宜昌間に備へ付けらるれども、實際其必要を感ずるは、多く重慶以下に在り、

此日は午前中に解纜すへき筈なりしか、糧食薪炭等の調達、及び雜事に妨げられ、遂に午後六時を以て領事館を辭し、朝天門外に至りて舟に上る、徳丸氏を始め、在留諸氏皆送り來らる、乗船に磯崎氏より借るところの方六尺に餘る大國旗を樹つ、時方に黄昏宛として落日照大旗の概あり、發船に臨み、舟師爆竹數聲を鳴すこと例の如し、又た手砲數發を放つ、その聲江山に震ふ、改めて謝を諸友に陳し、偕に平安と再會

唐家沱に泊す

第六十四圖



重慶府より宜昌府に至る

とを祝して別る、上陸以來領事館に起臥するもの七日、心身並に暢快を覺えしか、これより又た遂窓窓裡の客と爲る、

朝天門より下る二十五清里、唐家沱に達す、泊す、税關船此に在り、宜昌上流なる平善壩の一關と、上下相應して、峽江の首尾を扼せるなり、夜事無し、關船を訪ふ、年二十五六の英吏一員駐在せり、

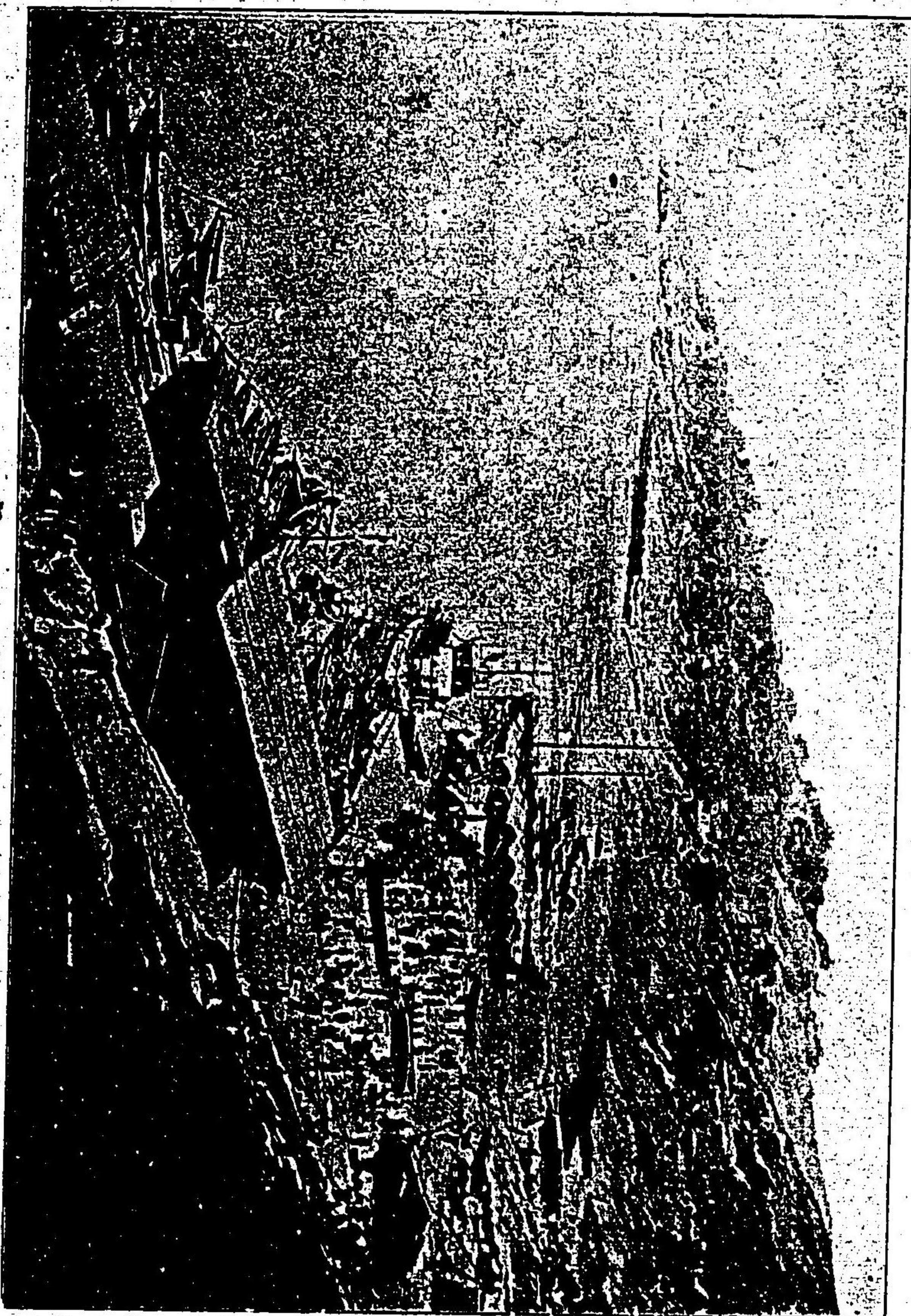
手 唐家沱は僅に數十家の小村なれども、江流の危険と税關とを以て有名なる處なり、一月餘前、一獨乙人、日没後に舟を重慶より出し、此唐家沱に差懸りしに、舟夫等か拒むを斥け、強ひて暗を衝きて、船を進めしか、暗礁に觸れしや柁



を誤りしや、忽ち沈没を招き、人船諸共、幾十尋の深底に葬られたることありといふ。總して峽江は、白晝の航行も極めて危険なるを、特に難處と恐るゝ處を、況んや夜を冒して乗り抜けんとせしは、無謀無智と謂ふへし、舟行に就ては一切舟夫の爲すまゝに一任すべきなり、又た曾て例の銅元局の鑄貨器械を滿載したる數隻の大船の沈没せるところも此處なり、さなきだに、恐れられたる處の、近頃二回の椿事を生じたれば、今や更に一層の險水を以て目せらるゝに至れり、余舩に出て、江上を望みし、も、夜暗くして咫尺を辨せず、唯た水渦の漩聲を聞き、鬼氣轉た人に迫らんと欲するを覺ゆ。

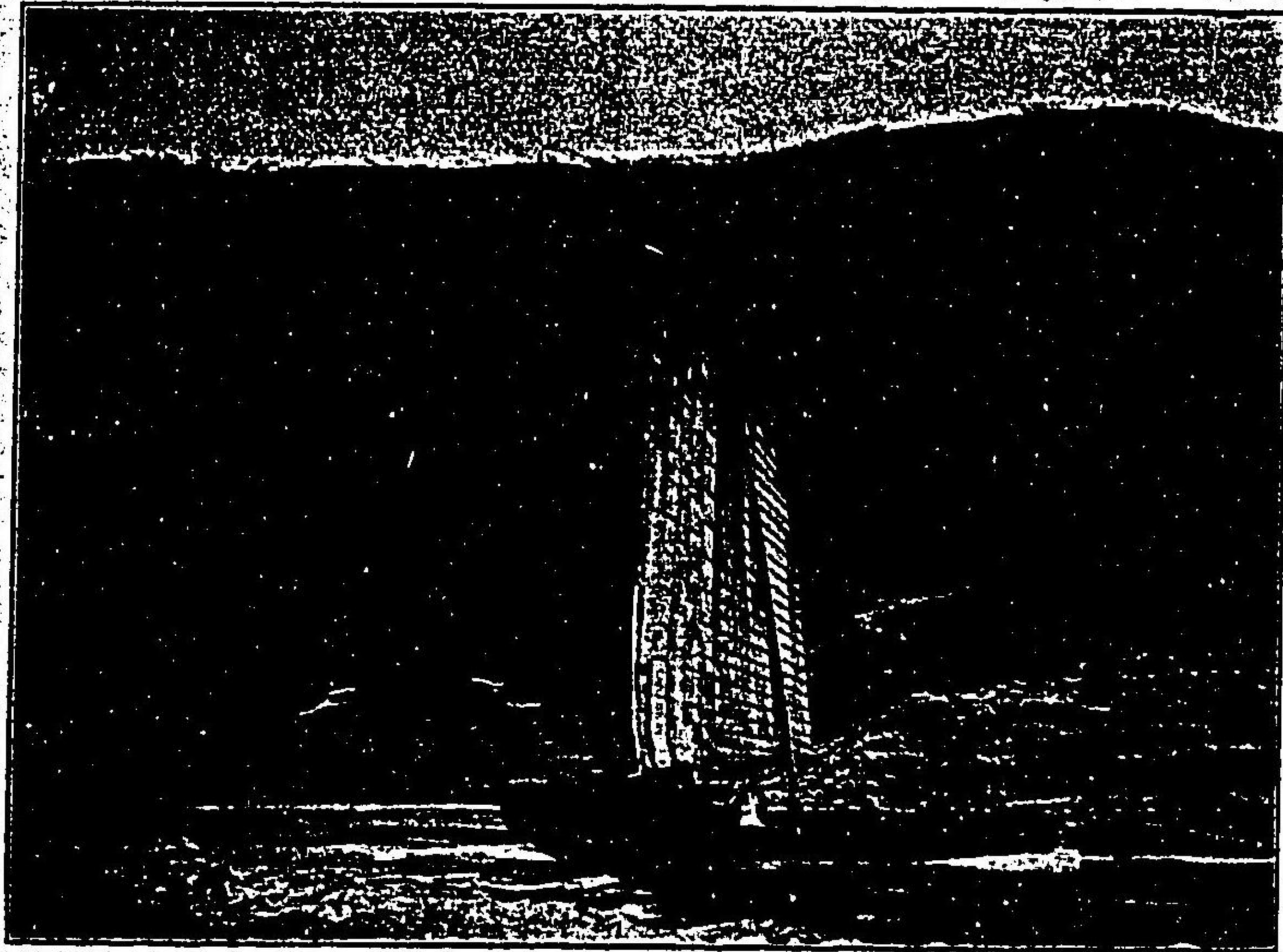
二十九日 曉發、下る百五十三清里、長壽縣に至る、縣城、江左の山巔に在り、江水を距る七八清里を隔つ、但た江、城下に至りて、紆曲して一大灣を成す、水緩に渚平なり、甚だ舟を泊するに便なり、山麓亦た稍や坦地あり、其特に城市を山巔に置けるもの、則ち水災を避くるか爲めならん、城内中學堂に本邦教習難波常雄氏といふ人、在留せらるゝとか聞けど、訪問を果さざりき。

長壽縣の對岸一帶、山開きて地險ならず、江幅亦甚た寬し、縣を去る六十二清里にして、閬市場に至る、又下る三十清里、李渡場を經、又三十清里にして、涪州に至る、州城、江

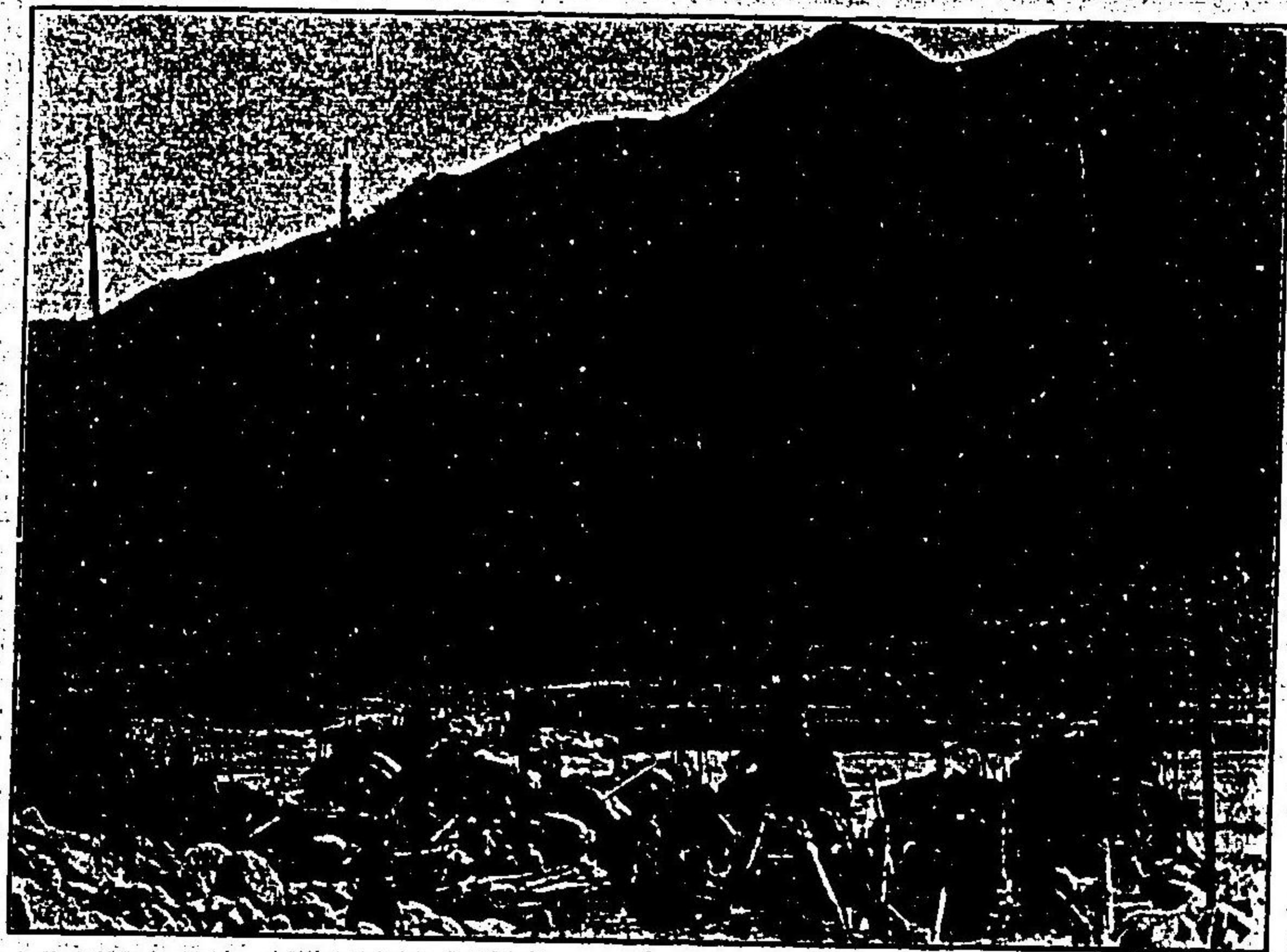


涪州の風景





流下の陀家唐



舟泊



鄂都縣

平都山

陰府

右に在り、人口凡そ六七萬、涪陵江一名黔江河南より來り、此に至りて、大江に注ぐ、西陽に赴くもの、これより此水を廻る、此地四川、貴州、湖南三省の通衝に屬し、尤も要害を以て聞ゆ、世稱して小重慶と名く、涪州より下る七十清里、南沱に至る、泊す、夜蚊多し、行程三百四十五清里、

三十日 下る六十清里、鄂都縣に至る、縣城、江左の山麓に在り、人口凡五萬、地勢險促、且つ常に水害を被る、山上空城一所あり、居民避水の處と爲す、江中蓋背梁と名くる巨石あり、江肥ゆれば水其上を没し、則ち變して猛灘と爲る、其險、鄂都屬第一と稱す、縣を去る數里、平都山といふ一山あり、山中廟一所あり、鄂都廟是なり、廟制極めて廣大、殿堂の多き、城隍殿より天子殿まで、凡そ四十八所あり、廟側大穴あり、俗之を冥府と名く、所謂鄂都の陰府即ち是なり、傳へいふ、此穴前漢の王方平、後漢の陰長生の道を修めて仙化し去るところと、後人王陰二人を以て冥王と爲し、今に至りて、成都の青羊宮と併せて、四川道教の宗處と爲し、來りて香賽する者、徒に四川一省に止らざるなり、

吳船錄七月壬子の記に據れば、廟中晉隋唐時代に成れる古殿、及び隋唐名匠の壁畫唐以來の留題碑刻等百を以て數ふる程ありと云ふ、余炎暑の爲め、上陸する能はず

重慶府より宜昌府に至る



忠州  
四賢堂

略は聞くところを録すること爾り、  
鄆都を去る九十清里、烏羊鎮に至る、鎮江右に在り、對岸を將軍溪と爲す、即ち嚴將軍  
墓の在る所なり、下る三十清里、忠州に至る、州城江左に在り、人口凡そ五萬餘、古の臨  
江郡是なり、城中四賢堂あり、劉晏、陸贄、李吉甫、白居易を祀る、此四氏皆嘗て此州に謫  
せらるゝものなり、聞く、此州産する所の竹、最も韌性に富む、峽江拉船の竹索、材を此  
地に取る者、殊に佳なりと、

禹廟

州城の東、小丘あり、巴臺といふ、城西、西樓あり、白樂天謫居の時、日夕逍遙するところ、  
州南一山、屏風山と名くるあり、其上禹廟を建つ、唐詩選に見えたる杜甫が禹廟の一  
首は之を咏せしもの、此諸勝皆心遊んで身至らず、

忠州に於  
ける白樂  
天

白樂天向きに江州に司馬たり、元和十三年、忠州刺史に貶せられ、翌春を以て任に赴  
く、流石の樂天も三峽の險、任地の索寞には一驚を吃したらめ、自江州至忠州の一詩、  
先づ彼れが最初の感懐を見るへし、曰く、前任潯陽日、已歎賓朋寡、忽忽抱愛懷、出門無  
處寫、今來轉深僻、窮峽巔山下、五月斷行舟、澗瀆正如馬、巴人類猿狖、嬰鑠滿山野、敢望見  
交親、喜逢似人者、斯くて彼は足懸け三年を忠州に送り、穆宗即位の元年、長慶元年、  
を以て召還さる、風に委する、黃葉、再ひ春に霑ひ、霜を負ふ、枯葵、復た日に向ふを得た

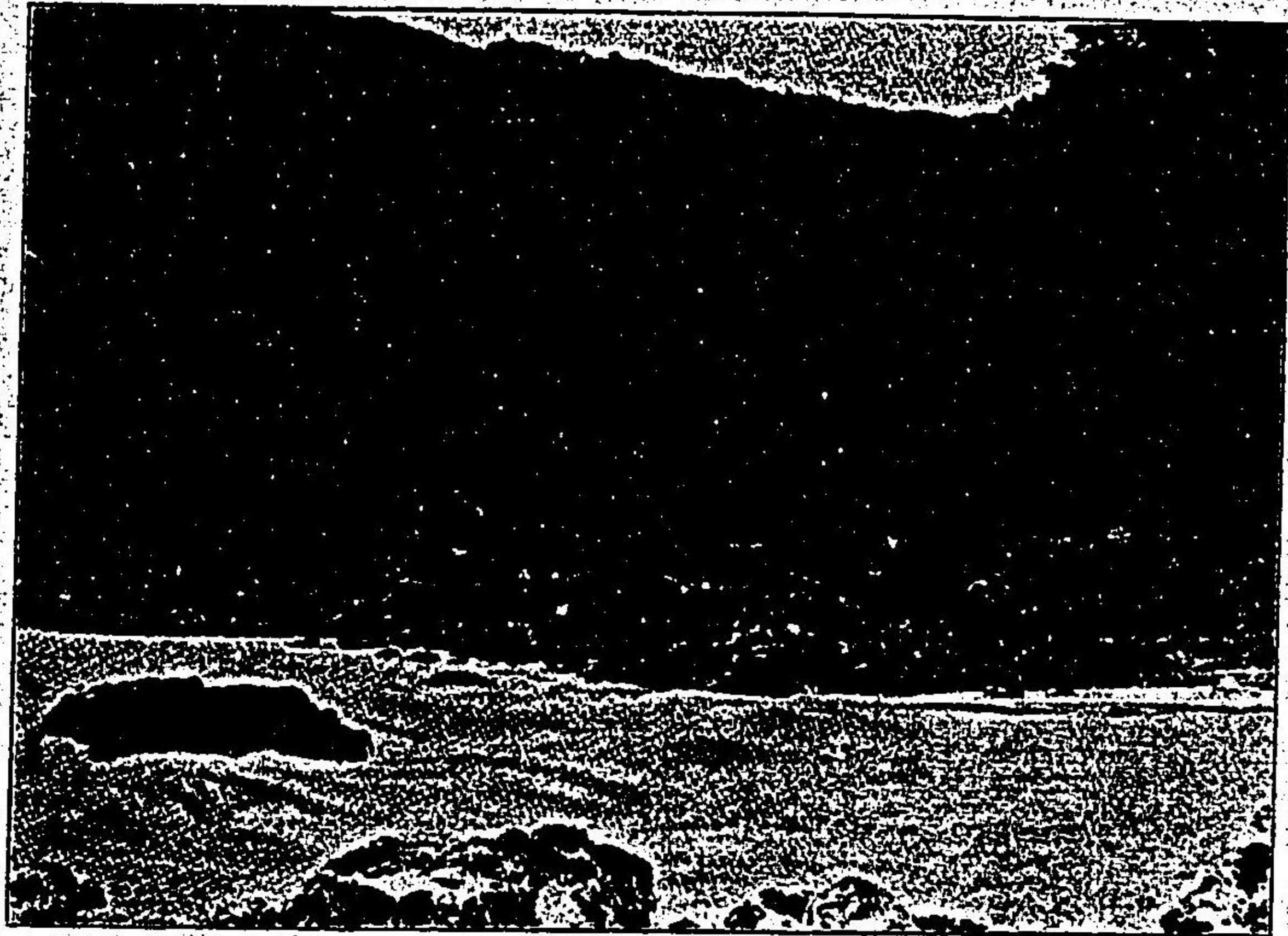
樂天忠州  
の三年

白樂天と  
杜子美と

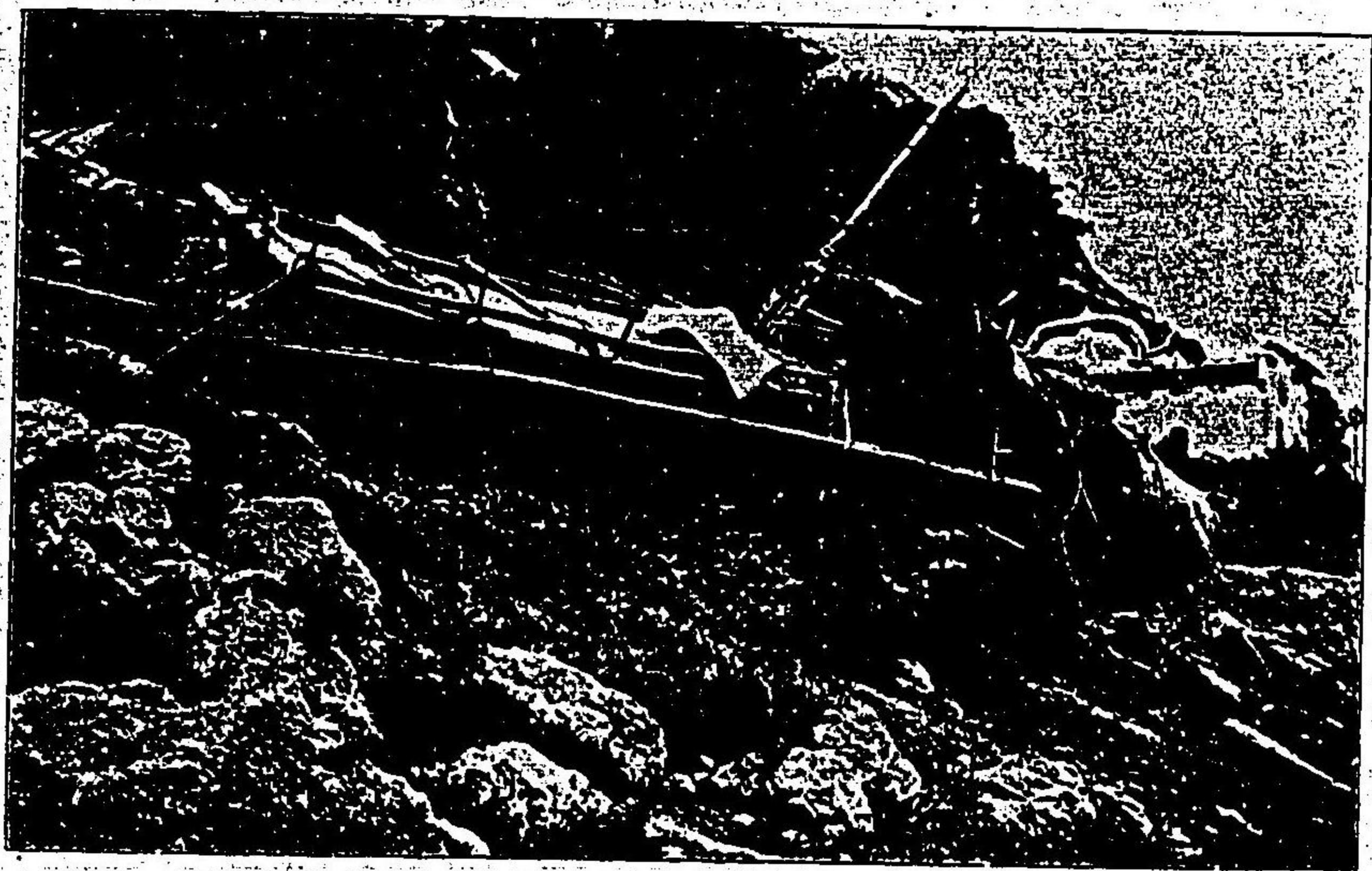
忠州の三年は樂天最大の悲境なり、其專城を授けられたる如き、彼れ奏して喜極ま  
ると曰ふと雖も、私心豈快快たらざるを得んや、然れども彼は尙ほ此間に郡治と逍  
遙との樂む可きものあるを看出せり、東坡種花の第二首を見れば、其志を知るに足ら  
ん、步東坡、西樓月、九日登巴臺、其餘忠州多篇の詩、或は悽涼の嘆を洩すものあるも、彼  
か逍遙遊の意は、自ら筆墨の上に現はれたり、治功に至りては、州中別に遺蹟の存す  
るものなければ、後年彼れが白公堤といはるゝ堤防を築き、錢塘湖を修めたる等の  
事業より考ふれば、忠州に在りても、必ず徳政を布きたるを想ふへし、余は詩中勸農  
均賦租、省事寬刑書と曰ふを見て、更に白氏が忠州に於ける云爲の如何を知る、  
白樂天と杜子美とが、詩人として、不運の人として、前後巴蜀に入りたるは、好個の配  
合と謂ふへし、而して兩者其性質を異にするのみならず、子美が各地に奔走し、遂に  
成都を去り、夔州に流寓し、此處にても具さに生計に苦み、纔に峽を下り、中原に出る  
に及んで、江水に溺死したると、樂天が蜀の邊僻たる忠州に居り、足多く州外に出で  
ず、否泰循環、再ひ鷓鴣の班に回りたるも、幸不幸何ぞ其れ此くの如く甚しきや、今兩  
者か蜀中の作を見るに、杜は則ち滿幅の荆棘、動もすれば人を鉤せんと欲す、白は則

重慶府より宜昌府に至る



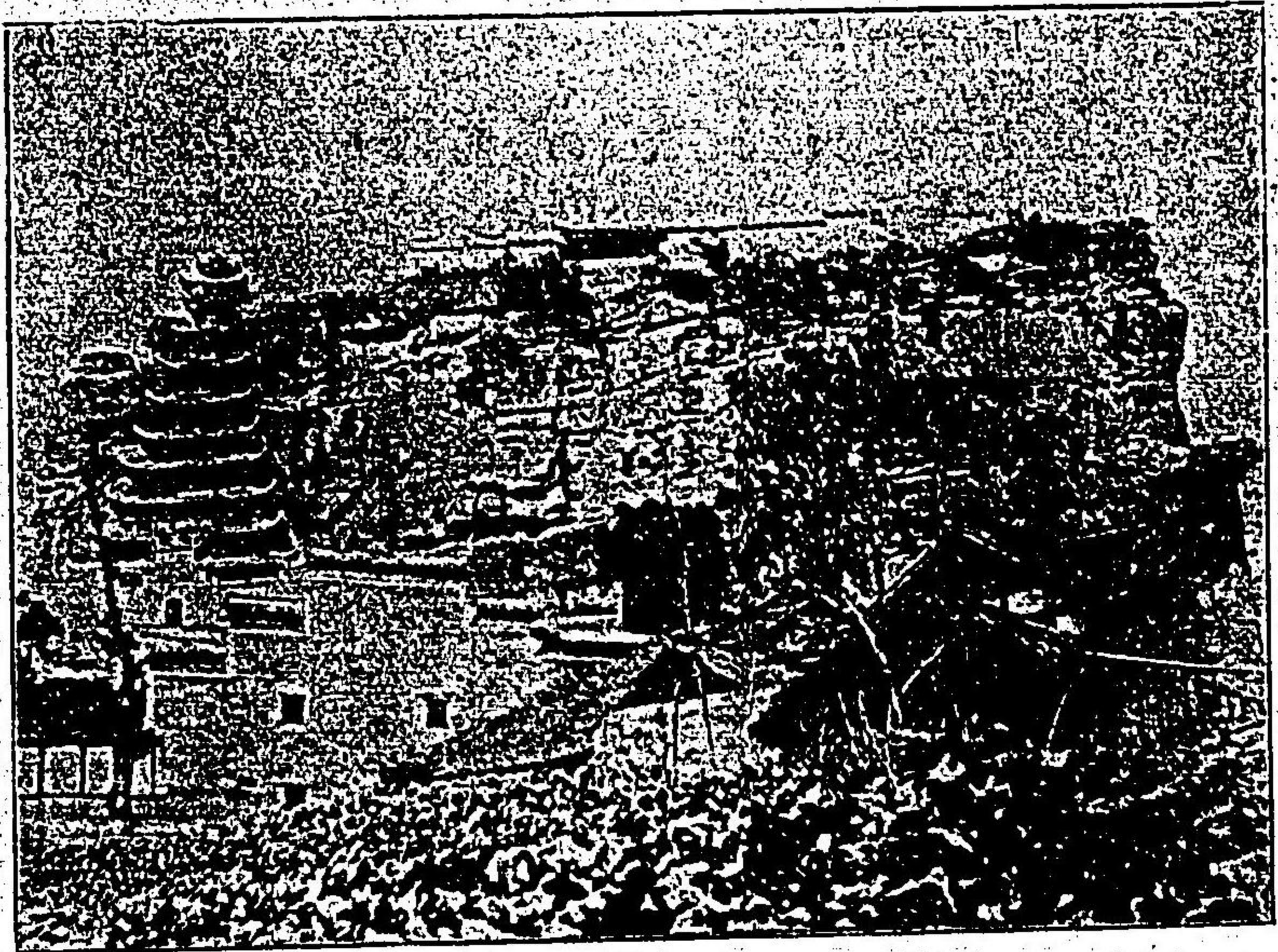


灘の心の巨巖



船破難

第六十五  
石寶寨



石寶寨 (→)

ち花竹洒然見る者怡色あり、皆己むを得ざるに出つと雖も、抑も亦た二人心を乗るの同しからざるに由るなきを得んや、  
 下る六十清里、石寶寨に至る、石寶寨は、一大石山なり、江の左岸に在り、其麓村戸數十あり、山一に四方山と名つく、方形にして頂坦、水災若くは匪寇に當れば、村民皆難を山上に避く、山上巨廟あり、即ち避難者の入るところなり、山側九層の半截塔あり、これよりして山上に登るへし、山上天井あり、水常に洒れすと、是れ尤も奇とすへし、岩の對岸を西界沱とす、石柱廳に至るの要路に屬す、此邊一帶、江流浩濶、沙汀遠平、甚だ峽